

言葉の由来と成立 「猫」と「ねこ」から

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2015 年 3 月

平野杏奈

目次

1	はじめに.....	4
1.1	研究背景・目的.....	4
1.2	先行研究.....	4
1.3	研究方法.....	5
1.4	研究対象.....	6
2	「猫」と言葉.....	7
2.1	猫と人との関わり.....	8
2.2	「猫」とそのイメージ.....	14
2.3	「猫」に関する言葉のバリエーション.....	18
2.4	「猫」に関する言葉のイメージ.....	25
3	「ねこ」と言葉.....	28
3.1	「ねこ」に関する言葉のバリエーション.....	28
3.2	「ねこ」に関する言葉のイメージ.....	34
4	「猫」と「ねこ」から見る言葉の由来と成立.....	36
4.1	「猫」と「ねこ」に関する言葉の関係性.....	36
4.1.1	猫と遊女.....	37
4.1.2	猫とわら製品.....	41
4.2	言葉の由来と成立.....	44
4.2.1	言葉の由来について.....	44
4.2.2	言葉の成立について.....	47
4.3	終わりに.....	48
5	参考文献リスト.....	50
6	参考資料一覧.....	51
付属資料 「猫」に関するイメージ一覧		

付属資料	「猫」に関する言葉一覧
付属資料	「猫」に関することわざ一覧
付属資料	「ねこ」に関する言葉一覧

1 はじめに

1.1 研究背景・目的

「言葉」とは、本研究において、物の名称及びそれに類するものである。だが、言葉は、なぜそのように呼ばれているのだろうか。何を元にして、どのようにしてそのように呼ばれるようになったのだろうか。

今現在、言葉の成立は、以下のように考えられている。まず、何かしらのものがあるとすると、作られた言葉が人の口づてに言葉として伝えられてきたもの、作られた言葉がだれかによって書物に収録されて伝えられてきたものである。そして、この・より、知識を得た人々が、それをそのまま伝承したり、新たに言葉を作成したりしている。それが、さらに辞書・事典などの書物に収録され、今現在に伝えられ、私たちがその言葉を使っているのである。

だが、言葉の由来や成立において、人々の印象やイメージが検討材料とされていることは今までない。

言葉は、これらを与える影響をもって、どのような由来を持ち、どのように成立しているのであろうかを、本研究を通して、考察・検討していく。

そして、現代には、様々な新しい言葉がいまだ作られ続けており、今後とも若者層を中心に新しい言葉は多数生まれてくるであろう。新たに作られ、今後作られるであろう言葉において、日本における言葉の成立と由来について研究することで、これら解析の一助にしたいとも考える。

1.2 先行研究

それでは、まず、先行研究について以下の3つの研究を提示していきたい。

まず、最初に、倉田一郎氏の研究¹⁾から、言語と民俗学に関する研究について見ていく。倉田氏は、言語を民俗学としてどう扱っているかという問題に注目して、各国の事例や日本の事例について研究を行った。

1) 倉田一郎 .言語と民俗学 .民俗民芸双書 35 国語と民俗学 .1968 ,p.25-37 .

続いて、藤原与一氏の研究²⁾から、命名と造語に関する研究について見ていく。藤原氏は、名詞・名詞以外において、内面の考察による、「命名・造語」の特質を考察する研究を行っていた。この研究では、語の成形は、『文の想』によるものとされ、事物への関心が興味となり、あそびとしての命名活動がこり、想のあそんだ名が造成されるとしてる。

最後に、宮内貴久氏の研究³⁾から、口承からの言葉の由来に関する研究について見ていく。宮内氏は、「口承」の知識と書物など書承における知識の相関について考察しており、言葉の由来は、口承と書承からなるものとしている。そして、言葉の由来の一つ目として、書物に記された書承からくる知識によるものが挙げられ、二つ目として、口づてに伝承する口承からくる知識によるものとしている。宮内氏は、特に、口承について注目しており、「口承」から生まれる「語呂合わせ」について、最初は音から始まり、それが文字へと変化して、意味のある伝承が作られるということが、この研究からわかることとなった。

1.3 研究方法

研究方法を提示する前に、項目調査における研究対象として、「猫」と「ねこ」を取り上げたことについて述べておきたい。本研究では、言葉の数の把握と文献調査の意味合いもかねて、以下4つの事典・辞書から「猫」と「ねこ」の項目を抜粋した。ここで分析対象として、猫を取り上げるのは、漢字と音の両方の言葉が存在することから、最初は音から始まり、それが文字へと変化する語呂合わせの可能性も考えられる。これらより、言葉の成立と由来に何かしらの経緯を見いだせるのではないかということから、この研究において、「猫」と「ねこ」に関する言葉を取り上げた。

2) 藤原与一．命名と造語．日本民俗学大系 10．1959，p.229-248．

3) 宮内貴久．屋敷地内に植える樹木の吉凶 口承・書承・知識 ．比較民俗研究．1999，no.16，p.26-46．

それでは、言葉の由来と成立についての研究方法について述べていきたい。
研究方法として、以下の方法を取りたいと思う。

まず最初に、項目調査である。ここでは、研究対象に関する言葉を、文献をたどっていくことで、どのような由来があり、今までにどのような過程を経て、今現在の呼び名があるのか調査していきます。

次に、比較調査である。時代による言葉の変化について、同じ条件下にある文献で、時代比較できるものから、研究対象の言葉を抽出し、比較・検討していく。

最後に、事例調査である。これについては、今回の研究において、一般的に広く使われているであろう代表例が必要と考え、条件として、言葉の一般性がある、言葉の使用例を見ることができる、この二つを設定した。そして、この条件に当てはまるものとして、言葉の代表例及び代表的使用例が掲載されている辞典・辞書からの引用が必要と考えた。

それについては、この次の研究対象で詳しく述べていきたい。

1.4 研究対象

この研究において、研究対象として、「猫」と「ねこ」に関する言葉を抽出して使用することは前述した通りである。そして、それらの言葉を抽出するために、言葉の代表例及び代表的使用例が掲載されている辞書・事典として、以下の4つを選択し、使用していく。

まずは、豊富な日本語を収録し、使用例として幅広い時代文献例を記載している『日本国語大辞典』⁴⁾を使用する。

4)日本国語大辞典第二版編集委員会，小学館国語辞典編集部編 .日本国語大辞典．第2版．小学館，2002．

その次に、初版から第6版まで6版も発行をしており、言葉の時代変化を見ることができる『広辞苑』⁵⁾、さらには、明治時代に編纂され、近世以前の日本における言葉の使用について記述され、多数の文献使用例も記載されている『古事類苑』⁶⁾、最後に、日本には中国から渡来した言葉から作られた言葉も見られ、中国での使用例を知ることができて、漢語に関する日本での辞書においては最も良いのではないかと考えられる『大漢和辞典』⁷⁾から言葉の抽出を行った。

さらに、日本における言葉へのイメージ抽出の為、『定本 柳田國男集』⁸⁾を使用した。これは、民俗伝説や伝承には、少なからずその時代の人々のイメージが反映されている可能性があるためである。その中で、柳田國男と彼の著作を選択したのは、柳田國男が、当時の一般の人々、その中でも地方の人々の民俗伝説・伝承を収集していることに評価があったからであり、今回、言葉のイメージというそれを使う一般の人々のイメージの抽出において、彼の全著作が収録されている『定本 柳田國男集』を使用した。

2 「猫」と言葉

この第2章では、「猫」とそれに関する言葉について検討・考察していく。中でも、「猫」のイメージや「猫」という言葉に込められたイメージ、「猫」に関する言葉とそのイメージやバリエーションについてみていきたい。

5) 新村出．広辞苑．岩波書店，1998，2988p．

6) 古事類苑．再版3版．吉川弘文館，1969．

7) 諸橋轍次．大漢和辞典．縮刷版．大修館書店，1974．

8) 柳田國男．定本柳田國男集．新装版．筑摩書房，1968．

2.1 猫と人との関わり

この第1節では、「猫」の言葉の元になった動物の猫について、人の関わり
の歴史をここで提示しておく。

日本における「猫」の歴史について、以下の事が分かっている⁹⁾。まず一つ
目は、家猫は奈良時代ころに大陸から渡来したとされ、平安時代に唐猫として
貴族の日記や物語の宮中生活の描写の中に現われるとされている。さらに、そ
の後期には絵画にも描かれ、釈迦涅槃図の動物に猫が加わるのが日本での猫と
いう動物の特色とされている。しかし、二つ目として、野生猫の骨は古墳時代
以前の遺跡からも出土しているということもわかっている。

さらに、三つ目として、庶民も猫を飼うことが一般的になったのは、室町時
代ということがわかっている。

また、猫自体は、室町時代から庶民に飼われていたが、猫の飼育は、近世後
期においては現代とあまり変わらない状態に達した¹⁰⁾とされている。これは、
近世後期に至り、養蚕が農家の副業として発展すると、蚕を食う鼠を防除する
目的で猫が重視され、猫を蚕神としてまつたり、神社から猫石を借りたり、
猫の石像を奉納したり、また猫絵で鼠を脅したりする習慣がみられるようにな
った¹¹⁾ためではないかとみられる。

続いて、「猫」の言葉の成り立ちの系譜についても記載していきたいと思う。

まず最初に、家猫は中国から伝来したという経緯があり、その時に「猫」と
いう漢字も同じくして伝来したものと思われる。そこをふまえて、まずは、中
国での「猫」という言葉の扱われ方を見ていきたい。

9) 国史大辞典編集委員会編．国史大辞典．吉川弘文館，1979．

10) 福田アジオ編．日本民俗大辞典．吉川弘文館，1999．

11) 福田アジオ編．日本民俗大辞典．吉川弘文館，1999．

中国での言葉の使われ方は、『大漢和辞典』¹²⁾を使用して見ていく。

(参考資料)

No.	項目	内容	原文	出典	備考
1	猫	ねこ	猫、狸属、从豸多苗聲。	説文新附	
2	猫	ねこ	迎猫、爲其食田鼠也。	禮、郊特牲	
3	猫	苗に通ず。	苗、今之猫字、許書以苗爲猫也。	説文、虎竊毛謂之■苗、段注	
4	猫	■虎は、毛の薄い虎。	虎竊毛、謂之■猫。	爾雅、釋獸	
5	猫	■虎は、毛の薄い虎。	有猫有虎。	詩、大雅、韓奕	
6	猫	■虎は、毛の薄い虎。	猫、似虎淺毛者也。	傳	

(参考資料)

No.	項目	原文	出典	備考
1	狸	狸、伏獸、似羆、从豸里聲	説文解字	
2	狸	謂善伏之獸、即俗所謂野猫	段玉裁『説文解字』	
3	狸	狸、猫也		
4	狸	狸、似猫	玉篇	
5	狸	狸、野猫	正字通	
6	狸	則以狸步張之		
7	狸	(注釈)狸、善搏者也、行則止而擬度焉、其發必獲、是以量候道邊之也		
8	狸	捕鼠不如狸	外篇 秋水篇	

中国では、動物の猫を表す言葉として、「猫」と「狸」の二種類の漢字が使われていることが確認できた。

まず最初に、漢字の「猫」だが、これは、動物の猫のことを表し、現在私たちが接している一般の猫たちのことを指し示していると考えていいだろう。続いて、もう一つの「狸」のほうだが、これは、「狸」と書いてねこと読んでおり、野生の猫のことを意味しているようである。引用文献として挙がっているものを見ても、特に特徴的なことは書かれておらず、鼠を捕るという点だけが確認できた。よって、この「狸」が意味する野猫がどのような猫を意味しているかは分からないが、「猫」が意味する猫とは違うが、鼠を捕るという特徴は持っているということがわかる。

続いて、日本における「猫」という言葉の使われ方を、『古事類苑』¹³⁾を利用して見ていきたい。ここでは、動物の猫を表す言葉として、3種類の漢字及び言葉が使用されていることが分かった。

12) 諸橋轍次．大漢和辞典．縮刷版．大修館書店，1974．

13) 古事類苑．再版3版．吉川弘文館，1969．

参考資料

No.	項目	原文	出典	時代
1	猫	家狸、一名猫、和名禰古萬、	本草和名 十五獸禽	平安中期 延喜年間
2	猫	野王案猫 音苗和名禰古萬 以虎而小能捕鼠為糧	倭名類聚鈔 十八毛 郡名	平安中期 承平年間
3	猫		箋注倭名類聚鈔 七 獸名	平安中期 承平年間
4	猫	猫 俗通猫正莫交、子コ、カラ子コ	類聚名義抄 三犬	平安末期 11～12世紀
5	猫	猫 正猫俗、莫交反、子コ、音苗	類聚名義抄 四豸	平安末期 11～12世紀
6	猫	猫狸 上又作鑢字、亡朝亡包二反、下力其反、猫捕鼠也、狸狸也、又云野狸、倭言上尼古、下多々既	一切經音義 一	唐成立 648年か78 3年成立
7	猫	猫(子コ) 鼻常冷、夏至一月暖、旦暮目睛圓、午時細如線、毛色似虎、故呼、世俗曰於菟則喜矣	下學集 上 氣形	1444(文安) 成立 室町中期
8	猫	如虎(子コ) 猫	運歩色葉集 禰	天文16～17 年(1547～ 1548)成立 室町後期
9	猫	猫 ねはねずみ也、こはこのむ也、なずみをこのむけもの也、一説、猫はよくねるをこのむ意か、順和名抄にねこまと訓ず、まとむと通ず、このむのむの字也、のを略せり	日本釋名 中獸	元禄12年 (1699)成立 江戸中期
10	猫	猫子コマ 子とは鼠也、コマとは、コマといひ、クマといふは轉語也、鼠の畏る、所なるを云ひし也、即今俗に子コといふは、其語の省ける也	東勝 十八畜獸	
11	猫	一ねこまを略してねこといふ、こまといふも略言なり	南留別志 五	元文元年 (1736)刊 江戸中期
12	猫	猫子コマ 鼠子待の略か、鼠の類につらねこといふあれば、ねことのめいふは略語の中にことわり背くべし、猫の性は、鼠にても鳥にてもよくうかべひて、かならず取り得んと思はねば、とらぬものなり、よりて待ちとつけたるか、	圓珠庵雜記	元禄12年 (1699)成 立、文化9年 (1812)刊 江戸中期
13	猫	まみ穴、まみといふけだもの、和名考■にねこま、いたち和名考、奇病附録⇒	兎園小説 二集	1825年(文政 8)成立 江戸後期
14	猫	猫は惡獸にて、牛馬犬猿雉の類にあらねど、鼠といへる賊獸を征伐する事、猫にしくものなり、禮記に、迎猫為其食田鼠也といひ、説苑に、騏驎騏倚衡負■、趨一日千里、此至疾也、然使捕鼠、曾不如百錢之狸云々とある狸は則猫なり、和名抄に、猫、禰古萬、以虎而小、能捕鼠為糧とあり、家猫ともいへり、	傍廂 後編猫	江戸後期
15	猫	猫ねこ 上総の国にて山ねこと云、これは家に飼ざるねこなり、関西東武ともにのらねことよぶ、東國にてぬすぶとねこ、いたりねこともいふ、(途中略)今按に猫をとらとよぶは、其形虎に似たる故に、とらとなづくる成べし、和名ねこま下略してねこといふ、又、こまとはねこまの上略なり、かなといふ事は、むかしむさしの國金澤の文庫に、唐より書籍をとりよせて納めしに、船中の鼠ふせぎにねこを乗て来る、其猫を金澤の唐ねこと称す、金澤を略してかなとぞ云ならはしける。⇒	物類稱呼 三動物	江戸時代

まず最初に、先ほども述べた「狸」である。これは、中国同様、「狸」と書いてねこと読む方法で利用されており、中国から猫と共にこの漢字も伝来し、一時期日本でも使用されていたのではないかと考えられる。『古事類苑』¹⁴⁾では、この言葉の事例として、平安中期の文献『本名和草』を挙げており、これ以降のものには見られなかった。この『本名和草』では、「狸」は、「家狸、一名猫、和名禰古萬」として紹介されており、家狸の名称が猫と言っていることから、日本では、野生の猫を「狸」、家猫を「猫」として言葉を使い分けていたようである。さらに、和名は禰古萬と述べているところからも、「狸」と「猫」という漢字自体は、やはり、中国からもたらされたものとみていいと思われる。ちなみに、動物の猫に関する言葉が一番最初に日本の文献で確認されたのは、『日本霊異記』¹⁵⁾であり、「狸」の方の漢字が使用され、それをねこと読んで、猫を表したものであった。この言葉の使用例は、第三十縁の「理にあらずして他の物を奪ひ悪しき行を為ひて悪しき報を受け奇しき事を示す縁」という話の中に登場し、物語の主人公の死んだ父が成る動物として、大蛇や赤狗と共に挙げられている。動物に成った父は、息子である主人公の家に行った後の仕打ちが描写されているところから、ここでは、これらの動物の当時の日常的な扱いの描写であると考えられ、狸は、家に入って、死者の魂のために供えられた飲食を食べている描写がある。残り的大蛇と赤狗に成った場合は、杖を使って捨てられたり、他の犬を使って追い払われたりしているので、猫を意味する狸は、人間に飼われていない野生の猫で、反面、家に人に見つからずに侵入するなど、他の二匹より隠密性のある存在として描かれている。だが、この『日本霊異記』での「狸」の使用以来、「狸」と書いてねこと読んだ日本の書物は確認されおらず、何らかの経緯で、ねこと読み、野猫を表す「狸」は、日本で使われなくなったのではないかと考えられた。

14) 古事類苑．再版 3 版．吉川弘文館，1969．

15) 福田アジオ編．日本民俗大辞典．吉川弘文館，1999．

続いて、日本における「猫」は、どのように使用されているのだろうか。
日本において「猫」は、上記の「狸」同様、中国から伝来し、それが以後使用されているものとみられる。上記の「狸」でも取り上げた『本名和草』の記述からも見られるように、家猫と「猫」と「狸」という言葉が共に伝来し、使用されるようになったのであろう。

最後に、3つ目として、「禰古萬」という言葉があり、どのように使用されていたのか見ていきたい。先ほどの『本名和草』にも記述があったように、日本での猫の古語を表しており、「猫」の語源解説の時に、家狸、即ち家猫に対する和名と述べていることから、これらは「猫」と「狸」の言葉が伝来する以前から日本で使用されていた言葉で、家猫を表しているようである。この言葉は、この後「子こま」や「猫間」など「ねこま」の音と意味を共通させた様々な言葉が確認できた。この「ねこま」の言葉については、『日本釋名』や『東勝』、『圓珠庵雜記』に「猫」の言葉の解説の中に記述があり、共通しているのは、「禰古萬」の「ね」の部分が鼠のことを表しているという説である。後ろの「こま」に関する説は、鼠を好むから来ている説や鼠の恐れる場所や、鼠を待っているという説があり、定かではないが、この言葉には、猫の鼠に対する習性が人々に認識されていたことを示しているものと考えた。さらに、「ねこ」という言葉は、この「ねこま」を簡略化した言葉とも記載されている。このまた、別説として、『日本釋名』では、猫が寝ることを好む性質からきている説もあると述べられている。

さて、ここまで「猫」の言葉の成り立ちの系譜について、中国と日本、それぞれを検証してきたが、以下の事が分かった。まず、中国では、動物の猫に関して「狸」と「猫」の言葉の二種類を使用し、これらで野猫と家猫の意味区別を行っていたものとみられる。さらに、これらが伝来した日本では、伝来した言葉である「狸」と「猫」が使用されると共に、それ以前から使用されていたとみられる「禰古萬」という言葉が和名として知られていた。そして、この動物の猫を表す3種類の言葉の中、「猫」はそのまま使用されていき、「禰古萬」など「ねこま」に関する言葉に対しては、「猫」の古語として残っていくこととなった。

しかし、ねこと読み猫を意味する「狸」は、この『本名和草』の記述以降使用されておらず、『日本国語大辞典』などの辞書・事典類でも確認できていない。よって、日本ではこの猫を表す「狸」という言葉が使われなかった、使われる必要性がなかったとみるべきである。これらは、元々中国において、「狸」が野生の猫である野猫及び山猫を表す言葉であったことが原因ではないかと推測される。2.1でも述べたように、日本では、元々山猫は存在せず、野生化した猫を山猫と呼称していた。しかし、中国では野猫及び山猫が明確に区別できる存在として存在し、別途呼称が必要になったための「狸」という言葉の出現であったのではないだろうか。唯一「狸」の記述のある『本名和草』では、「猫」の説明の部分で家狸と記述しているところからも、中国から野生の猫という意味で入ってきたから、そのまま使用したとも取れる。だからこそ、それらの必要性のない日本では、遣唐使の廃止など中国側との学術的・文化的交流が薄れていくことで、早期に使われなくなったものと考えられる。

ここまで猫と人との関わりと猫に関する言葉の系譜について見てきたが、別の例として、猫が山野に逃れて猫俣になるという妖怪性が噂となって、『徒然草』『明月記』などにも市井の評判が記されていることもわかってきた。『徒然草』では、犬を猫膀胱と勘違いした連歌師の話、『明月記』では、奈良に猫膀胱が出て人々に噛みついて死者が出たということを奈良からの使者が語ったという話が日記として収録されている。また、『明月記』には、著者の幼少期に、京都の中にこの「鬼」が来て、人々が猫膀胱病という病に悩んだということを聞いたとも日記に記している。その後は、江戸時代には多くの化猫の話が生まれ、講談や小説でひろく知られることとなったという¹⁶⁾。

ここでの山野に逃れた猫について、家猫以外に山猫が存在する。山猫とは、イリオモテヤマネコなどのネコ科の哺乳類のうち小形の種類の総称を指す。体長およそ四〇～八〇センチメートル、家畜の家ネコに似るが、頭はやや細長く、尾は太く、耳は丸みを帯びて裏面は黒地に一個の白斑があるのが特徴である。また、山野にすむ猫、野猫という意味も持つという(『国史大辞典』)。

16) 志村有弘，松本寧至編．日本奇談逸話伝説大辞典．勉誠社，1994．

だが、日本では弥生時代以降、山猫は生息していないので、日本で独自に山猫が家猫化したことはないとされている¹⁷⁾。しかし、猫が山野に逃げて野生化し、山猫となることはあったようである。

これまでより、猫という動物は、現在家猫とされている三毛猫などの猫たちが中国から渡来してくる以前にも、家猫とは別の猫という存在がいたということがわかった。さらに、渡来してきた後は、室町時代から庶民にも飼われるようになり、その反面、山野に逃げた猫が野生化して山猫となり、それを人々が猫勝手として認識し、それを使って様々な話が生まれて行ったものと考えられる。

そして、室町時代以降庶民にも飼われるようになった猫は、近世後期に、農家の副業として発展した養蚕において、蚕を食べる鼠を防除するために猫が重視されるようになり、そこから、近世後期以降、現在と同じ水準で猫が飼育されるようになっていく。

2.2 「猫」とそのイメージ

この 2.2 では、「猫」に関するイメージとして、『定本 柳田國男集』¹⁸⁾からデータを提示する。

『定本 柳田國男集』とは、日本民俗学者であり、日本各地の様々な民俗伝説・伝承を収集した柳田國男の全著作を収録したものである。ここから、今回取り上げる「猫」に関するイメージについてデータを提示するのは、民俗伝説や伝承には、少なからずその時代の人々のイメージが反映されている可能性があるためである。その中で、柳田國男と彼の著作を選択したのは、柳田國男が、当時の一般の人々、その中でも地方の人々の民俗伝説・伝承を収集していることに評価があったからであり、今回、言葉のイメージというそれを使う一般の人々のイメージの抽出において、彼の全著作が収録されている『定本 柳田國男集』を使用して、「猫」に関するイメージの抽出を行った。

17) 福田アジオ編．日本民俗大辞典．吉川弘文館，1999．

18) 柳田國男．定本柳田國男集．新装版．筑摩書房，1968．

それでは、『定本 柳田國男集』からの「猫」に関するイメージについて、データを提示していきたい(付属参考資料 を参照)。

まず、猫に関するイメージとして特徴的なのは、猫は恐れる存在というイメージである。これについて『定本 柳田國男集』のデータからあげられるのは、参考資料 より、「猫の寄合ひ」と「ネコオクリ」の2件となっている。

(参考資料)

No	項目	原文	出典	備考
1	猫の寄合ひ	⑧狼の群が夜行く旅人を劫かすといふことだけは、少なくとも近代に入つて幾度か實驗せられた現象であつたらう。従つて猫の寄合ひといふ俗信が少々廢れて、狼が之に代つて説話の序幕を占めたのは自然である(しかも是と反對に、狼の群の話が東北に行つて、猫に改まつたといふことは想像しにくい)。唯奇妙なのは狼の群の指導者として、猫が招かれて遣つて來たといふことであるが、是も自分は猫ならばさういふ話も有らうと思ふのである。猫と狼とが交を結んだ話はまだ知らぬが、狐とは屢々一緒になつて遊んだといふ噂が残つて居る。	⑧『猫と狐と狼』	
2	ネコオクリ	⑬ネコオクリ 陸中の梁川などで、猫に崇られたといつて病氣になつた場合には、イタコに教へられてよく猫送りといふことをした。幅一尺長さ二尺位の板に、猫といふ文字を白くかいて、四辻へ持つて往つて立てる、人は是に近づくことを畏れて、遠まはりをしたものだといふ(民俗研究四號)。津輕地方のイタコたちも、よく病氣の元を生き物の恨み崇りと説明するが、其場合には繪馬屋に頼んで、必ずその動物を書に描いて貰つて、自分の信心する神社佛閣に持つて行つて掛ける。神官僧侶は全く是に參與せず、寧ろ迷惑して居る場合が多いといふ(松野武雄君)。これは頗る東京あたりのとは性質のちがつた繪馬で、私は寧ろ送り物の人形、乃至は芋の葉に包んだ蜈蚣などゝ、同じ系統のものかと想像して居る。	⑬『神送りと人形』	

まず一つ目として、「猫の寄合ひ」であるが、ここでは猫の寄合ひ事態のことは書かれておらず、その俗信自体の移り変わりについて述べている。これは、『猫と狐と狼』に掲載されている記述であり、「狼の群が夜行く旅人を劫かすといふことだけは、少なくとも近代に入つて幾度か實驗せられた現象であつたらう。従つて猫の寄合ひといふ俗信が少々廢れて、狼が之に代つて説話の序幕を占めたのは自然である(しかも是と反對に、狼の群の話が東北に行つて、猫に改まつたといふことは想像しにくい)。唯奇妙なのは狼の群の指導者として、猫が招かれて遣つて來たといふことであるが、是も自分は猫ならばさういふ話も有らうと思ふのである。猫と狼とが交を結んだ話はまだ知らぬが、狐とは屢々一緒になつて遊んだといふ噂が残つて居る。」と記述されている。まず、「猫の寄合ひ」とは、猫たちが夜な夜な集まって集会しているという話であり、

猫たちが集まって踊っているというものなど、バリエーションがある。そして、これに対して、柳田は、狼が群れで人を襲うようになって、この猫の寄合ひがすたれ、狼がこの話をとってかわってしまったと言っているのである。また、記述の続きに、猫が招かれて狼の群れの指導者として遣って来たということ、猫と狼との交流の話はまだ知らないけれど、狐と猫が一緒になって遊んだという話はあるということも書かれている。これらより、猫は、もともと人に害をなす恐れられる存在であったが、時代が変わるにつれ、それが狼へと移っていったしまったということである。狼の群れの指導者として遣って来たという話からも、狼の先駆者としての側面が猫にイメージとして付与されているとみられる。

次に、「ネコオクリ」だが、これは、猫が人を呪う存在として描かれている話である。これは、『神送りと人形』にある記述であり、「陸中の梁川などで、猫に崇られたといつて病氣になつた場合には、イタコに教へられてよく猫送りといふことをした。幅一尺長さ二尺位の板に、猫といふ文字を白くかいて、四辻へ持つて往つて立てる、人は是に近づくことを畏れて、遠まはりをしたものだといふ（民俗研究四號）。津輕地方のイタコたちも、よく病氣の元を生き物の恨み崇りと説明するが、其場合には繪馬屋に頼んで、必ずその動物を畫に描いて貰つて、自分の信心する神社佛閣に持つて行つて掛ける。神官僧侶は全く是に參與せず、寧ろ迷惑して居る場合が多いといふ（松野武雄君）。これは頗る東京あたりのとは性質のちがつた繪馬で、私は寧ろ送り物の人形、乃至は芋の葉に包んだ螟蟲などゝ、同じ系統のものかと想像して居る。」と記述されている。ここでは、はっきりと、猫が人間を崇る存在として書かれており、イタコに相談する案件であったこと、そして、猫送りという解呪の方法が存在していたことから、猫は人を崇る存在というのは、当時の猫に対するイメージとして存在していたものと考えられる。それに、猫送りをよくしたという記述からも、猫に崇られたと当時考えられていた現象はよく起こっていたらしく、さらに、その猫送りで使用した板には人々は近寄らないなど、それだけ猫は崇る存在としてイメージされ、人々から恐れられていたようである。

ここまで、『定本 柳田國男集』から2つの事例を挙げて検証してきたが、やはり、猫には、恐れられている存在というイメージが人々に存在していたと

考えられる。その中でも共通するのが、猫が人間に、物理的であれ、呪術的であれ、危害を加える存在として恐れられている点である。さらに、それら猫への恐れが、時代が移っていくにつれ、猫から狼へと恐れの対象が移っていったということもわかった。

また、『古今著文集』や『明月集』の記述から、中世には、猫は化けるという考えが浸透していたと思われる¹⁹⁾。

ここまで、猫に関するイメージを検証してきたが、この猫が恐れられている存在としてのイメージはどこから発生したのであろうか。理由としては、猫は、猫の瞳が昼夜で大きさが異なること、毛に静電気の発生しやすいこと、飼主に対して独立性を発揮しがちであることなど、主としてその生態にもとづくもの²⁰⁾がその一つとして考えられる。また、獵師の間では、自分の家の飼猫が山の中で魔物に化けることをおそれる言い伝えがあるが、ペットであっても気を許せない野獣である猫の猫らしさが認められる説²¹⁾もある。だが、猫が庶民でも飼われ始めたのは、室町時代以降のため、これらの説は室町時代以降のものと思われ、一般的に猫が恐れられる存在として考えられ始めたのは、室町時代以降とみていいだろう。

また、それ以前にも、猫が恐れられる存在として描かれている話は中世ごろから見られ、『明月記』の記事を初出として、近世には、化け猫騒動の話が流行するに至った。これは、もとは中国の山猫、つまり狸の怪異譚および猫鬼を使う呪術に由来するのだろうが、現実の猫の野生から脱しきれない性状も、これらに一役買ったと思われ²²⁾、これも猫が恐れられる存在となった原因の一つとも思われた。

19) 志村有弘，松本寧至編．日本奇談逸話伝説大辞典．勉誠社，1994．

20) 国史大辞典編集委員会編．国史大辞典．吉川弘文館，1979．

21) 小松和彦．日本怪異妖怪大事典．東京堂出版，2013．

22) 福田アジオ編．日本民俗大辞典．吉川弘文館，1999．

また、日本には山猫は存在していないことが分かっていること²³⁾から、山野に逃げた猫が野生化して山猫となったと前述したが、これらの存在も大きくかかわって、家猫と山猫両者が存在することで、身近な存在でありながら、恐れられる存在としての猫のイメージが形成されたのではないかと考えられた。

よって、猫のイメージとして、『定本 柳田國男集』から挙げられるイメージは、猫は恐れられる存在というイメージである。室町時代以降は庶民にも飼われるなどの身近な存在でありながら、山野に逃げた猫が野生化した山猫などの存在もあって、猫は人に危害を加える恐れられる存在としてのイメージを人々の中に作り上げていったものとみられる。

2.3 「猫」に関する言葉のバリエーション

この第3節では、「猫」に関する言葉の種類について、それらの傾向について記述する。「猫」に関する言葉については、『日本国語大辞典』²⁴⁾、『広辞苑』²⁵⁾、『古事類苑』²⁶⁾を参照した。参考資料をご参照いただきたい。

「猫」に関する言葉のバリエーションとしては、意味としてみると以下のものが挙げられる。

23) 福田アジオ編．日本民俗大辞典．吉川弘文館，1999．

24) 日本国語大辞典第二版編集委員会，小学館国語辞典編集部編．日本国語大辞典．第2版．小学館，2002．

25) 新村出．広辞苑．岩波書店，1998，2988p．

26) 古事類苑．再版3版．吉川弘文館，1969．

(参考資料)

意味	件数
猫そのものに関すること	6
猫の行動やそれに類似した人間の行動	5
猫に類似する人間の身体的特徴	6
猫に類似した家具や物	13
人間の行動(上記以外)	11
遊女に関するもの	5
わら製品(農具・漁具)	3
農具・漁具	2
表面と中身が全然違うということ	10
家具や物(上記以外)	3
植物	23
動物	5
魚貝類	5
鼠に関連するもの	1
その他	25
合計	123

「猫」に関する言葉、合計 123 データを大まかに分類し、全体的なバリエーションを確認したところ、最も多いのが猫や猫に関連する物や行動の言葉であり、30 件のデータが確認された。内容の詳細としては、猫そのものに関することや猫の行動やそれに類似した人間の行動、猫に類似する人間の身体的特徴、猫に類似した家具や物などが見られた。その中でも、特に、猫に類似した家具や物に関する項目が多かった。これは、猫の足などの身体的な特徴や猫の目の変化の様子などを模した家具や物などのことである。

また、その他の猫に関係の無い言葉として「猫」に関連する言葉に上がってくるのは、遊女に関することやわら製品(農具・漁具)、表面と中身が全然違うことなどが挙げられる。さらに、動植物や魚貝類の名称としても「猫」に関連する言葉が見られた。そして、上記に挙げたもの以外の猫に関係の無い人間の行動や家具や物なども見られた。また、1 件だけではあるが、鼠に関する言葉も見られた。これらに関しては、植物に「猫」の名を冠した言葉が飛びぬけて多かったこと、表面と中身が全然違うという人間の性質に関する言葉も続いて多かった傾向が見られた。

ここで、表面と中身が全然違うという人間の性質に関する言葉について、中身を見ていきたい。これに関する言葉としては、「猫被」、「猫根性」、「猫辞退」、「猫被(ねこっかぶり)」、「猫性(ねこっしょう)」、「猫撫声(ねこなでごえ)」、「猫撫(ねこなで)」、「猫撫声(ねこなでごえ)」、「猫撫(ねこな)」、「猫糞」が挙げられる。

(参考資料)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	猫被(ねこかぶり)	本性を包み隠して、表面おとなしうに見せること。あるいは知らないふりをする。また、その人。ねこっかぶり。	* 秘事法門[1964]〈杉浦明平〉九「善人なんちゅうのは、猫かぶりのこんこんちきよ」		
2	猫根性	うわべは柔和そうに見えながら、内心は執念深く貪欲(どんよく)であること。また、その者。ねこっしょう。	①浄瑠璃・仏御前扇車[1722]二「エエしぶとき猫根性(ネココンジャウ)」 ②和訓栞[1777～1862]「諺に猫根性といふは、人の心の貪欲を匿し、外に露はさぬ者をいふ」		
3	猫辞退	内心では欲しいのに、表面では遠慮すること。			
4	猫被(ねこっかぶり)	「ねこかぶり(猫被)」の変化した語。	①坊っちゃん[1906]〈夏目漱石〉九「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被(ねこっかぶ)りの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴」 ②引越やつれ[1947]〈井伏鱒二〉高田館「あいつ、なんて猫っかぶり野郎だ」		
5	猫性(ねこっしょう)	「ねここんじょう(猫根性)」に同じ。	* 雑俳・軽口頓作[1709]「きみがわるい・あんまりなつく猫性(ネコッシャウ)」		
6	猫撫(ねこな)	「ねこなでごえ(猫撫声)」の略。	* 滑稽本・浮世風呂[1809～13]三・下「なんのかのと作声の猫撫(ネコナ)さ」		
7	猫撫声(ねこなでごえ)	「ねこなでごえ(猫撫声)」に同じ。	①彼女とゴミ箱[1931]〈一瀬直行〉橋下のルンペン「デカにしちやいやに猫撫声(ネコナゼゴエ)だし」 ②岬[1975]〈中上健次〉「最初は猫なで声で、どこのボンボンやらと言う顔して」		
8	猫撫(ねこなで)	「ねこなでごえ(猫撫声)」の略。 【方言】 お世辞をいう者。おべっかを使う者。	* 扶桑大噺禅祖説吟[1654]二「なにが猫(ネコ)なでには生うず」		
9	猫撫声(ねこなでごえ)	猫が人になでられる時に出すような、媚びを含んだ声音(こわね)。また、自分になつかせようと、甘く、柔らかく言いかける語調。ねこなでごえ。ねこなで。 【方言】 おせじのうまい人。おべっか者。	①史料編纂所本人天眼目抄[1471～73]一「をそろげに囁く時もあり、又猫撫声(こへ)になる時もあり」 ②仮名草子・祇園物語[1644頃]上「猫(ネコ)なで声(コエ)をし、人に敬れんとするものあり」 ③浄瑠璃・井筒業平河内通[1720]二「かはい物やと猫なで声の撫でつさすれば」 ④警諭尽[1786]三「猫撫声(ネコナデゴエ)で」 ⑤腕くらべ[1916～17]〈永井荷風〉一八「さう云ふ事には馴れきった桔梗の女将が猫撫声で」		
10	猫糞	悪事を隠して素知らぬ顔をする。拾い物などをして、それを届けたり返したりしないで、自分のものとして素知らぬ顔すること。 【語源説】 (1)ネコノババ(猫糞)の義。猫は糞をした後、前足で砂をかけてそれを隠すところから「すらんぐ＝暉峻康隆・猫も杓子も＝榎垣実・おしゃれ語源抄＝坂部甲次郎」。 (2)猫婆の義。徳川中期、本所に住んでいた猫好きの老婆が欲張りであったところから「話の大事典＝日置昌一」。	①洒落本・寸南破良意[1775]髪結「大方五つ明の客を取て居やアがって、猫ばばの面(つら)で来て」 ②滑稽本・浮世風呂[1809～13]三・上「おそれるほどなら湯も浴せず、小くなつて屈で居べいが、猫糞(ネコババ)で、しゃアしゃアまちまちだ」 ③苦の世界[1918～21]〈宇野浩二〉四・一「千円出しましたよ、それをすっかり先生猫ばばをきめこんでしまつて」 ④断腸亭日乗(永井荷風)昭和一六年[1941]三月一日「万才は養育料を猫婆々にして其子を興行師に売りと云ふ」	【第2版】浮世床初「五日ばかり過ぎたら帰さうといふ苦が、今日で一月になるが猫糞さ」	

まずは、本性を包み隠して、表面おとなしうに見せることを意味する「猫被」、その派生語である「猫被(ねこっかぶり)」、次に、「猫根性」は、うわべは柔和そうに見えながら、内心は執念深く貪欲であることを意味し、「猫性(ねこっしょう)」は派生語である。続いて、「猫辞退」は、内心では欲しいのに、表面では遠慮することを意味する。そして、「猫撫声(ねこなでごえ)」は、猫が人になでられる時に出すような、媚びを含んだ声音、これが転じておせじのうまい人やおべっか者という意味も持っている言葉である。「猫撫(ねこなで)」、「猫撫声(ねこなでごえ)」、「猫撫(ねこな)」は、すべて同じ意味の派

生語となる。最後に、「猫糞」は、悪事を隠して素知らぬ顔をするという意味であり、直接的な意味ではないが、表面と中身が全然違う人間の性質を表している言葉と考え、こちらに分類した。

ここまで、「猫」に関する言葉の中で、猫に関連のあるものを多く見てきたが、それ以外に、特徴的なものとしては、特に猫と関連性が見られない、遊女に関するものと農具・漁具やわら製品が見られた。これら3つについて、具体的に見てみたいと思う。

まず遊女に関する言葉としては「猫」、「猫傾城」、「猫好」、「猫茶屋」、「猫股女郎」である。

(参考資料)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	猫	「寝子」から私娼の異称		「寝子」から私娼の異称	
2	猫傾城(ねこけいせい)	(「ねこけいせい」とも。猫は陰険であるなどとされるところから)傾城をののしっている語。	①浮世草子・御前義経記[1700]七・三「小ざつまに言ひ分海山ありといへども、慍面ひつばる猫傾城(ネコゲイセイ)いふだけ■の種ぞかし」 ②浄瑠璃・山城国畜生塚[1763]道行「とち狂うた猫傾城(ねこけいせい)」		
3	猫好	(1)猫が好きで大変にかわいがること。また、その人。 (2)芸妓をあげて遊興することを好むこと。また、その人。	(1) * 咄本・さとすゝめ[1777]猫「ねこずきなむすこ、おやぢのるすの内、きれいな白猫をもらっておけば」 (2) * 雑俳・柳多留・一三[1778]「猫好も男の方は金がいり」		
4	猫茶屋	江戸の本所回向院前(墨田区両国二丁目)で、金猫・銀猫と称する私娼を抱えていた茶屋。天明(一七八八～八九)頃繁昌したが、寛政の改革で取り払われた。	①洒落本・一事千金[1778]序「夏さへふれるあわ雪や、猫茶屋(ネコチャヤ)の鼻頭(はなさき)と、女郎の心の冷酒をかんにしなの善光寺」 ②随筆・飛鳥川[1810]「回向院前通りは、藤堂の辻の角まで一円猫茶屋あり、土手側と云」		
5	猫股女郎	誠意のない女郎をののしっている語。	①洒落本・婦身噺[1820]居続宵泊の段「しやうねのくさったねこ又女郎(チョロウ)」 ②随筆・十八大通[1846]「うぬ猫又女郎め、爰に居たか」		

「猫」は、三味線の皮に猫の皮を使うことから、三味線を使うことから芸妓の異称や「寝子」と音が一緒であることから私娼の異名となっている。続いて「猫傾城」は、遊女の異称である傾城から、傾城すなわち遊女を罵っている言葉である。次に、「猫好」は、猫が好きで大変にかわいがることという意味以外に、芸妓をあげて遊興することを好むことという意味を持つ。さらに、「猫茶屋」は、江戸の本所回向院前で、金猫・銀猫と称する私娼を抱えていた茶屋のことであり、遊女に関する事の中でも、遊女屋に関する言葉である。最後に、「猫股女郎」は、誠意のない女郎をののしっている言葉のことである。

次に、農具・漁具やわら製品については、「猫網」、「猫飼」、「猫搔」、「猫車」、

「猫ぶく」である。

(参考資料)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	猫網	地引網の一種。その構造は普通の地引網に等しく、■網(ふくろあみ)の長さ二五尋(ひろ＝約四五メートル)、■口の直径五尋(約九メートル)以下、その前方の袖網の長さ二五尋、これに長さ二〇〇尋(約三六〇メートル)の引網をつけたもの。			
2	猫飼	(「ねこがい」とも) 農具の一種。太い縄を縦にして、これに藁を厚く組んで作り、穀物の種子などを盛り入れるのに使用する。ねこかえ。	①和漢三才図会〔1712〕三五「■(ネコガヒ) 福古加比 三才図会云、■去レ草器、今之盛ニ穀種一器也。論語曰、以レ杖荷レ■者是也、按■与レ簣同レ訓、蓋簣以レ竹作、■以レ藁作名ニ猫飼(ネコカヒ)一者類乎」 ②広益国産考〔1859〕一「■ネコガヒ」		
3	猫搔(ねこがき)	(1)藁で編んだむしろ。ねこだ。蹴鞠(けまり)などの時、庭に敷くのにも用いた。 (2)唐物(からもの)の青磁茶碗や朝鮮の金海茶碗などのなかで、見込や外側に猫の爪跡のような櫛目文様のあるもの。 【方言】 (1)わら製の敷物。大形のむしろ。 (2)檜(ひのき)の皮やわらで編んだ、一種の背■(はいのう)。 (3)床下の塵埃(じんあい)。	(1) ①明月記・寛喜二年〔1230〕六月二日「密々有ニ御鞠一、敷ニ猫搔一」 ②古今著聞集〔1254〕一一・四一五「ねこがきを敷かれたり」 ③随筆・安斎随筆〔1783頃〕一九「ねこかきねこかきは今世田舎にてねこたと云ふむしろなり、わらにて綾衫に組みたるものなり」		
4	猫車	箱の前部に車輪一個をつけ、後部に手押し用の柄をつけた車。土砂などを運ぶために用いる工事用の一輪車。ねこ。 【方言】植物、ひがんばな(彼岸花)。	①風俗画報・一〇六号〔1896〕人事門「今昔より有りきたる車の種類(略)半葎車、青葎(せいはい)車、輦(てぐるま)、猫(ネコ)車、乳母車」 ②鐘供養の日〔1943〕〈井伏鱒二〉「石材を運ぶ大型の猫車を曳いて来て」		
5	猫ぶく	わら縄を編んで作った大形の厚いむしろ。		* 諸国風俗問答〔1909前〕備後国福山領風俗問答・正月・二「まとひ藁は猫福と申、厚き物に候故、はやす時却て目ましく候」	

「猫網」は、地引網の一種であり、漁具の一つである。さらに、「猫飼」は、わら製品の農具であり、太い縄を縦にして、これに藁を厚く組んで作り、穀物の種子などを盛り入れるのに使用するものである。「猫搔」は、藁で編んだむしろであり、一時期、蹴鞠(けまり)などの時、庭に敷くのにも用いられていたものであり、これらわら製品の中で、一番歴史の古いものとなってくる。また、「猫車」は、他の言葉と違い、唯一わら製品に関係のなり農具であり、箱の前部に車輪一個をつけ、後部に手押し用の柄をつけた車のことで、土砂などを運ぶために用いる工事用の一輪車としても用いられていたものである。最後に、「猫ぶく」は、わら縄を編んで作った大形の厚いむしろのことである。これらは、「猫網」と「猫車」を除いて、わら製品に関係のある農具・漁具となっている。

続いて、『日本国語大辞典』²⁶⁾・『広辞苑』²⁷⁾から、「猫」に関することわざ一覧も見ていきたい。

(参考資料)

意味	件数
好物に関する喩	4
価値判断に関する喩	4
不適当な行いに対する喩	2
実現不可能の喩	2
表面と中身が全然違うという喩	2
猫そのものに関すること	6
猫の行動に関すること	2
遊女に関すること	2
植物	12
言い伝え	2
隠語	3
その他	26
合計	67

「猫」に関する諺としては、全67データより、上記のようなバリエーションがみられる。その中では、好物に関する喩や価値判断に関する喩が多く見られた。また、動物の猫そのものに関すること、「猫の恋」など、特に発情期に関する表現としてのことわざが多く見られた。また、植物を表現するものも多く、今回の分類では一番多い結果となった。さらに、遊女に関することも2件確認することができた。

(参考資料)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	猫には遊女が成る	遊女が死ぬと猫に生まれかわるという俗説。逆に「傾城には猫が成る」ともいう。	* 浄瑠璃・鎌倉三代記〔1716〕二「実には世上の諺に、猫(ネコ)には遊女(イウジョ)が成(ナ)るとやら」		
2	猫に木天蓼お女郎に小判	大好物のたとえ。また、効果が著しいことのたとえ。			
3	猫の一物	湯女(ゆな)のこと。	* 浮世草子・傾城新色三味線〔1718〕四・大坂・二「むかしより風呂屋女を猿と云を、近年わるじゃれ中間(なかま)の伝受にて、ねこの一物(イチモツ)といへり、是爪をかくすと云事成べし」		

具体的に見ていくと、同義で「傾城には猫が成る」とも言われている「ねこには遊女が成る」や「ねこの一物」がある。

27) 日本国語大辞典第二版編集委員会，小学館国語辞典編集部編．日本国語大辞典．第2版．小学館，2002．

28) 新村出．広辞苑．岩波書店，1998，2988p．

さらに、表面と中身が全然違うという人間の性質に関する諺も 2 件見られる。
(参考資料)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	ねこが糞(ばば)踏む	悪事を隠したり、他人のものを手に入れたりしてそしらぬ顔をする。ねこばばをする。	* 読本・南総里見八犬伝〔1814～42〕四・三五回「手ごみにされて、なほ阿容阿容と猫の糞(ババ)踏れて花の開くものは、路傍の鴈(ひるがほ)のみ」		
2	ねこを被る	本性をかくしておとなしうに見せる。また、知っていながら知らないふりをする。 【語源説】 うわべを猫のように柔和にする意。またはネゴザ(寝莫座)をかぶる意	* 歌舞伎・盲長屋梅加賀彦〔1886〕七幕「わたしも初めはお前のやうに猫(ネコ)をかぶって遣って見たが」 * 思出の記〔1900～01〕(徳富蘆花)六・七「猫をかぶるのが上手で若い男は直ぐ欺されてしまふが」 * 羽なければ〔1975〕(小田実)二九「家でそれぐらい猫がかぶって見せるんは屁とも思っていないせんのや」		

具体的には「猫が糞踏む」と「猫を被る」である。あと、「猫」に関する言葉では見られなかったものとして、言い伝えや隠語も複数見られた。

ここまで、「猫」に関する言葉とことわざを全 190 データを見てきたが、両方共通して、動物の猫に関連する言葉が大変多く見られた。特に、猫に類似した家具や猫そのものに関する言葉が多かった。さらに、植物の名称として使われている言葉も大変多く見られた。そして、表面と中身が全然違うという人間の性質に関する言葉も多く見られた。また、猫に関係のない言葉として、遊女に関係する言葉やわら製品などが多く見られた。

ここまで、「猫」に関する言葉・ことわざの傾向を見てきたが、猫に関する言葉や猫に類似したものに関する言葉に「猫」に関する言葉が多く使われているのは、納得のいく結果であった。さらに、植物に関しては、猫への類似性による「猫」に関する言葉の使用ということもあり、これらの件数についても当然の結果であると言えよう。しかし、それ以外の言葉について、動物の猫との関連性がないにも関わらず、件数が多い言葉が複数見られた。それは、遊女に関する言葉、わら製品、表面と中身が全然違うという人間の性質に関する言葉である。

ここまで、「猫」に関する言葉やことわざを見てきたが、これらからわかる「猫」に関する言葉の傾向には、猫に関する言葉とそうでない言葉が両者存在するということであった。さらに、猫に関係のない言葉では、遊女に関する言葉、農具・漁具やわら製品、表面と中身が全然違うという人間の性質に関する言葉の 3 傾向が見られた。

2.4 「猫」に関する言葉のイメージ

この第4節では、第2節の「猫」に関するイメージと第3節の「猫」に関する言葉とその傾向から、「猫」に関する言葉へのイメージについて検討・考察する。

前節の第3節において、「猫」に関する言葉の傾向として、猫に関係ない意味を持つ言葉において、遊女に関する言葉、農具・漁具やわら製品、表面と中身が全然違うという人間の性質に関する言葉の3傾向が見られた。これは、「猫」に関する言葉において、本来の意味である動物の猫に関連する物事の意味を持った言葉が出てくるのは、漢字字体にその意味を含んでいるため、当然とも取れるが、それ以外の関係性のない意味を持つ言葉で、一定の傾向があるものは、何かしらの言葉のイメージを表しているのではないかと考え、今回は、この3傾向の中で、「猫」に関する言葉の中で、特に多数の言葉が確認された表面と中身が全然違うという人間の性質に関する言葉について、検討していきたいと思う。他の二つは、「ねこ」に関しても傾向が見られたため、そちらと合わせて検討・考察していく。

それでは、表面と中身が全然違うという人間の性質に関する言葉についてみていきたいと思う。これらに関する言葉として挙げられるのは、「猫被」、「猫根性」、「猫辞退」、「猫被（ねこっかぶり）」、「猫性（ねこっしょう）」、「猫撫声（ねこなでごえ）」、「猫撫（ねこなで）」、「猫撫声（ねこなぜごえ）」、「猫撫（ねこな）」、「猫糞」、「猫が糞踏む」、「猫を被る」である。

参考資料

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	猫被(ねこかぶり)	本性を包み隠して、表面おとなしうに見せること。あるいは知らないふりをする。また、その人。ねこっかぶり。	* 秘事法門〔1964〕(杉浦明平)九「善人なんちゅうのは、猫かぶりのこんこんちきよ」		
2	猫根性	うわべは柔和そうに見えながら、内心は執念深く貪欲(どんよく)であること。また、その者。ねこっしょう。	①浄瑠璃・仏御前扇車〔1722〕二「エエしぶとき猫根性(ネココンジャウ)」 ②和訓栞〔1777～1862〕「諺に猫根性といふは、人の心の貪欲を匿し、外に露はさぬ者をいふ」		
3	猫辞退	内心では欲しいのに、表面では遠慮すること。			
4	猫被(ねこっかぶり)	「ねこかぶり(猫被)」の変化した語。	①坊っちゃん〔1906〕(夏目漱石)九「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被(ねこっかぶ)りの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴」 ②引越やつれ〔1947〕(井伏鱒二)高田館「あいつ、なんて猫っかぶり野郎だ」		
5	猫性(ねこっしょう)	「ねここんじょう(猫根性)」に同じ。	* 雑俳・軽口頓作〔1709〕「きみがわるい・あんまりなつく猫性(ネコツシヤウ)」		
6	猫撫(ねこな)	「ねこなでごえ(猫撫声)」の略。	* 滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕三・下「なんのかのと作声の猫撫(ネコナ)さ」		
7	猫撫声(ねこなでごえ)	「ねこなでごえ(猫撫声)」に同じ。	①彼女とゴミ箱〔1931〕(一瀬直行)橋下のルンペン「デカにしちやいやに猫撫声(ネコナゼゴエ)だし」 ②岬〔1975〕(中上健次)「最初は猫なで声で、どこのボンボンやらと言う顔して」		
8	猫撫(ねこなで)	「ねこなでごえ(猫撫声)」の略。 【方言】 お世辞をいう者。おべっかを使う者。	* 扶桑大噺神祖説吟〔1654〕二「なにが猫(ネコ)なでには生うず」		
9	猫撫声(ねこなでごえ)	猫が人になでられる時に出すような、媚びを含んだ声音(こわね)。また、自分になつかせようと、甘く、柔らかに言いかける語調。ねこなでごえ。ねこなで。 【方言】 お世じのうまい人。おべっか者。	①史料編纂所本人天眼目抄〔1471～73〕一「をそろげに嘆る時もあり、又猫撫声(こへ)になる時もあり」 ②仮名草子・祇園物語〔1644頃〕上「猫(ネコ)なで声(コエ)をし、人に敬れんとするものあり」 ③浄瑠璃・井筒業平河内通〔1720〕二「かはい物やと猫なで声の撫でつさすれば」 ④警諭尽〔1786〕三「猫撫声(ネコナデゴエ)で」 ⑤腕くらべ〔1916～17〕(永井荷風)一八「さう云ふ事には馴れきった桔梗の女将が猫撫声で」		
10	猫糞	悪事を隠して素知らぬ顔をすること。拾い物などをして、それを届けたり返したりしないで、自分のものとして素知らぬ顔をすること。 【語源説】 (1)ネコババ(猫糞)の義。猫は糞をした後、前足で砂をかけてそれを隠すところから「すらんぐ」=暉峻康隆・猫も杓子も=榎垣実・おしゃれ語源抄=坂部甲次郎)。 (2)猫婆の義。徳川中期、本所に住んでいた猫好きの老婆が欲張りであったところから「話の大事典=日置昌一」。	①洒落本・寸南破良意〔1775〕髪結「大方五つ明の客を取て居やアがって、猫ばばの面(つら)で来て」 ②滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕三・上「おそれるほどなら湯も浴せず、小くなつて屈で居べいが、猫糞(ネコババ)で、しゃアしゃアマぢまぢだ」 ③苦の世界〔1918～21〕(宇野浩二)四・一「千円出しましたよ、それをすっかり先生猫ばばをきめこんでしまつて」 ④断腸亭日乗(永井荷風)昭和一六年〔1941〕三月一日「万才は養育料を猫婆々にして其子を興行師に売ったりと云ふ」	{第2版}浮世床初「五日ばかり過ぎたら帰さうといふ筈が、今日で一月になるが猫糞さ」	

これらの多くが、本性を包み隠して、表面おとなしうに見せるという意味を持ち、他も表面と内面の相違を表すものばかりである。これらより考えられるのは、猫へのイメージと人間の本性を隠すこととの関係性である。特に「猫被」の言葉を見てみると、おとなしうに見せるために猫を被るのであり、猫に対するイメージは、おとなしい生き物というイメージを持っていることが分かる。しかし、「猫根性」では、うわべは柔和そうに見えながら、内心は執念深く貪欲であることと、表面と内面との相違に関する言葉でありながらも、猫のイメージが投影されているとみられるのは、執念深く貪欲であるなど、先ほどの「猫被」とは全く違う猫へのイメージが見られている。また、「猫辞退」

では、内心では欲しいのに、表面では遠慮することであり、「猫撫声」は、おせじのうまい人やおべっか者、「猫糞」は、悪事を隠して素知らぬ顔をするなど、猫に対して表面と内面の相違があるというイメージとその上内面は悪意を持っているというイメージが浮かび上がってくる。

これらと「猫被」でのイメージでの相違はどういうことなのか。これらすべての文献での使用例を確認してみると、「猫被」だけが、使用例がすべて 1900 年代以降で使用されていた。他は 1700 年代～1800 年代であり、それ以前での使用例も見られた。これらより、人間性に関する「猫」の言葉からわかることは、猫に対してのイメージは変化しているとみられ、2.3 でも記述した『定本柳田國男集』などで見られた猫は恐れられる存在としてのイメージが 1800 年代以前には持たれており、言葉にもそれらが反映されていたものとみられ、1900 年代に入っていくにつれ、猫はおとなしい生き物としてのイメージが出てきて、それが言葉に反映されていったのではないかと考えられた。また、「猫被」は、猫自体のイメージに外面と内面の相違を言っているわけではないが、「猫」に関する言葉のイメージが時代により変化していった結果、以前の「猫」の言葉へのイメージの名残として外面と内面の相違がイメージの一部に加わり、その上で猫に対するおとなしい生き物としてのイメージが合わさって「猫被」の言葉ができたものと考えられた。

よって、「猫」に関する言葉のイメージは、時代によって変化しており、外面と内面の相違があるという共通イメージを持ちながら、恐れられる悪意ある存在としての猫のイメージから、1900 年代を境に、おとなしい生き物としてのイメージに変化していったことがわかった。

これより、「猫」に関する言葉のイメージは時代によって変化している可能性がわかった。

3 「ねこ」と言葉

この第3章では、「ねこ」とそれに関する言葉について検討・考察していく。中でも、「ねこ」のイメージや「ねこ」という言葉に込められたイメージ、「ねこ」に関する言葉とそのイメージやバリエーションについてみていきたい。

3.1 「ねこ」に関する言葉のバリエーション

この第1節では、「ねこ」に関する言葉の種類について、それらの傾向について記述する。「ねこ」に関する言葉については、『日本国語大辞典』²⁹⁾、『広辞苑』³⁰⁾、『古事類苑』³¹⁾を参照した。参考資料をご参照いただきたい。

「ねこ」に関する言葉のバリエーションとしては、意味としてみると以下のものが挙げられる。

(参考資料)

意味	件数
寝る	4
寝違える	2
寝たまま放っておく	2
樹木や草を根本から引き抜くこと	4
何もかも、根こそぎ	5
寝ころぶ	6
わら製品(むしろ、背負袋)	4
砂金選考法	2
その他	13
合計	42

「ねこ」に関する言葉としては、全42データ中、上記のような傾向が見られた。バリエーションとしては、4タイプに分けることができ、寝ることに関する言葉、樹木や草を根本から引き抜くことやそれから転じて何もかも、根こそぎという意味を持つ言葉、むしろや背負袋などのわら製品、最後に砂金選鉱法であった。

29) 日本国語大辞典第二版編集委員会，小学館国語辞典編集部編．日本国語大辞典．第2版．小学館，2002．

30) 新村出．広辞苑．岩波書店，1998，2988p．

31) 古事類苑．再版3版．吉川弘文館，1969．

さらに、砂金選鉱法は、わらを使用してするものなので、こちらもわら製品に関する言葉に含まれるだろう。よって、「ねこ」に関する言葉は、寝ること、根こそぎ、わら製品、という3種類の意味のバリエーションを持っているということがわかった。

続いて、これら3種類のバリエーションについて、動物の猫との関連性も見ながら、検討を加えていきたい。

まずは、「ねこ」に関する言葉の中で、猫と関連性のある言葉についてみていきたい。関連性のあるものとして、寝ることに関する言葉とわら製品及び砂金選鉱法が挙げられる。

最初に、寝ることについてだが、これについては、「寝子」、「寝子进行かく」、「寝転」、「寝拗」、「寝こそべる」、「寝込」など計15の言葉が挙げられる。

参考資料

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	ねこ(寝子)	【方言】(1)よく寝る者。よく寝る子。 (2)朝、いつまでも起きない人。朝寝坊。 (3)若者宿の仲間。			
2	ねこ(寝子)をかく	寝る。 【方言】眠る。寝入る。	* 俚言集覧[1797頃]「ねこをかく 寝ることをねこをかくとも云」		
3	ねこかし(寝転)	(「ねごかし」とも) 寝たまま放っておくこと。特に、遊里で相手が寝ている間に、こっそりいなくなってしまうことをいう。	* 俳諧・焦尾琴[1701]風・梅花之篇「こんにやくあたまたぐむこりすま(里東) 寐こかしを明日かへる迄ゆめいふなく(潘川)」 * 洒落本・金枕遊女相談[1772～81頃]「あとはきつねつきのはなれぎわを見るやうにせう氣を失ひ、ふんばたかりねてたかいびき、客にねごかしにあひ」 * 滑稽本・浮世床[1813～23]初・上「コレ、よくてめへ寐ごかしにいたナ」 * はやり唄[1902](小杉天外)六「貴女方は、私を寐騙(ネコカ)しにして行つてうんだもの、本当に酷(ひど)いよ」		
4	ねこかす(寝転)	(「ねごかす」とも) (1)横に寝かす。寝かしつける。 (2)寝たまま放しておく。寝っぱなしにしておく。特に、遊里で相手が寝ている間にいなくなる。 (3)寝たままで時をすごす。 【方言】寝かせる。	(2) * 洒落本・娼妓絹■[1791]二「忠兵衛は下さきくらしい所に(略)身をしのびある折から梅川は座敷の客をねごかして手水の顔でここへ来り」 * 滑稽本・七偏人[1857～63]四・下「お前僉(みんな)を寐こかして、髪を結に往て知らぬ顔とはづるいつい」		
5	ねこける(寝転)	正体なくぐっすり寝る。	* いさなとり[1891](幸田露伴)二四「飲めば直(ぢき)たわいなく鼾声(いびき)かいて眠転(ネコケ)て仕舞って」 * 新浦島[1895](幸田露伴)三「働だけを働いて寝るだけ寝こけて、夫婦中好く親子庇護ひ合つて寿命がつかたら死ぬるばかり」		
6	ねこじれる(寝拗)	【方言】(1)睡眠中、首の筋を連える。寝連える。 (2)寝そびれる。 (3)幼児が眠りばなを起こされてむずかる。			
7	ねこずる(寝一)	一ねこじれる(寝拗)			
8	ねこずれ(寝擦)	【方言】床擦れ。尊瘡(じょくそう)。			
9	ねこそべる(寝一)	【方言】寝そべる。			
10	ねこむ(寝込)	(1)ぐっすり寝入る。熟睡する。 * 洒落本・芳深交話[1780]「明六つでずい立よ、寐(ネ)こんだらおこしてくれろよ」 * 滑稽本・七偏人[1857～63]四・中「イヤもうタ(ゆうべ)っから飲つづけで、ぐっすり寐(ネ)こみ」 * 葛飾砂子[1900](泉鏡花)六「未だに生死のほども覚束ないほど寝込んで居る連の男を」 * 焚火[1920](志賀直哉)「寝込んで了ふと、明方は随分寒いでせうよ」 (2)病氣になって床につく。 * 或る死、或る生[1939](保高德蔵)一「毫碌して二十日も一ヶ月も寝込まれるやうでは、どうしていいか、彼女には見当がつかず」	(1) * 洒落本・芳深交話[1780]「明六つでずい立よ、寐(ネ)こんだらおこしてくれろよ」 * 滑稽本・七偏人[1857～63]四・中「イヤもうタ(ゆうべ)っから飲つづけで、ぐっすり寐(ネ)こみ」 * 葛飾砂子[1900](泉鏡花)六「未だに生死のほども覚束ないほど寝込んで居る連の男を」 * 焚火[1920](志賀直哉)「寝込んで了ふと、明方は随分寒いでせうよ」 (2) * 或る死、或る生[1939](保高德蔵)一「毫碌して二十日も一ヶ月も寝込まれるやうでは、どうしていいか、彼女には見当がつかず」		
11	ねころがる(寝転)	「ねころぶ(寝転)」に同じ。	* 煙管[1933](新田潤)「そんな仕事の合間合間には仰向けに寝転(ネコロガ)って何かどうか本を読んでゐた」 * 月は東に[1970～71](安岡章太郎)五「土堤の草原に体ごと投げ出すやうに寝転がったとたん」		
12	ねころばう(寝転)	「ねころぶ(寝転)」に同じ。	* 人情本・明烏後正夢[1821～24]三・一六回「ママ爰へしは寐(ネ)ころはいて、とても寐られぬとはいふても、みなこれ傍辺へ憚有」		
13	ねころばる(寝転)	「ねころぶ(寝転)」に同じ。	* 滑稽本・浮世風呂[1809～13]二・下「おれはあぐらをかきましただが、おめへはねころばりましたの」		
14	ねころび(寝転)	寝転ぶこと。	* 狂言記・抜殻[1660]「ねころびうって、あの池へはまるならば」		
15	ねころぶ(寝転)	ごろっとからだを横にする。無造作に横になる。ねころばる。ねころばう。ねころがる。ねつころがる。	* 為忠集[鎌倉中]「荻の葉は吹く秋風のつまやらんくるとひとくねころひにけり」 * 羅蘭日辞書[1595]「Reclivis (略)ヨリカカリ necorobitaru (ネコロビタル) モノ」 * 咄本・私可多咄[1671]二・四「いつの比ぞや、糺のもりにて、ゑむしろをよこにしきて、人々ねころひぬけるを見」 * 俳諧・古今俳諧明題集[1763]夏「偃(ネコロベ)ば庭のかくるるぼたむかなく(一風)」		

そして、どうしてこれらが猫と関係性があるのかというと、猫がよく寝る生き物と認識されていたということが挙げられる。『古事類苑』より、『日本釋名』の記述には、「猫 ねはねずみ也、こはこのむ也、なずみをこのむけもの也、一説、猫はよくねるをこのむ意か、順和名抄にねこまと訓ず、まとむと通ず、このむのむの字也、のを略せり」とあり、猫はよく寝る生き物として認識されていたことがみられる。また、ここにも記述があるように「ねこ」については、鼠を好むから「ねこ」以外に寝るを好むから「ねこ」という説があり、関連性があるとみられる。さらに、これらから逆に、最初から「猫」という言葉自体、猫が寝るから「ねこ」の音をあてるようになったのではないかと考えられる。よって、これらの説から考えると、「ねこ」に関する言葉で寝ることに関する言葉は、相互に「猫」と関係性を持ちながら発展したことばとも考えられた。

続いて、わら製品及び砂金選鉱法についてだが、「根拵網」、「根こすり」、「ねこだ」、「ねこげら」、「ねこだながし」、「ねこながし」の計6の言葉が挙げられる。

(参考資料)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	ねこさいあみ(根拵網)	大型の定置漁網。建網類のうち台網の一種。定置網漁業の先進地である富山湾の台網はすでに江戸時代初頭から使用され、この系統の網で各地に伝播されたものも少なくなかったが、そのうち、江戸後期に伊豆や相模に伝えられたものをいう。明治中期の資料でみると、垣網(かきあみ)の長さ二〇〇間(約三六〇メートル)、所要の漁船六隻、漁夫数十人にも及ぶ網であった。			
2	ねこすり(根一)	【方言】(1)なにもかも。ありっただけ。根こそぎ。全部。副詞的にも用いる。 (2)網を張って魚を追いつめる漁法。			
3	ねこだ	わらやなわで編んだ大形のむしろ。また、背負袋。ねこ。 【方言】 (1)わら製の敷物。大形のむしろ。 (2)檜(ひのき)の皮やわらで編んだ、一種の背■(はいのう)。 (3)荷を負うための、わら製の背中当て。 【語源説】 (1)ネコは猫の義で、猫が爪をといだようであるところから。タはワラダのダ[名言通]。 (2)ネコはネコ(寝処)の義か。タは助辞[俚言集覧]。 (3)ネゴサ(子臥坐)の義[言元梯]。 (「けら」は蓑の別名)人が荷を背負って運ぶ際に用いる蓑で編んだ背当。ねこ着。ねこがい。	* 俳諧・玉海集[1656]四・冬「ねこたといふ物をとり出してしかせ侍し程に」 * 雑俳・柳多留-三[1768]「百姓はねこだのうへで死にたがり」 * 俗語考[1841]ねこだ「今京師などにて福蓑とて、正月に敷事あるは此なごりなるべし。又かの蓑の上の表藉(うわしき)を蓑藉(ネコタ)と云」		
4	ねこげら	(「けら」は蓑の別名)人が荷を背負って運ぶ際に用いる蓑で編んだ背当。ねこ着。ねこがい。			
5	ねこだながし(-流)	砂金選鉱法の一つ。「ねこだ」または「ねこ」と呼ばれるわらで編んだむしろの上に砂金を含む砂や砕いた金鉱石を水とともに流すと、比重の重い金粒がむしろの目に残る。砂錫・砂鉄などの選別にも用いる。ねこながし。	* 日本山海名物図会[1754]—「金山淘法(きんざんかねゆり)絵(略)からうすにてつき、猫田ながしにかけて」		
6	ねこながし(-流)	「ねこだながし(-流)」に同じ。			

これらに共通しているのは、すべてがわら製品であり、むしろであったり、むしろを使用しているということである。これらがなぜ猫との関係性があるかという、このわら製品が猫の爪をといたようであることから「ねこ」が付いたという由来の為である。これは、『名言通』に大型のむしろを表す「ねこだ」の語原として掲載されており、「ネコは猫の義で、猫が爪をといたようであるところから。ダはワラダのダ」となっている。さらに、『日本民具辞典』より、この「ねこ」という名のつくわら製品には、「ネコ編み」という共通した編み方で編まれたわら製品であるということが述べられている³²⁾。これらより、この共通の編み方が猫が爪をといたように見えたから、それに「ねこ編み」と名付けられ、同じ編み方で作られた製品すべてに「ねこ」に関する言葉がつけられたのではないかと考えられた。「ねこ」の音に当てられている漢字は「根」など様々だが、動物の猫の存在があったからこそできた言葉と考えられた。

次に、「ねこ」に関する言葉の中で、「ねこ」独自に発展した言葉についてみていきたい。関連性のあるものとして、樹木や草を根本から引き抜くことやそれから転じて何もかも、根こそぎという意味を持つ言葉が挙げられる。

樹木や草を根本から引き抜くことに関する言葉として、「根掘」、「根抉」、「ねこそげ」、「ねこず」がある。

(参考資料)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	ねこじ(根掘)	樹木などを根のついたまま掘り取ること。 また、そのもの。→ねこし(根越)。 【方言】木の切り株。木の根っこ。	* 古事記[712]上「天の香山の五百津真賢木を根許士(ねこじ)爾(に)許士(こじ)てく許より下の五字は音を以てある」 * 書紀[720]神武即位前(熱田本訓)「乃ち丹生の川上の五百箇の真賢木を抜取(ネコシ)にして諸神を祭(いは)ひたまふ」 * 夫木[1310頃]二〇「神代よりくらぬやたのかがみ山ねこしのさか木色もかはらず」(藤原俊光) * 浄瑠璃・平仮名盛衰記[1739]「生る手比の並木の松ぐつと根こじに引抜て」 * 読本・春雨物語[1808]樊■下「見やるに、大きな木の根こじにて、流くだるが」	記上「根許士(ねこじ)にこじて」	
2	ねこじる(根抉)	【方言】根ごと引き抜く。			
3	ねこず(根掘)	(用例は連用形だけで、活用は上二段か四段か不明) 樹木などを根のついたまま掘り取る。	* 書紀[720]景行一二年九月(北野本訓)「則ち磯津(しつ)の山(やま)の賢木(さかき)を抜(ネコシ)り」 * 拾遺[1005~07頃]か]雑春・一〇〇八「いにし年ねこしてうゑしわかやとのわか木の梅は花さきにけり(安倍広庭)」 * 四季物語[140中頃]か]正月「わがみ山のあふひの根を根こして」 * 浮世草子・好色万金丹[1694]五・一「吉野の桜をねこじて植へ」 * 人情本・春色辰巳園[1833~35]三・一条「此方もねこそぎ身をいれて、苦勞をする氣の二人が中」 * 願くらべ[1916~17]〈永井荷風〉五「根こそぎ男の自由になるやうな色っぽい女がと思ふ事もある」 * 暗夜行路[1921~37]〈志賀直哉〉一・二「彼は自分の善段の氣分を根(ネ)こそぎ何処かへ持って行かれたやうな氣がした」 * 死霊・二章[1946~48]〈埴谷雄高〉「敵を根こそぎ駆逐することなしには、現世の支配も精神界永遠の王座も期し得ぬ」	拾遺「いにし年ねこじて植ゑし我が宿の若木の梅は花咲きにけり」	
4	ねこそぎ(根割)	根まですっかり抜き取ること。転じて、残すところなく、すべてすること。また、副詞的に、余すところなく、ことごとくの意にも用いる。ねこそげ。 【方言】なにもかも。ありったけ。副詞的にも用いる。			

32) 日本民具学会編．日本民具辞典．ぎょうせい，1997．

それから転じて何もかも、根こそぎという意味を持つ言葉として、「根扱」、「根こくり」、「根刮」、「根金際」、「ねこんず」が挙げられる。

(参考資料)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	ねこぎ(根扱)	樹木や草などを根ごと引き抜くこと。転じて、あますところなく取ること。根こそぎ。 【方言】 なにもかも。ありっただけ。根こそぎ。副詞的にも用いる。「酒をねこぎ飲んだ」	* 温故知新書〔1484〕「堀 ネコキ 木草」 * 日葡辞書〔1603～04〕「キヲnecoguini (ネコギニ) スル」 * 狂言記・富士松〔1660〕「松をばねこぎにするぞ」 * 浮世草子・けいせい伝受紙子〔1710〕五・一「大岸かたへ夜盗におしり、宮内親子を打きり、家財をねこぎに仕れば」 * 浄瑠璃・大塔宮囃子〔1723〕一「次ぎの骨牌(かるた)は八九三、是も目出度し鎌倉牌、根こぎにしゃんと掻き込みし親は二三四」	{第2版} 日葡「キヲネコギニスル」 {第3版} 狂、富士松「松をばねこぎにするぞ」	
2	ねこくり(根一)	なにもかも。ありっただけ。根こそぎ。(＝ねこすり)			
3	ねこそぎ(根刮)	根まですっかり抜き取ること。転じて、残すところなく、すべてすること。また、副詞的に、余すところなく、ことごとくの意にも用いる。ねこそげ。 【方言】 なにもかも。ありっただけ。副詞的にも用いる。	* 人情本・春色辰巳園〔1833～35〕三・一条「此方もねこそぎ身をいれて、苦勞をする気の二人が中」 * 腕くらべ〔1916～17〕〈永井荷風〕五「根こそぎ男の自由になるやうな色っぽい女がと思ふ事もある」 * 暗夜行路〔1921～37〕〈志賀直哉〕一・二「彼は自分の普段の気分を根(ネ)こそぎ何処かへ持って行かれたやうな気がした」 * 死霊・二章〔1946～48〕〈埴谷雄高〕「敵を根こそぎ駆逐することなしには、現世の支配も精神界永遠の王座も期し得ぬ」		
4	ねこんざい(根金際)	(「こんざい」は「こんりんざい(金輪際)」の略。「根こそぎ」と「こんりんざい」が合わさってきた語) 底の底。多く、副詞的に用いる。底の底まで全部。まったく。ことごとくまで。すっかり。ねこんぞう。ねこんず。	* 雑俳・川柳評万句合・宝暦一〇〔1760〕義二「ねこんざい盗んだとて草の庵」 * 浄瑠璃・神霊矢口渡〔1770〕四「元手の強い尊氏様も根(ネ)こんざいぶち負て、一番切替ふと鎌倉へ盆がへ」 * 滑稽本・続膝栗毛〔1810～22〕三・下「国サアおんなじとこで、ねこんざいからしりやうてをる中だアもの」	神霊矢口渡「元手の強い尊氏様も根(ネ)こんざい打負て」	
5	ねこんず	「ねこんざい(根金際)」の変化した語。	* 長唄・大原女〔1810〕「おっ立てられても笑はれても、根(ネ)こんず惚れたが性根ぢやえ」		

これらは、元々樹木や草を根本から引き抜くことという意味が転じて何もかも根こそぎという意味に変化していったという一連の経緯がある。おおもとになったと思われるのが、樹木や草を根本から引き抜くという意味を持つ「根掘」であり、両者とも『古事記』や『書紀』などの700年代の書物から使用がみられる。そして、他の言葉も同様に見ていくと、「根掘」などが意味を転じて生まれた言葉とみられるのが「根扱」であり、1484年の『温故知新書』ですでに使用例が見られ、他の言葉は1600年代以降の使用例となるので、この「根扱」で、樹木や草を根本から引き抜くという意味が何もかも根こそぎへと変化し、その変化した意味を用いた言葉ができて行ったのではないかと考えられた。

また、「根金際」は、語源として『日本国語大辞典』³³⁾より、「根刮」と「金輪際」が合わさってできた語とあり、元からあった意味が転じてできた言葉が他の言葉と組み合わせあってさらなる言葉ができていったという言葉における変化が見られた。さらに、これらは、「根掘」をはじめとして、意味や言葉の変化によりできた「ねこ」に関する言葉のバリエーションであり、動物の猫にはいっさいの関連性が見られなかった。よって、これらは、「ねこ」独自に発展していった言葉と考えられる。

3.2 「ねこ」に関する言葉のイメージ

ここでは、「ねこ」に関するイメージとして、『定本 柳田國男集』からデータを提示する(付属資料 を参照)。

「ねこ」に関する『定本 柳田國男集』から挙げられるイメージについてだが、まず最初に言っておかなければならないことは、大半が、「猫」の文字が当てられるものばかりであるということである。

33) 日本国語大辞典第二版編集委員会，小学館国語辞典編集部編 .日本国語大辞典．第2版．小学館，2002．

(参考資料)

No.	項目	原文	出典	備考
1	ネコ(念木)	②(念木・念棒より)山口縣の一部では、キリコまたはネコといふのが、鉤のある念木の特別品であつた。	②『董の方言など』	
2	ねこ(こたつ)	④炬燵といふ妙なものの起源は、今尚説明せられて居ないが…それが火鉢と結託して置炬燵となり、更に進んでは番所ごたつ、 ねこ といふ類の小發明も繼いで起つたことは、江戸期も終りの頃の文學に既に見えて居るが、(弓+ム)く農村の間に採用せられてのは、無論明治の四十年間の事蹟であつた。さうして是が一家の生活ぶりに新たな差別を立てたことは、或は食物などよりは更に著しいものがあつたのである。…さうして是があるが為に我々の寝(臣+人)法も(糸+言+糸+夕)化したのである。		
3	ネコオクリ	⑬ ネコオクリ 陸中の梁川などで、猫に祟られたといつて病氣になつた場合には、イタコに教へられてよく猫送りといふことをした。幅一尺長さ二尺位の板に、猫といふ文字を白くかいて、四辻へ持つて往つて立てる、人は是に近づくことを畏れて、遠まはりしたものだといふ(民俗研究四號)。津輕地方のイタコたちも、よく病氣の元を生き物の恨み崇りと説明するが、其場合には繪馬屋に頼んで、必ずその動物を畫に描いて貰つて、自分の信心する神社佛閣に持つて行つて掛ける。神官僧侶は全く是に參與せず、寧ろ迷惑して居る場合が多いといふ(松野武雄君)。これは頗る東京あたりのとは性質のちがつた繪馬で、私は寧ろ送り物の人形、乃至は芋の葉に包んだ蟻蟲など、同じ系統のものかと想像して居る。	⑬『神送りと人形』	
4	ネコツキ	⑩古い名詞ではありますが、このゴキはやはり過去の新語でありました。字には合器と書くのが多く、又は合子とも謂つて、木地引細工を意味した漢語であります。多分は禪宗の僧などの輸入かと思はれ、是を御器の音だといふ説は、其起りが不明になつてからのこじつけであります。是に反して、ゴキとやゝ似た言葉ですが、ジョウキ或はジョキといふのは、固有の日本語の磨り潰れたもので、常陸その他の關東の田舎にも残つて居ります。是を常器だといふのもやはり無理な宛て字で、本來は酒杯・高杯などのツキと同じ語でありました。壹岐島などでは食器をツキ又はクイツキ、猫の食器を ネコツキ と謂つて居ります。他の多くの地方では、ゴキもツキも古臭くなつて、専ら犬猫だけの食器の名となつて居ます。他には使はぬ故に、犬ゴキ 猫ツキ の語の頭を省略したのでせう。	⑩『家具の名二つ三つ』	
5	ネコソバエ	②②(ハゴジヤ)越後の西頸城郡では ネコソバエ		
6	ネコマナグ	⑩ ネコマナグ 鹿角方言集に、他人が見て居る時は眼をそらし、見て居らぬときのみ鋭くこちらを視るやうな人だとある。是などはよく當つて居る。しかし格別當つて居ないでも、團栗眼とか獅子つ鼻といふやうに、意外なたとへなら人は笑ひ、笑へば造語の目的は達したのである。	⑩『新語余論』	
7	ネコグサ	②②(白頭翁)福岡縣などでは ネコバナ・ネコグサ		
8	ネココ	①普利根川にはネココと云ふ河伯(河童?)が住んで居た。	①『楊枝を以て泉をトする事』	
9	ネコダ	⑮(私生兒を意味する方言) ネコダ 飛驒の一部 ネコダは物を背負ふ場合に着る蓑製のせなかあての名で、それと何かの關係があるらしい。	⑮『私生兒を意味する方言』	
10	ネコノメ	⑩ 子供は多くの草木の命名者であつたと思ふ。例へば人家の周圍などに多くあるリウノヒゲ、またはタツノヒゲといふ草の實を、越後では ネコノメ 、あるひはメメンコと言つて居る。メメンコとは母などがにらむことである。	⑩『方言と昔』	
11	ネコバナ	②②(白頭翁)福岡縣などでは ネコバナ・ネコグサ		
12	ネコヤナギ	⑩秋田縣の横手町近傍では、かはやなぎの木の白い芽出し、普通に我々が ネコヤナギ だのチンコロだのといふものを、方言にメメンコと呼んで居る。このメメンコも前の龍のひげのメメンコと同様に、にらむことを意味するのでは無いかと思ふ。	⑩『方言と昔』	
13	ネコヤロ	⑩ ネコヤロ は紀州の日高郡などで、けら螻蛄のことである。此蟲は子供の遊び相手である故に、テデフグリだのトクエアツペだのと、あらはに解説し得ない異名が甚だ多い。猫遣らうも其一つで、此蟲の頸部をつまむと、ちよつと小猫を持つて引上げた時の様な形をする所から此名がある。可なり意外な又氣の利いた語だから残るかと思ふ。	⑩『新語余論』	
14	ネコンピン	②②(ぺんぺん草)熊本縣の玉名郡では此草を ネコンピン と謂つて居る。		

意味の傾向としては、「ねこ」の言葉として猫の漢字をあてられていない言葉の多くは、猫の身体的特徴を比喻として使った植物に関する言葉が多く見られた。それ以外では、道具に関する言葉や人間の行動に関する言葉、猫の呪いを表す言葉などが挙げられている。これについては、2.2 あげた「ネコオクリ」が代表例として挙げられるが、これは使用例として「ネコオクリ」の表記がされているだけで、内容的にも猫と関連性があるのは自明である。

それ以外の例としては、「ネコ(念木)」、「ねこ」、「ネコヅキ」、「ネコマナグ」、「ネココ」、「ネコダ」が挙げられる。これらは、こたつや木製品、犬猫用の皿などの品々の名称や誰も見ていない時にのみ鋭い視線をよこす人のことや私生児を意味する方言であったりと、様々な意味を持っている。また、言葉のイメージとして、「ネコマナグ」から見るができる。「ネコマナグ」とは、誰も見ていない時にのみ鋭い視線をよこす人のことであり、方言ではあるが、猫の視線をこの人の行動の比喻として使用しているようであり、これも猫に関連のある言葉のようだ。そして、猫に対して、誰の意識も自身に向けられていない時にのみ、標的に狙いを定めるという、すなわち、油断の隙をつき、狙いを定めるイメージがこの言葉から見られた。

4 「猫」と「ねこ」から見る言葉の由来と成立

この第4章では、ここまで第2章と第3章で検討してきた「猫」と「ねこ」及びそれらに関する言葉とイメージから、言葉の由来と成立について、検討・考察をしていきたいと思う。

4.1 「猫」と「ねこ」に関する言葉の関係性

まず、4.1では、第2章と第3章で検討してきた「猫」と「ねこ」に関する言葉について、両者に共通する共通項を比較・考察することで、言葉の由来と成立について検討・考察していく。

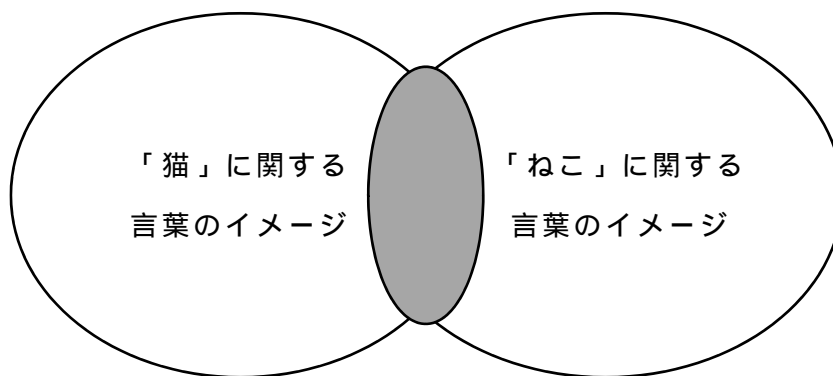
「猫」に関する言葉と「ねこ」に関する言葉、両者の言葉のバリエーションはそれぞれ2.4と3.1でそれぞれ示してきた。その中には、言葉のバリエーシ

ョンの中に存在する傾向なども提示してきた。そこで、そのバリエーションと傾向の中で共通するものを抜きだし、詳細に検討と考察を行っていく。

「猫」と「ねこ」に関する言葉の共通する傾向として見られるのは、遊女に関する言葉とわら製品に関する言葉である。それでは、「猫」・「ねこ」に関する言葉の共通性から見る分析を始めていきたいと思う。

また、ここまでに検討・考察してきた「猫」と「ねこ」に関する言葉のイメージとしては、図化(参考資料 参照)するとこのようになり、「ねこ」に関する言葉のイメージは、独自のイメージだけでなく、「猫」に関する言葉と同一の部分も存在することが分かった。

(参考資料)



4.1.1 猫と遊女

まずは、「猫」と「ねこ」に関する言葉と遊女についての関係性から探っていきたい。

最初に、猫と遊女との関係性について考えていきたい。それに関連するものとして、「寝子」と書いて遊女を表す言葉の存在を意味する言葉がある。「猫」は、「寝子」と書いて私娼の異称とされており、これは、元々猫が夜行性の上、昼間はよく寝ている生き物であることから、同じく夜間に仕事を行っている遊女たちと同じように見られていた可能性があり、「ねこ」という音と寝るとい

う漢字を使ったこの言葉が作られたと考察した。

続いて、「猫」に関する言葉の中で、遊女に関する意味を持つ言葉を検討・考察していきたい。それらの意味を持つ言葉は、以下のものとなる。

(参考資料)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	古事類苑	備考
1	猫	「寝子」から私娼の異称		「寝子」から私娼の異称		
2	猫好	(1)猫が好きで大変にかわいがること。また、その人。 (2)芸妓をあげて遊興することを好むこと。また、その人。	(1) * 咄本・さすゞめ[1777]猫「ねこずきなむすこ、おやちのるすの内、きれいな白猫をもらっておけば」 (2) * 雑俳・柳多留-一三[1778]「猫好も男の方は金がいり」			
3	猫茶屋	江戸の本所回向院前(墨田区両国二丁目)で、金猫・銀猫と称する私娼を抱えていた茶屋。天明(一七八一~八九)頃繁昌したが、寛政の改革で取り払われた。	①洒落本・一事千金[1778]序「夏さへふれるあわ雪や、猫茶屋(ネコチャヤ)の鼻頭(はなさき)と、女郎の心の冷酒をかんにしなの善光寺」 ②随筆・飛鳥川[1810]「回向院前通りは、藤堂の辻の角まで一円猫茶屋あり、土手側と云」			
4	猫股女郎	誠意のない女郎をののしっている語。	①洒落本・婦身噺[1820]居続宵泊の段「しやうねのくさったねこ又女郎(チョロウ)」 ②随筆・十八大通[1846]「うぬ猫又女郎め、爰に居たか」			
5	猫には遊女が成る	遊女が死ぬと猫に生まれかわるという俗説。逆に「傾城には猫が成る」ともいう。	* 浄瑠璃・鎌倉三代記[1716]二「実にはや世上の諺に、猫(ネコ)には遊女(イウジョ)が成(ナ)るとやら」			
6	猫に木天蓼お女郎に小判	大好物のたとえ。また、効果が著しいことのたとえ。				
7	猫の一物	湯女(ゆな)のこと。	* 浮世草子・傾城新色三味線[1718]四・大坂・二「むかしより風呂屋女を猿と云を、近年わるじゃれ中間(なかま)の伝受にて、ねこの一物(イチモンツ)といへり、是爪をかくすと云事成べし」			

続いて、「ねこ」に関する言葉の中で、遊女に関する意味を持つものは、以下の通りとなる。

(参考資料)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	古事類苑	備考
1	ねこかし(寝転)	(「ねごかし」とも) 寝たまま放っておくこと。特に、遊里で相手が寝ている間に、こっそりいなくなってしまうことをいう。	* 俳諧・焦尾琴[1701]風・梅花之篇「こんにはやくあたまたぐむこりすま(里東) 寐こかしを明日かへる迄ゆめいふ(な)く(潘川)」 * 洒落本・金枕遊女相談[1772~81頃]「あととはきつねつきのはなれぎわを見るやうにせう気を失ひ、ふんばたかりねてたかいびき、客にねごかしにふひ」 * 滑稽本・浮世床[1813~23]初・上「コレ、よくてめへ寐こかしにいたナ」 * はやり唄[1902]〈小杉天外〉六「貴女方は、私を寝騙(ネコカ)しにして行ってうんだもの、本当に酷(ひど)いよ」			
2	ねこかす(寝転)	(「ねごかす」とも) (1)横に寝かす。寝かしつける。 (2)寝たまま放っておく。寝っぱなしにしておく。特に、遊里で相手が寝ている間にいなくなる。 (3)寝たまま時をすごす。 【方言】 寝かせる。	(2) * 洒落本・娼妓綱■[1791]二「忠兵衛は下ざきくらい所に(略)身をしのびある折から梅川は座敷の客をねごかして手水の顔でここへ来り」 * 滑稽本・七偏人[1857~63]四・下「お前食(みんな)を寐こかして、髪を結に往て知らぬ顔とはづるいづるい」			

「猫」と「ねこ」に関する言葉における遊女に関する言葉は、全部で9件見られる。最初に、「猫」の項目から、「寝子」と書いて私娼の異称とされており、

これは、元々猫が夜行性の上、昼間はよく寝ている生き物³⁴⁾であることから、同じく昼間寝て、夜間に仕事を行っている遊女たちと同じように見られたため、「ねこ」の音を使用し、このような言葉ができたのではないかと考えられた。

続いて、その他の言葉を見てみると、遊女そのものを表す言葉から、茶屋を表す言葉など様々な意味を持つものがみられる。さらに、猫と遊女についてみることが出来る言葉は、「猫好」、「猫股女郎」が挙げられる。

まず、「猫好」は、猫が好きで大変にかわいがることや芸妓をあげて遊興することを好むことのことである。好かれる対象として猫と芸妓が対比されており、猫のイメージとしても可愛がられる対象として見られていることがわかる。

続いて、「猫股女郎」だが、こちらは打って変わって、誠意のない女郎を罵っている語であり、誠意の無さを猫股のイメージとしており、化けた猫は人々を騙すというイメージがあったものと考えられた。また、関連性のある言葉として、「ねこ」に関する言葉から、同じ遊女に関する言葉から「寝転かす」と「寝転かし」があり、共に、遊里で相手が眠っている間にいなくなってしまうことを言う。これは、元々は、「寝る」と「転がす」を組み合わせ、「寝転かす」という言葉と寝たまま放っておくという意味を持ったものだったと考えられ、それにどうしてこのような遊女に関係のある意味が付いたのだろうか。推測されるのは、前述したねこと読んで遊女を表す「寝子」という言葉が挙げられ、「寝転かす」と「寝転かし」に「ねこ」という音が含まれているところから、そういう意味が発生したのではないかと考えられた。

さらに、伝承や俗説の側面から猫と遊女について考えてみたいと思う。まずは、猫の伝承の中の一つである猫と薄雲太夫の話があり、そこから、猫と遊女の関係性の俗説が出たという説もある³⁵⁾。

34)岡田要監修．動物の事典．第3版．東京堂，1957．

35)芦田正次郎．動物信仰事典．北辰堂，1999．

これは、東京都の西方寺(豊島区)の猫像に伝わる話である。この猫は吉原の薄雲太夫の飼猫で、太夫が厠に入ろうとすると離れないので、遊女屋の主が刀でその首をはねると、首は厠の下にいた大きな蛇の首へ噛みついた。吉原は田圃に囲まれており、ヘビが厠に入る可能性もあった。太夫はこれを知って猫を厚く供養したという。そして、その時の像が西方寺の猫像という話である。一説には、その猫像が後の招き猫の元になったとも言われている。この話において、猫が飼い主の遊女を蛇から守ったという構図があり、ここでの遊女と猫は、忠実な主従関係として描かれている。そして、飼い主である太夫を害悪から守った力ある存在としても描かれている。特に、ここで登場する太夫は、吉原遊女三千人から四千人の中でも十人から二十人ほどと言われ、上流階級の夫人を上回る教養を持っている存在である。他の遊女へも人々へも影響力は大きかったであろう。これより、遊女は猫を飼っているというイメージと猫と遊女との関係性の確立が行われた事例とみていいだろう。

また、別の猫と遊女の話として、化猫遊女が挙げられる。江戸時代、黄表紙などで取り上げられていた話で、元は品川宿で噂されていた話を元に創作された話だという。

具体的な内容としては、品川の伊勢屋という店には、化猫の飯盛女がいたと噂されていた。その後、伊勢屋は「化物伊勢屋」または「お化け伊勢屋」と呼ばれるようになったという³⁶⁾。ちなみに、品川は日本橋東海道の第一番目の宿場であり、吉原と違い正式な遊郭ではなかったが、宿で働いていた飯盛女は公認されていたのである。この話が広まることで、化猫遊女のキャラクターが確立されていき、黄表紙や狂言に化猫遊女の話が登場するようになったのである。内容としては、馴染みの遊女が凄まじき古猫の姿に変化しているもの(『化物 世櫃鉢木』)から女郎に化けた猫又が夜な夜な正体を現し、肴の余り物などを食い散らかしたり(『歌舞伎年表』)、男が女郎屋の遊女たちが食事をとる下卑蔵部屋をそっと覗いて見れば、化物が客の腕とおぼしきものをむしゃくしゃ食っていたりする。

36) アダム・カバット .ももんがあ対見越入道 江戸の化物たち .講談社 ,2006 .

そして、最後に、「ぬしあ何ぞ見なんしたか」と客に廓言葉で問いかけるのである。この最後の話の結末は薩摩芋の見間違いだった(『小雨衆雨見越松毬』)というオチとなっている。

このように話に登場する遊郭は、実際、近世に於いては、遊び場であり社交場であった。遊女は、理想の遊び相手であった。しかし、その反面、公娼である吉原は私娼に比べて金銭の負担が大きかったなど、遊ぶことによって、さらには遊女の手腕によっては、お金が巻き上げられるようになってくることがあり、その辺から、遊女に対して警戒心があった可能性が考えられる。よって、遊女に対する理想と反面金銭的な警戒から、化け猫という表裏のある存在を模した、このような化猫遊女という話ができた可能性が考えられた。

ここまで、遊女を意味する「猫」と「ねこ」に関する言葉と猫と遊女に関する話を見てきたが、猫と遊女の関係性は、夜間仕事や行動している様子など両者の共通性から、さらには、遊女に対する理想と反面金銭的な警戒から、化け猫という表裏のある存在に比喻され、そして、遊女が猫を飼うことによる猫と遊女との関係性の確立によるものではないかと考えられた。

そして、これらのような関係性から、「猫」や「ねこ」に関する言葉として、遊女に関する言葉が成立してきたのである。「猫茶屋」や「猫又女郎」などの初めから遊女に関することを表すために作られた言葉に、「猫好」のような初めから猫に関する意味を持ち、そこから遊女に関する意味も附属した言葉、さらには、「寝転かす」や「寝転かし」などのように、音で「ねこ」を持っていたために、遊女に関する意味を附随された言葉も見られた。

4.1.2 猫とわら製品

続いて、「猫」と「ねこ」に関する言葉とわら製品についての関係性から探っていきたい。

最初に、「猫」に関する言葉の中で、わら製品に関する意味を持つ言葉は、以下のものとなる。

(参考資料②)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	猫網	地引網の一種。その構造は普通の地引網に等しく、■網(ふくろあみ)の長さ二五尋(ひろ＝約四五メートル)、■口の直径五尋(約九メートル)以下、その前方の袖網の長さ二五尋、これに長さ二〇〇尋(約三六〇メートル)の引網をつけたもの。			
2	猫飼	(「ねこがい」とも) 農具の一種。太い縄を縦にして、これに藁を厚く組んで作り、穀物の種子などを盛り入れるのに使用する。ねこかえ。	①和漢三才図会〔1712〕三五「■(ネコガヒ) 福古加比 三才図会云、■去レ草器、今之盛ニ穀種一器也。論語曰、以レ杖荷レ■者是也、按■与レ簀同レ訓、蓋簀以レ竹作、■以レ藁作名ニ猫飼(ネコカヒ)一者類乎」 ②広益国産考〔1859〕一「■ネコガヒ」		
3	猫掻(ねこがき)	(1)藁で編んだむしろ。ねこだ。蹴鞠(けまり)などの時、庭に敷くにも用いた。 (2)唐物(からもの)の青磁茶碗や朝鮮の金海茶碗などのなかで、見込や外側に猫の爪跡のような櫛目文様のあるもの。 【方言】 (1)わら製の敷物。大形のむしろ。 (2)檜(ひのき)の皮やわらで編んだ、一種の背■(はいのう)。 (3)床下の塵埃(じんあい)。	(1) ①明月記・寛喜二年〔1230〕六月二日「密々有ニ御鞠一、敷ニ猫掻一」 ②古今著聞集〔1254〕一一・四一五「ねこがきを敷かれたり」 ③随筆・安斎随筆〔1783頃〕一九「ねこかきねこかきは今世田舎にてねこたと云ふむしろなり、わらにて綾衫に組みたるものなり」		
4	猫車	箱の前面に車輪一個をつけ、後部に手押し用の柄をつけた車。土砂などを運ぶために用いる工事用の一輪車。ねこ。 【方言】植物、ひがんばな(彼岸花)。	①風俗画報・一〇六号〔1896〕人事門「今昔より有りきたる車の種類(略)半荷車、青蓋(せいかい)車、輦(てぐるま)車、猫(ネコ)車、乳母車」 ②鐘供養の日〔1943〕〈井伏鱒二〉「石材を運ぶ大型の猫車を曳いて来て」		
5	猫ぶく	わら縄を編んで作った大形の厚いむしろ。		* 諸国風俗問状答〔190前〕備後国福山領風俗問状答・正月・二「まとひ藁は猫福と申、厚き物に候故、はやす時却て目さましく候」	

続いて、「ねこ」に関する言葉の中で、遊女に関する意味を持つものは、以下の通りとなる。

(参考資料②)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	ねこさいあみ(根拵網)	大型の定置漁網。建網類のうち台網の一種。定置網漁業の先進地である富山湾の台網はすでに江戸時代初頭から使用され、この系統の網で各地に伝播されたものも少なくなかったが、そのうち、江戸後期に伊豆や相模に伝えられたものをいう。明治中期の資料でみると、垣網(かきあみ)の長さ二〇〇間(約三六〇メートル)、所要の漁船六隻、漁夫数十人にも及ぶ網であった。			
2	ねこすり(根一)	【方言】(1)なにもかも。ありっただけ。根こそぎ。全部。副詞的にも用いる。 (2)網を張って魚を追いつまむ漁法。			
3	ねこだ	わらやなわで編んだ大形のむしろ。また、背負袋。ねこ。 【方言】 (1)わら製の敷物。大形のむしろ。 (2)檜(ひのき)の皮やわらで編んだ、一種の背■(はいのう)。 (3)荷を負うための、わら製の背中当て。 【語源説】 (1)ネコは猫の義で、猫が爪をといだようであるところから。ダはワラダのダ〔名言通〕。 (2)ネコはネコ(寝処)の義か。夕は助辞〔俚言集覧〕。 (3)ネゴサ(子臥坐)の義〔言元梯〕。	* 俳諧・玉海集〔1656〕四・冬「ねこたといふ物をつり出してしかせ侍し程に」 * 雑俳・柳多留・三〔1768〕「百姓はねこたのうへで死にたがり」 * 俗語考〔1841〕ねこだ「今京師などにて福藁とて、正月に敷事あるは此なごりなるべし。又かの藁の上の表藉(うわしき)を藁藉(ネコタ)と云」		
4	ねこげら	(「けら」は藁の別名)人が荷を背負って運ぶ際に用いる藁で編んだ背当。ねこ着。ねこがい。			
5	ねこだながし(-流)	砂金選鉱法の一つ。「ねこだ」または「ねこ」と呼ばれるわらで編んだむしろの上に砂金を含む砂や砕いた金鉱石を水とともに流すと、比重の重い金粒がむしろの目に残る。砂錫・砂鉄などの選別にも用いる。ねこながし。	* 日本山海名物図会〔1754〕一「金山淘法(きんざんかねゆり)絵(略)からうすにてつき、猫田ながしにかけて」		
6	ねこながし(-流)	「ねこだながし(-流)」に同じ。			

「猫」と「ねこ」に関する言葉におけるわら製品に関する言葉は、「猫」に

関する言葉 5 件、「ねこ」に関する言葉 6 件で、全部で 11 件見られる。

これらの言葉について見てみると、「猫」に関する言葉は、「猫車」を除いてすべてがわら製品とそれを使用した農具・漁具である。「ねこ」に関する言葉では、こちらも「猫」に関する言葉同様、わら製品とそれを使用した農具・漁具、さらにはわら製品を用いた砂金選鉱法となっている。

第 2 章より、わら製品と猫との関係性は、わら製品の編み目が猫が爪をいだようであることから、この編み方をネコ編みと呼んでいたという^{37), 38)}ことからきているとみられる。

また、これらわら製品に関する言葉の時代としては、1200 年代の引用文献がある「猫搔（ねこがき）」がもっとも古く、この蹴鞠の時に、庭に敷くのに用いられた藁で編まれたむしろが、これらすべての言葉の由来となった可能性があり、しばらくはこの意味で使われていたようである。そして、1700 年代に最初の「猫搔（ねこがき）」が蹴鞠用のむしろから、一般的に藁で編んだむしろとして使われ始め、他の 4 つの言葉ができたようである。また、1600 年代に「ねこだ」が文献に登場し、藁で編んだむしろという意味のほかに、背負袋としての意味も追加された。「猫搔（ねこがき）」の文献事例の『安斎随筆』において、「ねこた(ねこだのことと思われる)」について、今世での田舎でのむしろのことと述べており、元々都でできた言葉が、地方に伝わり、それを由来として新たな言葉として生まれた事例と言える。

ここまでから、わら製品に関しては、猫の爪をいだような編み目をネコ編みと呼んでおり、多くが、それが由来となって成立した言葉とみられる。また、猫車など、農具や漁具などにも「猫」や「ねこ」は使われていることがあるが、それらも同様に、それら道具と猫の似通っている性質があるため(猫車であれば、車の音が猫の音に似ているため)、言葉に「猫」・「ねこ」が使われ、言葉として使われているようである。

37) 日本国語大辞典第二版編集委員会，小学館国語辞典編集部編 .日本国語大辞典．第 2 版．小学館，2002．

38) 日本民具学会編．日本民具辞典．ぎょうせい，1997．

これらから見てわかるように、わら製品の多くは、猫を良く知らなければわからないような、猫のひっかいた痕やひっかく音から取られているため、農具や漁具としての用途があるものは、農村や漁村で身近に猫がいたと思われる室町時代以降に成立及び変化した言葉とみられ、さらに、養蚕などが農家で始まった近世後期にはさらに普及したとみられる。

最後に、このわら製品に関する言葉は、前述したように、猫のひっかいた痕やひっかく音を由来として作られたという、猫の存在そのものから作られた言葉ということが分かった。4.1.1で考察した遊女に関する言葉と違い、化ける猫ではなく、普通にすごし暮らしてきた家猫たちがもととなって作られたのである。

4.2 言葉の由来と成立

ここまで「猫」と「ねこ」及びそれに関する言葉の分析・公設を通じて、言葉の由来と成立にはどのようなことがあるのか見てきた。それについて、これまでに提示したデータや考察を利用して、イメージや意味を利用して、言葉の由来と成立について検討していく。

4.2.1 言葉の由来について

まず、言葉の由来について、「猫」と「ねこ」に関連する言葉から見てきたが、以下のことがわかった。

それは、言葉とは、由来に対する人々のイメージによって意味を変え、時には新しい言葉が誕生しているということである。

ここまで検討してきた中で、特にそれを顕著に表しているのが、わら製品に関する言葉と表面と中身が全然違う人間の性質を表している言葉である。

最初に、わら製品に関する言葉から、「猫搔(ねこがき)」と「ねこだ」の事例が挙げられる。「猫搔(ねこがき)」は、わら製品に関する言葉の時代として

は、1200 年代の引用文献があり、もっとも古い事例である。蹴鞠の時に、庭に敷くのに用いられた藁で編まれたむしろが、これらすべての言葉の由来となった可能性があり、しばらくはこの意味で使われていたようである。そして、1700 年代に最初の「猫搔（ねこがき）」が蹴鞠用のむしろから、一般的に藁で編んだむしろとして使われ始め、他の 4 つの言葉ができた。前述で取り上げた「猫搔（ねこがき）」の文献事例の『安斎随筆』などからも、むしろに対するイメージの変化によって、元々あった「猫搔（ねこがき）」以外に「ねこだ」ができたとみられ、これらより、時代によって変化するイメージが言葉の由来に影響していることがはっきりと見られた事例となった。

続いて、表面と中身が全然違う人間の性質に関する言葉は、全 10 件あり、これらの多くが、本性を包み隠して、表面おとなしそうに見せるという意味を持ち、他も表面と内面の相違を表すものばかりである。これらより考えられるのは、猫へのイメージと人間の本性を隠すこととの関係性であることは、先に述べた。その中でも、「猫被」は、本性を包み隠して、表面おとなしそうに見せることから、おとなしそうに見せるために猫を被るのであり、猫に対するイメージは、おとなしい生き物というイメージを持っていることが分かる。しかし、「猫根性」では、うわべは柔和そうに見えながら、内心は執念深く貪欲であることと、表面と内面との相違に関する言葉でありながらも、猫のイメージが投影されているとみられるのは、執念深く貪欲であるなど、先ほどの「猫被」とは全く違う猫へのイメージが見られている。また、残りの「猫辞退」では、内心では欲しいのに、表面では遠慮すること、「猫撫声」は、おせじのうまい人やおべっか者、「猫糞」は、悪事を隠して素知らぬ顔をするなど、猫に対する表面と内面の相違があるというイメージとその上内面は悪意を持っているというイメージが浮かび上がってくる。

また、これらと「猫被」でのイメージでの相違については、文献使用例から「猫被」だけが、使用例がすべて 1900 年代以降で使用、他は 1700 年代～1800 年代であり、それ以前での使用例であるということがわかった。

これらより、人間性に関する「猫」の言葉からわかることは、猫に対してのイメージは変化しているとみられるということである。猫に対しては、『定本

柳田國男集』や『国史大辞典』などから、猫という存在が、中国から渡来してきてからは、得体のしれない恐れられる存在であったが、室町時代に入り庶民にも飼われるようになり一般化して身近になり、1900年代になると、ペットとして大人しくかわいい存在へと変化していったのである。これらより、猫は恐れられる存在としてのイメージが1800年代以前には持たれており、言葉にもそれらが反映されていたものとみられる。そして、次第に、多くの一般の人々に飼われたり、恐れられる存在としての対象が狼へと移っていくなど、恐れられる存在としての側面が薄れていき、1900年代に入っていくと、今度は、猫はおとなしい生き物としてのイメージが出てきて、それが言葉に反映されていたのではないかと考察してきた。

そして、これは、由来である「猫」自体のイメージの変遷を見ていることにもなる。「猫」のイメージの変化が、新たな言葉を生み出していったのである。特に、それがよくわかるのが「猫根性」から「猫被」への意味の変化である。同じ外面と内面との相違に関する言葉でありながら、由来である猫に対するイメージが、悪意ある存在からおとなしい存在へと変化しているのである。そして、文献使用例からも、時代による変化ということが分かっており、すなわち由来に対する時代によるイメージの変化により生まれた言葉が「猫被」なのである。

また、4.1.1の猫と遊女で取り上げた「猫好」と「猫股女郎」からも同様のイメージの変化を見ることができる。

まず、これは前述したが、「猫好」は、猫が好きで大変にかわいがることや芸妓をあげて遊興することを好むことのことであり、この言葉からは、好かれる対象として猫と芸妓が対比されており、猫のイメージとしても可愛がられる対象として見られていることがわかる。

続いて、「猫股女郎」だが、こちらは打って変わって、誠意のない女郎を罵っている語であり、誠意の無さを猫股のイメージとしており、化けた猫は人々を騙すというイメージがあったものと考えられた。

よって、この両者は、共に猫を由来としながらも、猫に対するイメージが、かわいがる存在と人々を騙す存在という両極端のイメージが持たれているこ

とが分かる。この二つの言葉は、1700年代～1800年代という似たような時期において文献の使用例が見られており、時代による由来へのイメージの変化以外に、元来の猫へのイメージがある時期でも、違うイメージがもたれるようになったら、新たに言葉ができ、それが使われるようになるという例とも見られた。

ここまで、言葉の由来についてこれまでに取り上げた3件の例を取り上げ、考察してきたが、言葉は、由来のイメージの変化によって生まれていくということ、すなわち人間が由来となる対象に対して抱くイメージ変化による必要性から言葉が生まれているのである。同時期であっても、由来に別イメージが生まれれば、言葉もできるのである。

よって、言葉において、由来に対する人々のイメージが大変重要であるということがわかった。

4.2.2 言葉の成立について

続いて、言葉の成立について見ていきたいと思う。「猫」と「ねこ」に関連する言葉から見てきたが、以下のことがわかった。

それは、言葉は、由来と言葉として表現する対象の関係性によって成り立っているということである。

ここまで検討してきた中で、それをよく表しているのが、4.1.1で取り上げた「猫」と「ねこ」に関する言葉の中の遊女を表す言葉である。

遊女を表す言葉からは、猫と遊女の関係性は、夜間仕事や行動している様子など両者の共通性から、さらには、遊女に対する理想と反面金銭的な警戒から、化け猫という表裏のある存在に比喻され、そして、遊女が猫を飼うことによる猫と遊女との関係性の確立によるものではないかと考えられた。これらから、「猫」と「ねこ」に関する言葉の中の遊女に関する言葉の成立には、猫と遊女の共通性や遊女が猫を飼うなどの関係性があったためにできたのである。

また、「猫」や「ねこ」に関する言葉において、成り立ちにおいては、言葉

として表現する対象へのイメージもかかわってくるのではないかと考えた。

「猫」と「ねこ」に関する言葉の中の遊女に関する言葉においては、遊女に対する理想と警戒から表裏ある存在としてのイメージが挙げられる。これらイメージはそれぞれ言葉の一部となっている「猫」と「ねこ」と直結しており、これらのイメージと、得体のしれない、表裏ある存在としての猫のイメージが、人々は、一見まったく関連性のないように見える遊女に対して、「猫」と「ねこ」を使った言葉を作ったのである。

ここまで、言葉の由来についてこれまでに取り上げた3件の例、「猫」と「ねこ」に関する言葉の中の遊女に関する言葉から、言葉の成立について考察してきたが、言葉は、由来と言葉として表現する対象の関係性によって成立しているということがわかった。「猫」や「ねこ」に関する言葉においては、猫と遊女であつたりと、両者の関係性がなければ成立することができなかったはずである。

また、「猫」や「ねこ」に関する言葉において、成り立ちにおいては、言葉として表現する対象へのイメージもかかわってくる。その対象へのイメージと猫のイメージとが重なり合うことで、言葉が成り立つことも見られた。

よって、言葉の成立には、由来と言葉として表現する対象の関係性及び互いのイメージの合致が大変重要であるということがわかった。

4.3 終わりに

ここまで、「猫」と「ねこ」に関する言葉を通して、言葉の由来と成立を分析、検討、考察してきたが、由来は、由来に対する人々のイメージが、成立は、来と言葉として表現する対象の関係性及び互いのイメージの合致があることによって、言葉はできているということがわかった。

今現在、言葉の成立は、いったん終息したかのように見えるが、辞書・事典などに掲載される一般的に使用される言葉が固定されてきているだけで、新たな言葉はたくさん生み出されてきている。特に、現代日本文化の代表例である

ネットにゲーム、アニメや漫画に関わる若者たちは、独自の言葉を作り、発信し続けているのである。今回の研究においてわかった由来と成立における言葉について、これら新たな言葉の研究において、一助となることができると自負している。

しかし、今回の研究において、一般的な言葉を収録しているとされる『日本国語大辞典』をはじめとする辞典・辞書類、さらには言葉や対象物のイメージをさぐることのできる伝承・伝説を多数収録した『定本 柳田國男集』があったということは大変大きな事実である。

まずは、この研究結果を用いた研究となると、現代に生まれてきている言葉を客観的に収録している辞書・事典類の必要性、さらには、それらを分析することのできる現代のイメージを抽出できるだけの信頼のおける資料が必要となってくる。これらが無くては、今回の研究結果同様の論点は使うことができず、現代においては、ネット上の資料などが多く出回る中で、それらの客観性を見極める目と他資料も必要となってくる。

よって、今後の課題として、現代の新しい言葉の研究における言葉とイメージに関する客観的かつ公平性のある資料の収集が問題となり、それらの方面に関して、さらなる検討が必要と考えられた。

5 参考文献リスト

1. 宮内貴久．屋敷地内に植える樹木の吉凶 口承・書承・知識 ．比較民俗研究．1999，no.16，p.26-46．
2. 倉田一郎 .言語と民俗学 .民俗民芸双書 35 国語と民俗学 .1968 ,p.25-37．
3. 藤原与一．命名と造語．日本民俗学大系 10．1959，p.229-248．
4. 古事類苑．再版 3 版．吉川弘文館，1969．
5. 諸橋轍次．大漢和辞典．縮刷版．大修館書店，1974．
6. 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編．日本国語大辞典．小学館，2002．
7. 新村出．広辞苑．岩波書店，1998，2988p．
8. 柳田國男．定本柳田國男集．新装版．筑摩書房，1968．
9. 国史大辞典編集委員会編．国史大辞典．吉川弘文館，1979．
10. 志村有弘，松本寧至編．日本奇談逸話伝説大辞典．勉誠社，1994．
11. 福田アジオ編．日本民俗大辞典．吉川弘文館，1999．
12. 小松和彦．日本怪異妖怪大事典．東京堂出版，2013．
13. 日本民具学会編．日本民具辞典．ぎょうせい，1997．
14. 岡田要監修．動物の事典．第 3 版．東京堂，1957．
15. 旺文社編．成語林 故事ことわざ慣用句．旺文社，1992．
16. 芦田正次郎．動物信仰事典．北辰堂，1999．
17. アダム・カバット .ももんがあ対見越入道 江戸の化物たち .講談社 ,2006．

6 参考資料一覧

(付属資料 「猫」に関するイメージ一覧)

No.	項目	原文	出典	備考
1	ネコ(念木)	②(念木・念棒より)山口縣の一部では、キリコまたはネコといふのが、鉤のある念木の特別品であつた。	②『董の方言など』	
2	ねこ(こたつ)	④炬燵といふ妙なものの起源は、今尚説明せられて居ないが…それが火鉢と結託して置炬燵となり、更に進んでは番所ごたつ、ねこといふ類の小發明も繼いで起つたことは、江戸期も終りの頃の文學に既に見えて居るが、弘く農村の間に採用せられてのは、無論明治の四十年間の事蹟であつた。さうして是が一家の生活ぶりに新たなる差別を立てたことは、或は食物などよりは更に著しいものがあつたのである。…さうして是があるが為に我々の寢臥法も變化したのである。	④『明治大正史 世相篇』	
3	猫	①大體に東日本では狐・狸・猿や猫までをヨモノといふ土地が互ひに封じし、…。狐狸から猫まではまだ夜のものといつてもよかつたか知れぬが、猿を夜の者といふことは何としても理に合はない。故に、私はヨモノはゆゆしきもの、直ちに本名を呼ぶことを忌み憚るべきものといふ義に解し ②それが堅炭の世となり、さらに所謂炭團の世となつて、安火だの猫だの番所だのと、便利至極なる置炬燵までが工夫せられ、③動物を笑つてはならぬと云ふ禁忌は、多くの南方の島々に、一段と濃厚な痕跡を遺している。…床の下へ針を落とした者、猫に命じて之を拾ひ来らしめ、猫が針を持つて還つたのを人々大に笑つたによつて、家と人は石に化し、村の地は水の下になつたと云ひ、…岩の上に猫と猿との闘ふを見て、之を笑つた處、忽ち舟覆つて石に化したと云ふ ④(利根川の岸の町にいたときに40代の女性から聞いた砂まき狸の話に興味を持っており、その時小さな獣を見つけ、猫かと思つたら、そうではなかったという話)或男月夜に利根川の包みの上を歩いて居ると、何か猫ほどの物が路を横ぎつて川端へ走り下り、寄洲の水際で転がつて居るやうに見えた。立ち留つて見て居た處、やがて又走せ還つて、行く手のこんもりとした木に登つた。猫だろうと思つて何気なくその下を通ると、木の上からばらばらと砂を降らせたといふ。⑤(一つ目小僧その他)またかうして一方の目を取つておくのが、昔の單純なる方式でもあつたらしい。耳或る獸の耳を切るといふことは、これに比べるとさらに簡便であり、また牲の生活を妨げることが少なかつた。最初は、我々が野馬に烙印し、もしくは猫の尻尾を切るがごとく、情人の家畜乃至は俘虜などにも、かうして個々の上を證明したかも知れぬが、…(利根川時代の南方生活) ⑥其時に前にいふ鍛冶屋の婆様といふ猫の踊ををどるを、武者修行の者退治せし咄をして居る所へ行合せ共に聞き居た時、猫を殺す人の名を忘れて、はて何とか申す修行者でござつたかと考へるとき… ⑦猫の踊に常連が一人遅いので、「鍛冶屋のお婆は どうしたらう」といふなども、踊と鍛冶屋とは餘りにも縁が無いから、或は又既にこの金物を取落した話に、かぶれて居たことを示すものかも知れない。	①『鼠の浄土』 ②『雪中隨筆』 ③『笑はれる馬』 ④『小豆洗ひ』 ⑤『鹿の耳』 ⑥『南方熊楠』 ⑦『国史と民俗学』 ⑧『明治大正史 世相篇』 ⑨『日本の昔話』 ⑩『猿廻しの話』	
4	猫の踊	⑧其時に前にいふ鍛冶屋の婆様といふ猫の踊ををどるを、武者修行の者退治せし咄をして居る所へ行合せ共に聞き居た時、猫を殺す人の名を忘れて、はて何とか申す修行者でござつたかと考へるとき… ⑨猫の踊に常連が一人遅いので、「鍛冶屋のお婆は どうしたらう」といふなども、踊と鍛冶屋とは餘りにも縁が無いから、或は又既にこの金物を取落した話に、かぶれて居たことを示すものかも知れない。	⑧『古屋の漏り』 ⑨『狼と鏡と火』	
5	猫のお椀	⑪猫のお椀でにやわん。(「似合はぬ」)	⑪『ことわざの話』	
6	猫の怪談	⑫そんな中でただ一つ謂はれたことらしいが、田代は猫の島だから犬を入れない。犬を連れて渡ると祟りがあるといふのが、私などには注意せずには居られぬ。最近の島の話では、猫は害あるもの、少なくとも島の不安の種であつて、たま／＼(たまたま)見たといへば恐ろしいと感ずる人ばかりが多い。寧ろ盛んに猛犬を放つて、警邏させたらよからうと思ふやうな状態に在るのである。そこに此様な俗信がまだ残つて居るとすれば、猫に封する考へ方の以前は又別であつたことを、推測せしめることは言ふに及ばず、もしも到底有り得ない事だと決するやうであつたら、どうして又色々の猫の怪談が、特に此の島にのみ信じられることになつたかの原因を、逆に尋ねて行く手掛りにならうも知れぬのである。	⑫『猫の島』	

7	猫ノカモコ	②殊にをかしいのは秋田縣の北部で、このツクシンボを 猫ノカモコ 、もしくは雁ノカモコとも謂つて居ることで、是もあの形をさういふ人間で無いもののカモに譬へたのである。	②『雀の袴』	
8	猫の皮	⑧今ある住吉落窪の物語を始として、日本に最も数の多い繼母話の原の種も、恐らくは之と無關係に生れ出たものでは無かつた。獨逸のグリム研究者たちが、日本の類話として採録して居るのは、御伽草子の鉢かつぎ姫たゞ一つであるが、是も姪皮とか墓の皮とかの形になつて、弘く民間に行はれて居る。獨逸では之をアルレイラウフ(千枚皮)、佛蘭西ではボーダヌ(驢馬の皮)、英國では又キャッツスキン(猫の皮)などと稱へて、共に灰かつぎ姫譚から派生した一系であることは、コックスも既に之を述べて居る。	⑧『桃太郎の誕生』	
9	猫の犠牲	②我々の中には又三毛猫の雄猫という問題がある。単に稀有なる故に珍重するという以外、いつの世から言い始めたことだろうか、海上風波の場合に之を龍神に捧げると難破の厄を免かるべしと称して、高金を払つても船頭が之を求めた。 猫を犠牲 に供した昔話の例は、他民族にも折々聞くことであるが、それがもし最初山奥から、此動物を連れて来た動機であつたら、化けるも不思議に非ず、背くも亦自然である。つまりは人間と猫との取引はもう結了して、今は只古來の行懸りだけが、若干の未解決を残存せしめて居るのである。	②『どら猫觀察記』	
10	猫の国	②いいぐあひに散布して全國に行はれて居るのは、旅人が道に迷つて 猫の國 に入り込み、怖ろしい目に遭つて還つて來たといふ奇譚であつた。	②『猫の島』	
11	猫の声を禁ず	①肥後國志「鼠蔵島、俚俗かくれ里と云ひ、鼠多し。近年可賀島に移るといふ。この島にては 猫の聲禁ず 。」	①『鼠の淨土』 ①『島々の話』	三味線の記述あり(猫の皮が使われているため)
12	猫のゴキ	⑩ちやうど犬猫の食器に椀皿を卸して與へるやうに、古び又汚れて一見別物の如く、且つ常人用のものと混同することを防いで居るだけである。犬猫の食器を犬ヅキと謂ひ、もしくは 猫のゴキ などと呼んで居る地方は稀で無い。さうしてツキもゴキも共に由緒ある我々の食器の古語であつて、今は椀だの猪口だのといふ新來の語に代られて居るだけである。	⑩『犬言葉』	
13	猫の座敷	②それから今一つは亭主の横座に向き合つた下の座で、こゝだけは板敷きで蔭も疊も有りません。大きな家ならば下男下女、出入りの者などがこゝへ來て坐り…さうしてお座をした女房をこゝに休ませる風習もあつて、こゝを子持ジロとも謂つて居ます。土地によつては嫁座敷といふ例もありますが…猫も氣樂でいゝので兒の居ない時は爰へ來て寝たと見えまして、九州の島々にはこゝを 猫の座敷 、又猫の間、或はもつとしやれて猫の横座などといふ人があります。	②『自序』	
14	猫のシッポ	⑩野邊地方言集には末弟をシバキレヲヂ、シバは尻尾のことだからたゞ末端といふことだつたかも知れぬが、東京などにも ネコノシッポ といふ語があり、末子は可愛がられ又相應によく庇護せられる世の中になつてからでも、なほ時々「有つても無くても猫の尻尾」などいひやかされて居たものであつた。斯ういふ酷評は外の者には出来ない。やはり先々の事を氣にする親たちが、最初そんなことを謂つたのがもとで、後には親しい者が戯れに真似たものと思ふ。 ⑩ ネコノシッポ 是は東京でも折々聞く語。有つても無くても猫の尻尾などといふが、是を末子の意に使うのは、やはり導かれる所があつたのである。 ② 猫の尻尾 といふことは興味ある一つのテーマであるが、之を論述するにはまだ私の資料は整はない。とにかくに日本だけでは、尻尾の完全なる猫は化けるといふ人がある。 ②尻尾の無い猫といふことは、是も日本の文化史に於て、相應に重要な一史蹟であるかと思ふ。…外國人の珍しがる話としては、日本の猫には尾が無いといふことだ。有つても無くてもよいといふ聲に、 猫の尻尾 の諺があると聴いて、舌を巻かなかつた白人は稀なのである。	⑩『末子のことなど』 ⑩『新語余論』 ②『猫の島』 ②『どら猫觀察記』	

15	猫の島	<p>②前年私がこの地方を通った時、田代といふ島は猫の島だといふ話を聞いたことがある。</p> <p>②そんな中でただ一つ、是は古くから謂はれたことらしいが、田代は猫の島だから犬をいれない。犬を連れて渡ると祟りがあるといふのが、私などには注意せずには居られぬ。</p> <p>②能登半島の遙かなる沖に、猫の島といふ島があることは、やはり今昔物語の中に二度まで記してあるが…</p> <p>②即ち猫の島の猫は會て政治家の問題にもなつて居たので、是には又六十年目に一度、地竹の賽のなる年毎に、今なほ島人を苦しめて居る鼠の大群の繁殖といふことが、隠れた他の一つの原因として考へられるのである。</p>	<p>②『松島の狐』</p> <p>②『猫の島』</p>	
16	猫の三味線	<p>②(ぺんぺん草)山口縣の厚狭郡では「猫の三味線」と呼び(防長史學四卷二號)</p>	<p>②『ぺんぺん草』</p>	
17	猫の正体	<p>⑧(鄰國石見の昔話『旅と傳説四卷七號』)むかし江戸飛脚が朝早く此峠の辻の宿屋を立ち、少し峠を降りかゝつた時に、後から七疋の大きな猫が追掛けて来る。驚いて傍の松の大木に登ると、七つの猫はつぎをして手を延ばして來た。刀を抜いて其手を斬り落すと、七疋は皆遁げてしまつた。飛脚は其手を風呂敷包に入れたまゝ江戸に行き、返りに又同じ峠の宿屋に泊つて、是非とも家のお婆さんに逢はせてくれと言つて、強ひて寢間に行つて逢つた(といふのは何か心當りがあつたのであらうが、其事は話の中には無い)。それからどうしても手を出さぬのを無理に出させて見ると、片手はなくて自分の包の中の手とびたりと合ふ。そこで即座に婆を斬殺すと猫の正體を顯はした。三年以前にこの茶屋の婆を喰ひ殺して、自分が婆に化けて居たのであつた。此事あつて以來その旅人の攀ち登つた松の木を、可部峠の七つぎ松と呼ぶやうになつた。安佐山縣二郡の境に在る峠である。親方も子分も全部猫であつた例が、斯うして奥州以外にも存して居るのであつた。</p>	<p>⑧『古屋の漏り』</p>	
18	猫の小兒語	<p>⑩犬をトートーと謂つて喚ぶことは、私たちには全く珍らしいが、あの地方の人には何だ當り前ぢやないかである。ところが遠く旅をして北の方へ往つて見ると、青森縣の八戸市附近では、トトは猫を喚ぶ言葉であり、従つて又猫の小兒語もトットである。信州の北安曇にも、猫をタータといふ兒語があるから、或は同じやうな喚び方をするのかも知れぬ。</p>	<p>⑩『犬言葉』</p>	
19	猫の人語	<p>②新著聞集の中にも幾つか猫の人語した話を載せて居る。鼠を追掛けて居て梁を踏みはずし、畳の上へ落ちたときに、南無三宝と謂つたというのは、古風なる猫言葉であつた。又和尚が風邪を引いて寝て居ると、夜更に次の間に來て声を掛ける者がある。すると蒲団の裾の方に居た猫が、そつと起き出して外に行き、今夜は方丈様が病氣だから、一緒に出かけることはむつかしいとささやいた。之を寝たふりして聴いて居た住持が、翌朝靜かに其猫に向つて、私には構わずに行きたい処へは行くがよいと言うと、ふいと出て往つた儘それきり歸つて來なかつた。</p>	<p>②『どら猫觀察記』</p>	
20	猫の巢	<p>②…獸にも樹にも巣くふものありと、我が言ひ出でしに、…いづこの猫か樹に巢くひたると、嘲り笑はぬものも無ければ、…これよりの後、我は「猫の巢」といふ諺名負ふせられし…</p>	<p>②『西樓記』</p>	
21	猫の数	<p>④それから家屋の建築の■り、即ち、天井が出来押入れが多くなつて、鼠が屋内でも繁殖するやうになり、蛇や鳶では退治しかねたこと、近頃になつては養蠶の普及、さてはベストが鼠の飲みからだといふことなども手傳つて、或は多過ぎるかと思ふまでに、家々の猫の数が激増したやうである。</p>	<p>④『明治大正史 世相篇』</p>	
22	猫の背	<p>④杓子と最も親しい人間の山の神が、一番しさうな事でしてはならぬのは、杓子を嘗めまたは口に當てることである。…或は以前は逆にこの法を以て眼に見えぬ物を呼んだ名残りかも知れぬ。陸中東山などで笹即ち平らい飯匙で猫の背を撫でて置くとその猫が家に住み着くといふ(郷土研究三の765頁)</p>	<p>④『おたま杓子』</p>	

23	猫の像	③中庭に聖母像あり、其下に 猫の像 あるなど。	③『瑞西日記 (大正十一年)』	
24	猫の知恵	⑧犬梯子と 猫の智慧 (章題)	⑧『2 犬梯子と 猫の智慧』	
25	猫ノチャ	②②(コガネグサ) 甲州の富士川流域では、此草を ネコノチャ と呼んで居る。どうしてさういふかは知らぬが、是なども作者は子供らしい。	②②『雀の袴』	
26	猫の忠義	⑧猫が荒寺の庭などに集まって踊を催し、どうして何々屋の三毛殿は遅いぞと謂つて居る所へ、やがて其三毛が来て斯ういふわけで遅くなつたと、家の内證事を語るの、始めて 猫の忠義 を知つたり、若しくは反對に怖ろしい害心のあることを、心づいたりする結末になつて居るものが多い。	⑧『猫と狐と 狼』	
27	猫ノチョンボ	②②(ツクシの方言) ネコノチョンボ 越後三川村など	②②『方言区域 の論』	
28	猫のつぎつぎ	⑧ねア」といふ類の、猫の踊の話からの借り物であることだけは少々明かになつた。即ち此家畜の夜出て踊るといふ話が餘り古くなつて、追々とその兇惡の相を變化あらしめたものが、末には寧ろ狼の話に似つかはしくもなつたので、甲斐の犬梯や越後のおいぬ繫ぎの元の形は、即ち藝州可部峠の 猫のつぎ／＼ (つぎつぎ)であつた。猫の爪の構造が樹に昇るに適するか否かの動物學上の問題では無かつたのである。	⑧『古屋の漏 り』	
29	猫の髑髏	③①又南方熊楠氏の手紙に、大阪で 猫の髑髏 を所持して相場に奇勝を得續けて居たもの、後に厭になつてもどうしても去らず、ふと一計を案じ猫は水を嫌う故に、川の中に潜り入つて見たら、漸く離れ去つたと云ふ話がある。	③①『おとら狐の 話』	
30	猫の鳴声	⑤今でも子供の話に鼠の浄土の歌を聞いていた男、 猫の鳴聲 を真似て難儀したことを言ふのは、考へて見るとやはり椀をごまかして怒られたといふ結末と、同調異曲の言ひ傳へようである。	⑤『隠れ里』	
31	猫の蚤	③①尚波合村でも、ユキヨシ様が、貧乏な老婆のあばら屋に御逗留あつて、猫の蚤を取つて御遣りなされた故に、今以て此一村の猫には蚤が居ないといふ。	③①『浪合記の 背景と空氣』	
32	猫ノハナガラ	②②(露草) 東北は仙臺以北、登米地方にかけて同じものを ネコノハナガラ と呼んで居る。ハナガラは或は飼牛の鼻に通ず「鼻づら」又は「鼻ぐり」といふものゝことで無いかと思ふが、此花の形がそれに似ているといふことはちよつと言へない。	②②『絵具花』	
33	猫の額	②① 猫の額 に生鰯	②①『ことわざの 話』	
34	猫の不思議	②②常陸の猫島は筑波山の西麓で、是は島でも何でも無い平野の村であるが、…やはり猫島の地名の由来を明らかにすることが出来ない。ただ爰でも狐女房の狐の話に附随して、會ては 猫の不思議 を説く者が、有つたのでは無いかと思ふばかりである。	②②『新野の盆 踊』	
35	猫ノベベ	②②(露草) それで津軽の方へ行くと、是を又 ネコノベベ とも謂ふのである。	②②『絵具花』	
36	猫の間	②① それから今一つは亭主の横座に向き合つた下の座で、こゝだけは板敷きで座も疊も有りません。大きな家ならば下男下女、出入りの者などがこゝへ来て坐り…さうしてお産をした女房をこゝに休ませる風習もあつて、こゝを子持ジロとも謂つて居ます。土地によつては嫁座敷といふ例もありますが…猫も氣樂でいゝので兒の居ない時は爰へ来て寝たと見えまして、九州の島々にはこゝを猫の座敷、又 猫の間 、或はもつとしやれて猫の横座などといふ人があります。	②①『自序』	
37	猫の枕	②②(うつぼぐさ) たとへば愛媛縣の上浮穴郡で ネコノマクラ	②②『猫の枕』	
38	猫の面	①(宮良の話より) 宮良の二神は新域の島から、此村の前濱に上陸なされたと云ふ昔語りもある。…石垣島の方では川平と漆海の二村に、■の八月または九月の己亥の日、よく似た儀式があつて之を「まやの神」と名付け、マヤとモヤマとの二神が出現する。マヤは方言に猫を意味するところから、普通は牡猫牝 猫の面 を被つてくると謂ふが、舞にも詞にも猫らしい信仰は現れて居らぬ。	①『海南小記』	

39	猫の横座	㊴ それから今一つは亭主の横座に向き合つた下の座で、こゝだけは板敷きで蔭も疊も有りません。大きな家ならば下男下女、出入りの者などがこゝへ来て坐り…さうしてお産をした女房をこゝに休ませる風習もあつて、こゝを子持ジロとも謂つて居ます。土地によつては嫁座敷といふ例もありますが…猫も氣樂でいゝので兒の居ない時は爰へ来て寝たと見えまして、九州の島々にはこゝを猫の座敷、又猫の間、或はもつとしやれて 猫の横座 などといふ人があります。	㊴『自序』	
40	猫の寄合ひ	㊵ 狼の群が夜行く旅人を劫かすといふことだけは、少なくとも近代に入つて幾度か實驗せられた現象であつたらう。従つて 猫の寄合ひ といふ俗信が稍々廢れて、狼が之に代つて説話の序幕を占めたのは自然である(しかも是と反對に、狼の群の話が東北に行つて、猫に改まつたといふことは想像しにくい)。唯奇妙なのは狼の群の指導者として、猫が招かれて遣つて來たといふことであるが、是も自分は猫ならばさういふ話も有らうと思ふのである。猫と狼とが交を結んだ話はまだ知らぬが、狐とは屢々一緒になつて遊んだといふ噂が残つて居る。	㊵『猫と狐と狼』	
41	猫の椀	㊶ (尾つば剪雀『津輕口碑集』より)…娘や娘や今迎へに來たどといふと、婆やよく來たと喜んで、金の膳金の箸金の椀で飯を食べさせ、後からついて來た爺には、 猫の椀 で飯を食はせた云々	㊶『舌切雀と腰折雀』	
42	猫いらず	㊷ 猫いらずの害は飛んでも無い方面だけに顯はれたが、尚今一つの背後に隠れた影響があつた。	㊷『鳶の別れ』	
43	ネコオクリ	㊸ ネコオクリ 陸中の梁川などで、猫に祟られたといつて病氣になつた場合には、イタコに教へられてよく猫送りといふことをした。幅一尺長さ二尺位の板に、猫といふ文字を白くかいて、四辻へ持つて往つて立てる、人は是に近づくことを畏れて、遠まはりをしたものだといふ(民俗研究四號)。津輕地方のイタコたちも、よく病氣の元を生き物の恨み崇りと説明するが、其場合には繪馬屋に頼んで、必ずその動物を書に描いて貰つて、自分の信心する神社佛閣に持つて行つて掛ける。神官僧侶は全く是に參與せず、寧ろ迷惑して居る場合が多いといふ(松野武雄君)。これは頗る東京あたりのとは性質のちがつた繪馬で、私は寧ろ送り物の人形、乃至は芋の葉に包んだ蜈蚣など、同じ系統のものかと想像して居る。	㊸『神送りと人形』	
44	猫恐大夫	㊹ (大蔵の大夫清廉の猫ざらひ) 又前の越前守の上を行くほどの横着者で、自身三ヶ國の大地主であり、富の力によつて官位を得、大和の目代にもなつて居たに拘らず、言を左右に託して官物の納入を怠らうとした。ところが此男のたつた一つの弱點は、猫が法外に嫌ひであつたことで、大和守輔公といふ人がそれを利用し、ぎうとどつちめて即座に全額を差出させた。前世は鼠にてやありけむといふ程の 猫恐大夫 であつたばかりに、とても一筋縄では行かぬやつが、簡単に參つてしまつた。それで今昔には斯ういふのも嗚呼の事と謂ふうちに算へて居るのである。	㊹『民間曆小考』	
45	猫学者	㊺ 「太陽」の記者の浜田徳太郎君は、自分の知る限りに於て第一流の 猫学者 である。	㊺『どら猫觀察記』	
46	猫神	㊻ 本來ある荒神の祭祀に任じ、託宣の有難味を深くせん爲に正體をあまりに秘密にして居た御蔭に、一時は世間から半神半人のやうな尊敬を受けて居たこともあつたが、民間佛教の逐次の普及によつて、追々と頼む人が乏しくなつて來ると、世の中と疎遠になることも外の神主などよりは一段早く、心細さの餘りにエフエソスの市民の如く自分等ばかりで一生懸命に我神を尊ぶから、愈々以て邪宗門の如く看做され、畏しかつた昔の靈驗談が次第に物凄じい衣を着て世に行はれることになつた。此が恐らくは今日のヲサキ持、タダ狐持、犬神猿神 猫神 、蛇持トウビヤウ持などゝ稱する家筋の忌嫌はるゝ處の由來であらうと思ふ。	㊻『池袋の石打と飛驒の牛蒡種』	

47	猫皮	②⑤…日本は島國だから特殊の傳承をもつてあらうと、寛はやや氣楽に推量してゐたのであつた。ところが結果は決してさうではなく、到底その傳播の経路が分りさうもない話に、幾つとなく全世界の一致があることを知つたのであつた。…日本の田舎にはまだ色々の型が傳はり、西洋の人たちが國々の代表的差別の如くに見てみたものが、我邦では殆ど皆備つて居るのみならず、更にまたこれと起りが一つだらうといふ「千枚切」もしくは「猫皮」の話や、グリムで有名な「手無し娘」の話などもちゃんとある。	②⑤『新たる国学』	
48	猫勧請	②②これも多分は古い時代に、餅を烏に投げ與へた際の唱へ言で、烏勧請は即ち烏を迎へて、饗應をするといふ意味であつたのを、後には口拍子に猫勧請を付添へたもの思はれる。	②②『烏勧請の事』	
49	猫ざらひ	⑦「猫恐大夫」と同じ	⑦『民間暦小考』	
50	猫車	②②香川縣の或る島で、デベソといふのは出臍のことらしく、又其近くでネコグルマといふのも興味がある。猫車は近世支那から輸入した一輪車のことで、どんな幅の狭い田の中の路でもあるくから便利なものだが、我々はそのきいきいと細く軋る音を形容して、こんな變つた名を付けて居たのである。	②②『ぺんぺん草』	
51	猫言葉	⑩たとへば山形秋田から青森へかけて、猫はチャコであり又はチャメ・チャペであるが、此音は稚ない者がよく利用し、父は固より母や姉をもチャアと謂ひつけて居る地方が多い。さういふ處では猫の名は別に有るのである。關東から福島縣にかけて、成人でも猫を喚ぶのにコウネコネコネコネと謂つて居るのを折々聴く、是をネコといふ名詞の起りとも斷定し難いだらうが、少なくとも東京を中にした東海の諸縣に於て、猫をコマといふ語は「來い」から來て居る。八丈の島では小兒が猫を喚ぶにカンカンと謂ひ、猫を一般にカンメと謂つて居る。熊野では小猫をコビ、關東でもコマの代りにコゾとも謂つて居る。是を小僧と解するのは後の心であらう。常陸の稻敷郡と石見の銀山地方では、猫をカイカイといふ兒語がある。對馬は全體に猫をカナ、さうして又カナヨカナヨと謂ふのが、來れを意味する猫言葉である。	⑩『犬言葉』	
52	猫島	⑧…家に飼はれる猫は犬だけの群居性を持たぬにも拘らず、野良猫には往々一處に集まつて居る場合のあることが、以前にも觀察せられたものと見えて、常陸の猫島や肥後の猫岳の如く、彼等の社會が別に隠れてあつたといふ話は、方々に傳はつて居る。 ⑫話は加賀國の海上、猫島の由來記である。其が現在の能登の舩倉島のことか否かは確で無い。	⑧『猫と狐と狼』 ⑫『神を助けた話』	
53	猫ぢや猫ぢや	②①(子買ほ問答) 子買ほの文句は國々で實によく發達してゐる。奥州の端では子賣ろといふさうだから、元は「どの兒がほしい」といふのが一般であつたと思はれるのだが、近頃は遊びの名前までが變つて來てゐる。たとへば熊本附近では猫もらひ、越後の岩船郡でも猫ぢや猫ぢやといふのがこの遊びで、 猫ぢや猫ぢや どの猫ほしや 後の何々猫ほしいわ といふ類の問答をする。	②①『小序』	
54	ネコツキ	⑩古い名詞ではありますが、このゴキはやはり過去の新語でありました。字には合器と書くのが多く、又は合子とも謂つて、木地引細工を意味した漢語であります。多分は禪宗の僧などの輸入かと思はれ、是を御器の音だといふ説は、其起りが不明になつてからのこじつけであります。是に反して、ゴキとやゝ似た言葉ですが、ジョウキ或はジョキといふのは、固有の日本語の磨り潰れたもので、常陸その他の關東の田舎にも残つて居ります。是を常器だといふのもやはり無理な宛て字で、本來は酒杯・高杯などのツキと同じ語でありました。壹岐島などでは食器をツキ又はクイーツキ、猫の食器をネコツキと謂つて居ります。他の多くの地方では、ゴキもツキも古臭くなつて、専ら犬猫だけの食器の名となつて居ります。他には使はぬ故に、犬ゴキ猫ツキの語の頭を省略したのでせう。	⑩『家具の名二つ三つ』	
55	ネコソバエ	②②(ハゴジヤ) 越後の西頸城郡ではネコソバエ	②②『ハゴジヤ』	

56	猫檀家	⑥貧乏寺の老和尚を救ふ為に、猫が火車に化けて長者の葬式を脅かすといふなども、和尚はワキだから動物譚と謂つてもよいのである。 ⑥或は 猫檀家 の話に狐が参興したり、	⑥『昔話と伝説と神話』 ⑥『「二戸の昔話」を読む』	
57	猫と狐	⑧猫と狼とが交を結んだ話はまだ知らぬが、狐とは屢々一緒になつて遊んだといふ噂が残つて居る。西田直義翁は九州の學者だが、其隨筆の笹舎漫筆に、或人月夜に 猫と狐 とが、並んで踊つて居るのを正しく見たといふ話を載せて居る。	⑧『猫と狐と狼』	
58	猫と鼠	⑥(日本の民話説話と世界のものとの共通点を挙げている中で、例のひとつとして登場) ⑧(グリム兄弟の採集した話の中に日本でそっくりな形か似た形をもった話の一例として挙げられている)	⑥『放送二題』 ⑧『昔話のこと』	
59	猫鳥	⑥下五島の福江で人のよくいふのは、ヨシトツカッポウと鳴く鳥は昔は人であつて、二人の子を一ぺんに失つて悲みの余り鳥になつた。…日ノ島にも同じ話があつて鳥の名をヨウシトキ、何といふとりの事が知らぬといふ土地と、 猫鳥 の事だといふ土地とがある。	⑥『片足脚絆』	
60	猫問屋	②⑥…夜大宮の町に入れば、市の往来は多けれども、 猫問屋 の何兵衛が宿はだ、誰も知らざりき、…	②⑥『西楼記』	
61	ネコマナグ	⑩ ネコマナグ 鹿角方言集に、他人が見て居る時は眼をそらし、見て居らぬときのみ鋭くこちらを視るやうな人だとある。是などはよく當つて居る。しかし格別當つて居ないでも、團栗眼とか獅子つ鼻といふやうに、意外なたとへなら人は笑ひ、笑へば造語の目的は達したのである。	⑩『新語余論』	
62	猫もらい	⑭乞食をモラヒといふ語は江戸初期の文學にも見え、京都でも以前は普通であつた。今日の方言としては喜界島といふやうな遠い端々の田舎に限られ、中央では夙くオモロヒだの、モノモロヒだのといふ特殊の形に分化して、乞食をさういふ名で呼ぶことにして居たが、それも今は亦死語になりかゝつて居る。ところが珍しいことには東北地方に行くと、モラヒは今日でも明瞭に親戚故舊を意味して居る。佐々木君の昔話集などを見れば、動物は互ひに 猫モラヒ だの蛙モラヒだのと喚びかはして居る。 ⑮それから地藏遊び、中の／＼小坊主、かごめ／＼と謂つて後の正面に、屈んだ子供の名をあてさせる遊びなども、殆ど同一形式で或土地では青年男女の慰みに、又或地では眞剣の占ひの方法に之を行つて居た。起りは今日の問立て・取出しも同様で、一人に神靈を依らしめて、不審を是に訊かうとした信仰行事より他にはない。子買を・ 猫もらひ ・狐遊びなどの問答も、以前成人がこんなことをして居たといふ例はまだ見つからぬが、全く小兒の爲に考案せられたものとしては、少しばかり趣向が複雑すぎる。 ⑯子買ほの文句は國々で實によく發達してゐる。奥州の端では子賣ろといふさうだから、元は「どの兒がほしい」といふのが一般であつたと思はれるのだが、近頃は遊びの名前までが變つて來てゐる。たとへば熊本附近では 猫もらひ 、越後の岩船郡でも猫ぢや猫ぢやといふのがこの遊びで、 猫ぢや猫ぢや どの猫ほしや 後の何々猫ほしいわ といふ類の問答をする。	⑭『酒もり塩もり』 ⑮『昔の国語教育』 ⑯『小序』	
63	「猫」	②③その時分の話ですが、兄はよく越智東風(をちこち)といふ變名で歌を發表してをりました。越智東風といへば夏目さんの「猫」に出て來る人物の名で、夏目さんはかすかな記憶でその名を「猫」に使つたのですが、その本人が井上とは死ぬまで知らず、井上もまた自分の名が「猫」に使はれてゐるとは恐らく未だに知らないでゐるでせう。越智といふのは兄の本名で、その越智に東風とつけたのは正しくいい名前で、これについて今一つ面白い話があります。	②③『自選歌集』	夏目さんの「猫」とは、夏目漱石の「吾輩は猫である」のこと。この話の中に、越智東風という人物が登場する。
64	ネコグサ	②②(白頭翁)福岡縣などではネコバナ・ ネコグサ	②②『山の筆』	
65	ネココ	①昔利根川にはネココと云ふ河伯(河童?)が住んで居た。	①『楊枝を以て泉をトする事』	
66	猫じゃらし	②②(ハゴジヤ)東京では「 猫じゃらし 」と謂つて居るゑのころ草	②②『ハゴジヤ』	

67	ネコダ	⑮(私生児を意味する方言) ネコダ 飛驒の一部 ネコダは物を背負ふ場合に着る蓑製のせなかあての名で、それと何かの関係があるらしい。	⑮『私生児を意味する方言』	
68	猫岳〔猫嶽〕	⑧…家に飼はれる猫は犬だけの群居性を持たぬにも拘らず、野良猫には往々一處に集まつて居る場合があることが、以前にも観察せられたものと見えて、常陸の猫島や肥後の猫岳の如く、彼等の社會が別に隠れてあつたといふ話は、方々に傳はつて居る。 ⑫九州では阿蘇郡の猫嶽を始めとし…	⑧『猫と狐と狼』	
69	ネコノメ	⑩ 子供は多くの草木の命名者であつたと思ふ。例へば人家の周圍などに多くあるリウノヒゲ、またはタツノヒゲといふ草の實を、越後ではネコノメ、あるひはメメンコと言つて居る。メメンコとは母などがにらむことである。	⑩『方言と昔』	
70	ネコバナ	⑫(白頭翁)福岡縣などではネコバナ・ネコグサ	⑫『山の筆』	
71	ネコヤナギ	⑩秋田縣の横手町近傍では、かはやなぎの木の白い芽出し、普通に我々がネコヤナギだのチンコロだのといふものを、方言にメメンコと呼んで居る。このメメンコも前の龍のひげのメメンコと同様に、にらむことを意味するのでは無いかと思ふ。	⑩『方言と昔』	
72	ネコヤロ	⑩ネコヤロは紀州の日高郡などで、けら螻蛄のことである。此蟲は子供の遊び相手である故に、テデフグリだのトクエアツベだのと、あらはに解説し得ない異名が甚だ多い。猫遣らうも其一つで、此蟲の頸部をつまむと、ちよつと小猫を持つて引上げた時の様な形をする所から此名がある。可なり意外な又氣の利いた語だから残るかと思ふ。	⑩『新語余論』	
73	ネコンピン	⑫(ぺんぺん草)熊本縣の玉名郡では此草をネコンピンと謂つて居る。	⑫『ぺんぺん草』	

(付属資料 「猫」に関する言葉一覧)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	古事類苑	備考
1	猫	(鳴き声に接尾語「こ」の添った語) ①食肉目ねこ科の家畜。エジプト時代から人に飼われ、偶像化され、神聖視された。現在では愛玩用、鼠駆除などとして広く飼養されるが、イタと異なり、多くの野性的性質を今なお保有しているので、悪いことたとえにされ易い。革は三味線の綱張りにも用いられる。ペルシャ猫・アンゴラ猫など品種が多く、また毛色により、三毛猫・島猫・虎猫・雉猫などに区別される。和名ネコ。古称ねこま。 ②(寝子の皮で張るからいう) 三味線の異称。 ③(三味線をつかうからいう) 芸妓の異称。 ④本性を包み柔和らしく見せかけること。知って知らぬふりすること。また、その人。 ⑤猫火鉢⑥猫背の猫草。		「寝子」から私語の異称	* 日本釋名 中獸「猫 ねはねずみ也、こはこのも也。なずみをこのむすもの也。一説、猫はよくねるをこのも意か、順和名抄にねこまと訓ず、まともと通ず、このものも字也、のを略せり」	
2	猫足	(1)猫のように音を立てないで歩くこと。また、その歩き方。ぬきあし。 (2)馬術で、■足(たくあし)のこと。馬が駆ける様子が猫の走るのに似ているのでいう。 (3)膳や机の脚で、上部がふくらみ、中ほどがやや細くなり、下部が丸くなっていて、猫の足に似ているもの。 (4)「ねこあしぜん(猫足膳)」の略。 (5)植物「げんしょうこ(現証桃)」の異名。 【方言】 (1)膳(ぜん)の足で、上部が膨らみ、中ほどがやや細くなり、下部が丸くなって猫の足に似ているもの。 (2)竹馬。 (3)植物、げんしょうこ(現証桃)。 (4)植物、しきみ(柶)。 (5)植物、かざはみ(酢漿草)。	(1)①浪花聞書[1819頃]「猫あし ぬきあし也」 ②坊っちゃん[1906]〈夏目漱石〉七「例の如く猫足にあるいて来て」 (2)同本記[1544]「馬にねこあしといふ事はあるべし。馬のねこのしるやうにしましるを申也。いつれもはやねこあしといふ候へば、馬のしる候と心得べし」 (3)①俳諧・犬子集[1633]五・茸「猫足の膳にてくふや鼠茸(重頼)」 ②雑俳・柳多留一〇一[1828]「猫足も白ぶちになるはげ膳」 ③腕くらべ[1916～17]〈永井荷風〉一四「猫足の膳を中にして一杯呑んでゐるのを見た」 (4)雑俳・柳多留・六九[1817]「猫足で夫婦夜食をじゃれて食ひ」 (5)重訂本草綱目啓蒙[1847]一三・毒草「牛扁(略)げんしょうこは(略)ねこあし 仙台」	(第6版)①漱石、坊っちゃん「例の如くねこあしにあるいて来て」		
3	猫足昆布	褐藻類コンブ科の海藻。南千島から北海道の利尻島にかけて、沿岸の低潮線下五～六メートルの岩上に着生する。茎はやや三角形で両端および表面から根をおろす。葉は黒褐色の線形で長さ二～四メートル、幅三～五センチメートル、厚い革質基部付近両縁に二個の耳形の突起がで、翌年ここから新葉を出す。トロロコンブなどに用いる。みみこんぶ。しこたんこんぶ。かなかりこんぶ。はたかぜこんぶ。学名は <i>Arthrothamnus bifidus</i>				
4	猫足膳	脚の部分が猫足の膳。ねこあし。なかあしぜん。	* 随筆・守貞漫稿[1837～53]二八「中足膳京坂谷或は猫足膳と云、ねこのあしに形似たる故也。略に或は用之専ら黒漆也」			
5	猫足机	脚の部分が猫足である机。	* 高野山文書・年月日未詳・金堂諸道具注文(大日本古文書五・七二六)「一ねこあしつくゑ 同小つくゑ」			
6	猫網	地引網の一種。その構造は普通の地引網に等しく、■網(ふくらあみ)の長さ二五尋(ひろ=約四五メートル)、■口の直径五尋(約九メートル)以下、その前方の袖網の長さ二五尋、これに長さ二〇〇尋(約三六〇メートル)の引網をつけたもの。				
7	猫行火	「ねこひばち(猫火鉢)」に同じ。	* 日本橋[1914]〈泉鏡花〉三九「猫行火(ネコアンクッ)に鳴着(かじりつ)いて居て、豆煎を頻張ったが」			
8	猫石	(1)板べいなどの土台の下端で柱の真下にすえつける石。 (2)猫の姿に似た石。また、猫の怪(け)がこもった石。	(1)* 雑俳・紀玉川[1819～25]「桑の葉敷てお猫石寝る」 (2)* 歌舞伎・独道中五十三駄[1827]四幕「猫の怪は大きな猫石となる 宇都の谷の猫石と聞いてはあれど、この珍事」			
9	猫板	長火鉢の端の引き出しの部分にのせる板。ここによく猫がうずくまるのでいう。 【方言】 (1)長火鉢の端の引き出しの部分に載せる板。 (2)大便所の金隠しの板。	①洒落本・青楼真跡[1800]「ねこ板のほいろにて茶をほふじているしんぞうもありながら」 ②或る女[1919]〈有島武郎〉後・二三「猫板の上に肘を持たせて居住ひを崩して凭れかかった」			
10	猫不要(ねこいらず)	黄燐、または亜砒酸を主成分とした殺鼠剤の商標名。	①滑稽本・続膝栗毛[1810～22]一―上「あんのころ(犬の子)をいれて鼠をとらせ、盗人の用心と猫入らずにた役させる」 ②桐畑[1920]〈里見■〉病犬・四「猫(ネコ)いらずでも、少し余計に食はせたら、大抵まあっちまひますよ」			

11	猫扇	「ねこま(猫間)の扇」に同じ。	* 随筆・柳亭筆記〔1842頃か〕三「猫間骨の扇 猫間扇、猫骨又猫扇ともいふ。」			
12	猫面	「ねこつら(猫面) (1)」に同じ。	* 新撰字鏡〔898～901頃〕「 ■ 福古於毛 ■ 」			
13	猫下(ねこおろし)	猫が物を食い残すこと。また、食べ物分け与えること。おすそわけすること。また、その物。	①平家〔13C前〕八・猫間「猫殿は小食におはしけるや、聞ゆる猫おろし給ひたり、かい給へ」 ②雑談集〔1305〕九・異衆の仏法を崇事「昔は嘗まめ男せず猫(ネコ)をろしする事なるに、近代は嘗まをとこし猫をろしせず」 ③和訓栞〔1777～1862〕「ねこおろし 平家物語にみゆ猫の者を喰残すを云なり」	〔第2版〕平家八「きこゆる猫下し給ひたり」		
14	猫飼	(「ねこがい」も) 農具の一種。太い縄を縦にして、これに藁を厚く組んで作り、穀物の種子などを盛り入れるのに使用する。ねこかえ。	①和漢三才図会〔1712〕三五「 ■ (ネコガヒ) 福古加比 三才図会云、 ■ 去し草器、今之盛二殺種一器也。論語曰、以し杖荷レ ■ 者是也、按 ■ 与し簣同レ訓、蓋簣以し竹作、 ■ 以し藁作名二猫飼(ネコカヒ)一者類乎」 ②広益国産考〔1859〕一「 ■ ネコガヒ」	〔第2版〕著聞一「御鞠ありけり…ねこがきを敷かれたり」		
15	猫貝	(1)貝「きさこ(喜佐古)」の異名。 (2)タマガイ科の巻き貝。房総半島以南の水深二〇メートルまでの細砂底にすむ。殻は丸く、全面白色で、表面に多数の細い溝がある。学名はEunaticina papilla 【方言】 貝。 (1)きさこ(喜佐古)。 (2)たからがい(宝貝)。 (3)こやすがい(子安貝)。	* 評判記・色道大鏡〔1678〕七「弾貝 伊勢貝とも、ぜががいとも、猫貝(ネコカイ)ともいふ」			
16	猫掻(ねこがい)	【ねこ】				
17	猫飼(ねこかえ)	「ねこかい(猫飼)」に同じ。	* 耕稼春秋〔1707〕七・下「ねこかへ 太き縄を十四筋立て打、藁にて厚く組也、藁は大束二束入物也、立に太縄を十四筋入て組む、成る程厚く堅く、大たば藁二束程入田を植る時さをとめのきる物なり」			
18	猫返	体を空中で一回転させること。宙返り。	* 落語・お祭佐七〔1890〕(禽語楼小さん)「柔術(やはら)の心得有る佐七郎ゆゑ、猫返りを打って下へ下りましたが」			
19	猫顔	【方言】(1)朝起きて顔を洗わないままで仕事などに出かけること。 (2)夕暮れの薄暗いさま。				
20	猫掻(ねこがき)	(1)藁で編んだむしろ。ねこだ。蹴鞠(けまり)などの時、庭に敷くのものも用いた。 (2)唐物(からもの)の青磁茶碗や朝鮮の金海茶碗などのなかで、見込や外側に猫の爪跡のような櫛目文様のあるもの。 【方言】 (1)わら製の敷物。大形のむしろ。 (2)櫛(ひのき)の皮やわらで編んだ、一種の蓑(はいのう)。 (3)床下の塵埃(じんあい)。	(1) ①明月記・寛喜二年〔1230〕六月二一日「密々有二御鞠一、敷二猫掻一」 ②古今著聞集〔1254〕一四一五「ねこがきを敷かれたり」 ③随筆・安斎随筆〔1783頃〕一九「ねこかき ねこかきは今世田舎にてねこたと云ふむしろなり、わらにて綾衫に組みたるものなり」			
21	猫肩歩(ねこかたある)	両肩をすばめ、前方にややかがむような姿勢で歩くこと。猫背の姿勢で歩くこと。	* 仏国風俗問答〔1901〕(池辺義象)男女の身の丈及び其の歩きかた「我が旧習の猫肩歩きの如きは、洋服には似合はしからざるにも」			
22	猫被(ねこかぶり)	本性を包み隠して、表面おとなしうに見せること。あるいは知らないふりをする事と、また、その人。ねこつかぶり。	* 秘事法門〔1964〕(杉浦明平)九「善人なんちゅうのは、猫かぶりのこんこんきよ」			
23	猫神	悪物(つきもの)の現象の一つ。中国・四国・九州地方で多くいわれる。	* 諸国風俗問状答〔19C前〕(備後国深津郡本庄村風俗問状答・一三)「狐疊あり、狐つかい等なり。猫神・猿神・犬神の類なり」			
24	猫轆	うみねこのこと。(＝ねこどり)				
25	猫可愛(ねこっかわい)	猫をかわいがるように甘やかしてかわいがること。むやみやたらにかわいがること。ねこっかわいがり。	①落語・性和善〔1891〕(三代目春風亭柳枝)「夫(それ)だからお前は不可い。甘くつて、猫可愛いがりと云ふんだ。夫(それ)では当人の為めにならねエ、起こて来な」 ②あらくれ〔1915〕(徳田秋声)四二「幼い時から甘やかして育てて来た子息の房吉を、猫可愛(ネコカハユ)がりに愛した」			
26	猫潜(ねこぐり)	猫の出入のため、障子の隅の一こまの紙を貼り残すこと。また、そのもの。山口県の大島などいう。				
27	猫草	植物「おきなぐさ(翁草)」の異名。 【方言】植物。 (1)おきなぐさ(翁草)。 (2)えのころぐさ(狗児草)。 (3)にわやなぎ(庭柳)。 (4)げんのしょうこ(現証拠)。	* 物類称呼〔1775〕三「白頭翁(略)筑前にて、ねこぐさ、ぜがいさう」			
28	猫車	箱の前面に車輪一個をつけ、後部に手押し用の柄をつけた車。土砂などを運ぶために用いる工事用の一輪車。ねこ。 【方言】植物、ひがなばな(彼岸花)。	①風俗画報・一〇六号〔1896〕人事門「今昔より有りきたる車の種類(略)半律車、青蓋(せいかい)車、轆(てぐるま)、猫(ネコ)車、乳母車」 ②鐘供養の日〔1943〕(井伏鱒二)「石材を運ぶ大型の猫車を曳いて来て」			
29	猫不食(ねこくわず)	【方言】魚。 (1)ひいらぎ(■)。 (2)おきひいらぎ(沖■)。 (3)とらぎす(虎鰐)。 (4)だるまがれい(達磨鰐)。 (5)ぼうずはぜ(坊主鯊)。				
30	猫毛	【方言】 (1)産毛。 (2)植物、まつばい(松葉蘭)。 (3)植物、もうせんごけ(毛氈苔)。				

31	猫傾城(ねこけいせい)	(「ねこけいせい」とも。猫は陰険であるな どとされるところから) 傾城をののしつという語。	①浮世草子・御前義経記[1700]七・三「小 ざつまに言ひ分海山ありといへども、意面 ひつぱる猫傾城(ネコゲイセイ)いふだけ■ の種ぞかし」 ②浄瑠璃・山城国畜生塚[1763]道行「とち 狂うた猫傾城(ねこケイセイ)」			
32	猫子	猫の子。子猫。 【方言】(1)猫の子。子猫。 (2)猫。 (3)親の後を付いて回る子供。	①俳諧・広原海[1703]一八「腰(ないら)病 む僕は猫子の生き霊■<洞狐>」 ②歌舞伎・怪談月笠森(笠森お仙)[1865] 三幕「名は囃家の茂兵衛だが、ちつとは人に 知られた男、猫子(ネココ)かなんぞを見るや うに、何で女房がやられるものか」			
33	猫根性	うわべは柔和そうに見えながら、内心は 執念深く貪欲(どんよく)であること。また、 その者。ねこっしょう。	①浄瑠璃・仏御前扇車[1722]二「エエしぶ とき猫根性(ネココンジャウ)」 ②和訓栞[1777~1862]「謠に猫根性とい ふは、人の心の貪欲を匿し、外に露はさぬ者 をいふ。」			
34	猫座	【方言】いりり座の座席の名で最下位の席。				
35	猫鷺	ごいさぎ(五位鷺)。(＝ねこどり)				
36	猫鮫	ネコザメ目ネコザメ科の海産のサメ。全長 約一・二メートルに達する。頭部はネコを 思わせるのでこの名がある。体色は淡褐 色の地にやや不規則な黒い横帯がある。 背びれは二基で、それぞれの前縁に一個 の棘(きょく)をもつ。歯がきわめて強くサ ザエの殻をかみ砕いて中身を食べるので 「さざえわり」ともいう。晩春、角質の卵殻 に包まれた卵を産む。本州中部以南、東 シナ海の沿岸に分布する。かまぼこなどの 練製品の材料にされる。ねこぶか。学名 はHeterodontus japonicus 【方言】魚、はたさめ(鱈鮫)。	* 重訂本草綱目啓蒙[1847]四〇・魚「鮫 魚<略>虎頭鯢[海塩県図経]は ねこさめ 江 戸、一名さざえわり」			
37	猫辞儀	【方言】必要以上に遠慮すること。(＝猫斟 酌ねこじんしやく)				
38	猫舌	(猫が熱い食物を嫌うところから) 熱いものを飲食することのできない舌。ま た、その人。	①俳諧・山の井[1648]年中日々之発句・ 九月「ねこじたくもふあつ物やねずみたけ」 ②雑俳・辻談義[1703]「まぜにけり・居風 呂に迄猫舌じゃ」 ③人情本・春色玉襪[1856~57頃]初・四 回「全体お前は猫舌(ネコシタ)だから」 ④自由学校[1950]<獅子文六>その道に 入る「五百助は猫舌(ネコジタ)だから」			
39	猫舌の長風呂入り	ぬる湯が好きなのは入浴の時間が長い。	* 譬喩尽[1786]三「猫舌(ネコジタ)の長 風呂入(ナガブロイ)り」			
40	猫辞遣	内心では欲しいのに、表面では遠慮すること。				
41	猫四手	植物「うらじろかんば(裏白樺)」の和名。 【方言】 植物、いぬしで(犬四手)。	* 日本植物名彙[1884]<松村任三>「ネコシデ」			
42	猫猫(ねこじゃねこじゃ)	俗謡。また、その語り。享和・文化(一八〇 一〜一八)頃から流行。「猫じゃ猫じゃとお しやますが、猫が、猫が下駄はいて杖つい て、しほりの浴衣で来るものか」がその歌 詞。	①洒落本・三千之紙屑[1801]三「猫(ネ コ)じや猫じやの地廻り節は鼠とらずの新造を 怒らしむ」 ②吾輩は猫である[1905~06]<夏目漱 石>二「西洋の猫ちゃ猫ちゃを躍って居る」			
43	猫じゃらし	(1)帯の結び方の一種。帯の掛けと垂れと を不均等の長さに結んで垂らしたもの。そ れが揺れて猫をじゃらすように見えるとこ ろからいう。 (2)植物「えのころぐさ(狗児草)」の異名。 【方言】 (1)着物を着て帯の垂れているもの。 (2)植物、えのころぐさ(狗児草)。 (3)植物、ねこやなぎ(猫柳)。 (4)柳の花。	(1) ①雑俳・柳多留・二[1767]「恋やみへ母の 細工は猫じゃらし」 ②洒落本・辰巳婦言[1798]昼遊の部「花 色の唐こはくの帯をちゃんと猫じゃらしに結 び」 ③虞美人草[1907]<夏目漱石>一ニ「猫 (ネコ)ぢやらしに、右の袂の下で結んであ る」 ④夢の中での日常[1948]<島尾敏雄>「だ らしなく猫じゃらしに結んだ伊達巻の小粋に ななめになった腰のあたりが」 (2) * 火の鳥[1939]<中村草田男>「猫じゃらし 触れてけものごと熱し」 * 洒落本・起原情語[1781]「猫ぢやらし帯 は女三のみやより言出す」	(1)辰巳婦言「花色 の唐こはくの帯を、 ちゃんとねこじゃらし に結び」		
44	猫じゃらし帯	ねこじゃらし(1)に結んだ帯。				
45	猫背負(ねこしよい)	【ねこ(猫)】				
46	猫斟酌	【方言】必要以上に遠慮すること。				
47	猫好	(1)猫が好きで大変にかわいがること。ま た、その人。 (2)芸妓をあげて遊興することを好むこと。 また、その人。	(1) * 咄本・さとすゝめ[1777]猫「ねこずきなむ すこ、おやちのるすの内、きれいな白猫をも らつておけば」 (2) * 雑俳・柳多留・一三[1778]「猫好も男の 方は金がいり」			
48	猫頭巾	火消しなどが火事場でかぶる頭巾。	①俳諧・竹馬狂吟集[1499]一〇「ざせん の人のねずみをぞをふ、僧だうにかづつれた る猫つきん」 ②随筆・守貞漫稿[1837~53]三「刺子の 半天に猫頭巾、各手に鳶口を肩つき持ち」 ③夜明け前[1932~35]<島崎藤村>第一 部・下・九・二「鶯の者の群が刺子の半天に 猫頭巾(ネコツキン)で、手に手に鳶口を携 へながら」			
49	猫羊歯(ねこすだ)	【方言】植物、こしだ(小羊歯)。				
50	猫砂	室内で飼う猫の、排泄用の砂。				

51	猫背	背中が丸く曲がって、前方にややかがむような姿勢になっていること。また、その人。猫背中。猫。 【方言】 くる病のため背中に異常のあること。また、その人。	①かた言〔1650〕五「きせるさしよせつつすれば、此番にむせびて例の猫(ネコ)ぜをたて、身ぶるひつつ」 ②俳諧・太祇句選〔1772～77〕冬「埋火に猫背あらはれ玉ひけり」 ③めぐりあひ〔1888～89〕〈二葉亭四迷訳〉「身材の高い、猫背で、白頭の、活気は有りながら沈着いた相好の男が」 ④芋粥〔1916〕〈芥川龍之介〕「唯でさへ猫背(ネコセ)なのを、一層寒空の下に背ぐくまって」			
52	猫背中	(「ねこせなか」とも) 「ねこぜ(猫背)」に同じ。 【方言】 (1)猫背。 (2)くる病のため背中に異常のあること。また、その人。 (3)虫、おかまこおろぎ(御竜蟋蟀)。	①御伽草子・猫の草紙〔江戸初〕「ねこせなかにをしつくばい」 ②俳諧・玉海集〔1656〕二・夏「及こしに牡丹をおるや猫せなか(吉勝)」 ③京童〔1658〕一・四条河原「みぎりの鼠戸をみれば、猫(ネコ)せなかなるおのこあり」 ④咄本・かす市頓作〔1708〕五「わたくしはい、猫せなかでござるといはれた」 ⑤滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕二・上「猫背中(ネコゼナカ)ときてゐるから、鼠の糞のやうな垢がよれるよ」	{第2版}浮世風呂二「おばさんはの、猫背中ときてゐるから」		
53	猫玉	【ねこ(猫)】				
54	猫だまし	相撲で、立ち合いなどに相手の眼前で、両手を打ち、ひるませて自分優位の型に入る戦法。めくらまし。				
55	猫茶屋	江戸の本所回向院前(墨田区両国二丁目)で、金猫・銀猫と称する私娼を抱えていた茶屋。天明(一七八一～八九)頃繁昌したが、寛政の改革で取り払われた。	①洒落本・一事千金〔1778〕序「夏さへふれるあわ雪や、猫茶屋(ネコチャヤ)の鼻頭(はなさき)と、女郎の心の冷酒をかんしなの善光寺」 ②随筆・飛鳥川〔1810〕「回向院前通りは、藤堂の辻の角まで一円猫茶屋あり、土手側と云」			
56	猫塚	飼主に恩返しをした猫を葬ったとか、化け猫を斬り殺して埋めたなどの伝承をもつ塚。また、その伝説。	* 俳諧・浅黄空〔1822頃〕「猫塚正月さするごめ哉」			
57	猫被(ねこっかぶり)	「ねこかぶり(猫被)」の変化した語。	①坊っちゃん〔1906〕〈夏目漱石〕九「ハイカラ野郎の、ベテン師の、イカサマ師の、猫被(ねこっかぶ)りの、香具師の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴」 ②引越やつれ〔1947〕〈井伏鱒二〕高田館「あいつ、なんて猫っかぶり野郎だ」			
58	猫可愛(ねこっかわい)	「ねこかわいがり(猫可愛)」の変化した語。	①多情仏心〔1922～23〕〈里見■〕茶断塩断・セ「猫っ可愛がりに、膝の上に載せて撫で廻したりするには」 ②オリンボスの果実〔1940〕〈田中英光〕二「まっ子であった頃は、家族中で、いつでも、猫っ可愛がりに愛されてゐて」 ③誰かが触った〔1972〕〈宮原昭夫〕一「口うるさく干渉するか、さもないけりや、猫っ可愛がりに可愛がっちゃうか、どっちかだからねえ」			
59	猫毛(ねこっけ)	頭髮で、猫の毛のように柔らかく、ねやすいもの。	* 多情仏心〔1922～23〕〈里見■〕ひとり旅・一〇「中からの禿で、四圍(まはり)にほやほやと残った猫っ毛が」			
60	猫性(ねこっしょう)	「ねここんじょう(猫根性)」に同じ。	* 雑俳・軽口頓作〔1709〕「きみがわるい、あんまりなつく猫性(ネコツシャク)」			
61	猫綱	猫をつないだ綱。転じて、強情で他人の言うことに従わないことにいう。	①俳諧・犬子集〔1633〕三・牡丹「猫つなも牡丹の陰は道理哉(重頼)」 ②評判記・難波の■は伊勢の白粉〔1683頃〕二「人をいもむしに羽のはえたやうにもおぼしめさぬか猫(ネコ)づながにくひまでうきしづみは進退の脉」	{第3版}難波の■は伊勢の白粉「ねこずながにくひまでうきしづみは進退の脉」		
62	猫爪	一猫爪(ねこのつめ)				
63	猫面	(1)猫に似て短い顔。また、その人。ねこおもて。 (2)魚「しいら(■)」の異名。 【方言】 (1)魚、しいら(■)。 (2)植物、ぼたんづる(牡丹蔓)。	(2) ①大和本草〔1709〕一三「しいら(略)又名くまびき、筑紫にて猫づらと云」 ②物類称呼〔1775〕二「■ しいら。筑紫にて、猫づら」			
64	猫捕・猫取	町をうろついて猫を捕まえること。また、それを専門に行なう者。皮をはいで三味線屋に売った。				
65	猫鳥	(1)鳥「ふくろう(梟)」の異名。 (2)鳥「かもめ(鷗)」の異名。 【方言】 鳥。 (1)ふくろう(梟)。 (2)みみずく(木菟)。 (3)かもめ(鷗)。 (4)うみかもめ(海鷗)。 (5)うみねこ(海猫)。 (6)よたか(夜鷹)。 (7)けり(鶯)。 (8)たげり(田鳧)。 (9)ぬえ(■)。 (10)ごいさぎ(五位鷺)。	(1) ①物類称呼〔1775〕二「ふくろうふ。常陸国にて、ねこ鳥と称す(この鳥よく鼠を取によりてかくなづくるにや)」 ②随筆・権園随筆〔1851〕上「西国にて、梟をねこどりといへるは、かれが頭の、猫に似たるよりいふ、と人みなおもへり(略)皇国にてねこどりといふは、万葉におほよくめる、ぬえこどり、といふ名のつづまりたるを、(略)此鳥に、もてつけていふにやあらむ」 (2) * 物類称呼〔1775〕二「鷗 かもめ。中国に、うはみと称す。肥前にて、ねこどり又大雁といふ」			
66	猫撫(ねこな)	「ねこなでこえ(猫撫声)」の略。	* 滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕三・下「なんのかのと作声の猫撫(ネコナ)さ」			
67	猫撫声(ねこなでこえ)	「ねこなでこえ(猫撫声)」に同じ。	①彼女とゴミ箱〔1931〕〈一瀬直行〕橋下のルンペン「デカにしちやいやに猫撫声(ネコナゼゴエ)だし」 ②岬〔1975〕〈中上健次〕「最初は猫なげ声で、どこのボンボンやらと言う顔して」			

68	猫撫(ねこなで)	「ねこなでごえ(猫撫声)」の略。 【方言】 お世辞をいう者。おべっかを使う者。	* 扶桑大猷禅祖説吟〔1654〕二「なにが猫(ネコ)なでには生うず」			
69	猫撫親	自分の子に対してあまい親。	* 浄瑠璃・昔原伝授手習鑑〔1746〕四「ヲ泣くな、抱いてやらふと干鮭を、猫(ネコ)なで親が銜へ行く」			
70	猫撫声(ねこなでごえ)	猫が人になでられる時に出すような、媚びを含んだ声音(こわね)。また、自分になつかせようと、甘く、柔らかく言いかける語調。ねこなぜごえ。ねこなで。 【方言】 おせじのうまい人。おべっか者。	①史料編纂所本人天眼目抄〔1471～73〕一「をそろげに嘆る時もあり、又猫撫声(こへ)になる時もあり」 ②仮名草子・祇園物語〔1644頃〕上「猫(ネコ)なで声(コエ)をし、人に敬れんとするものあり」 ③浄瑠璃・井筒業平河内通〔1720〕二「かはい物やと猫なで声の撫でつさすれば」 ④警諭尽〔1786〕三「猫撫声(ネコナデゴエ)で」 ⑤腕くらべ〔1916～17〕〈永井荷風〉一八「さう云ふ事には馴れきった桔梗の女将が猫撫声で」			
71	猫猫	【ねこ(猫)】				
72	猫足(ねこのあし)	植物「げんのしょうこ(現証拠)」の異名。	* 大和本草批正〔1810頃〕九「牛扁(略)げんのせうこは、救荒本草闘牛児の一種なり(略)猫の足跡の如し。故に仙台にてねこのあしと云」			
73	猫尾(ねこのお)	【方言】 植物。 (1)ちからしば(力芝)。 (2)おかとらのお(岡虎尾)。 (3)えのころぐさ(狗児草)。 (4)さるおがせ(猿麻■)。				
74	猫糞(ねこのくそ)	【方言】 〔一〕植物。 (1)うつぼぐさ(靱草)。 (2)かたばみ(酢漿草)。 (3)あけび(通草)。または、通草(あけび)の実。 (4)むしかり(虫狩)。 (5)ごんずい(権草)。 (6)むらさきげまん(紫華鬘)。 (7)ごまぎ(胡麻木)。 〔二〕見かけが猫の糞(ふん)に似た駄菓子。				
75	猫の恋	交尾期にある猫。またそのふるまい。		「両方に髭があるなり猫の恋」(茶山)		
76	猫舌(ねこのした)	(1)キク科の多年草。本州の関東以西から九州の海岸の日当たりのよい砂地や崖に生える。茎は地表を長くはう。全体にごく細かい粗剛毛を密生する。葉は対生し長さ三センチメートル内外の卵形、または楕円形で両端はとがり、縁にまばらな鋸歯(きよし)がある。夏、径二センチメートル内外の黄色い頭花を枝の先につける。葉面がざらつくのが猫の舌に似ているのでこの名がある。はまぐるま。学名はWedelia robusta (2)植物「ふじまめ(藤豆)」の異名。 【方言】 植物。 (1)ふじまめ(藤豆)。 (2)ゆきのした(雪下)。 (3)はまぐるま(浜車)。				
77	猫尻尾(ねこのしっぽ)	【方言】 植物。 (1)ほそばのひめとらのお(細葉姫虎尾)。 (2)おかとらのお(岡虎尾)。 (3)さるおがせ(猿麻■)。 (4)くがいそう(九蓋草)。 (5)えのころぐさ(狗児草)。 (6)川柳(かわやなぎ)のつぼみ。 植物「なすな(薺)」の異名。				
78	猫三味線(ねこのしや)	【方言】 植物。 (1)なすな(薺)。 (2)かやつりぐさ(蚊屋吊草)。				
79	猫のたばけ	【方言】あけび (三猫糞)				
80	猫乳(ねこのちち)	クロウメドキ科の落葉高木。本州の神奈川県以西、四国、九州の暖地の雑木林に生える。高さ約一〇メートル。若枝は紫色を帯び白い斑点がある。葉は互生して柄をもち長さ約一〇センチメートル、倒卵状長楕円形で先は尾状にとがり、縁に細鋸歯(きよし)がある。夏、葉腋に短柄を出し、黄白色の小さな五弁花が数個集まってつく。果実は長楕円形で長さ約一センチメートル、黒く熟す。果実の形が猫の乳首に似ているところからこの名がある。学名はRhamnella franguloides				

81	猫爪(ねこのつめ)	【方言】 植物。 (1)ぬすびとはぎ(盗人萩)。 (2)いばら(茨)。 (3)ひかげのかずら(日陰蔓)。 (4)まんねんぐさ(万年草)。 (5)たかのつめ(鷹爪)。 (6)つめれんげ(爪連華)。 (7)ねこやなぎ(猫柳)。 (8)かかつがゆ(和活油)。 (9)すいば(酸葉)。				
82	猫手(ねこのて)	アワの一品種。花穂の末端が数条に分かれる。ねこまた。				
83	猫のはながら	【方言】 植物、つゆくさ(露草)。				
84	猫枕(ねこのまくら)	【ねこ猫】				
85	猫蚤	ノミ(隠翅)目ノミ科の昆虫。褐色で、体長は二ミリメートル内外。おもに猫に寄生するが人や犬につくこともある。全世界に広く分布。学名はCtenocephalides felis				
86	猫耳(ねこのみみ)	(1)植物「みみなぐさ(耳菜草)」の異名。 (2)海藻「えぞつのまた(蝦夷角叉)」の異名。 (3)海藻「つのまた(角叉)」の異名。 【方言】 (1)植物、みみなぐさ(耳菜草)。 (2)植物、むらさきはこべ(紫繁縷)。 (3)植物、おかおくま(岡小車)。 (4)植物、ははこぐさ(母子草)。 (5)植物、ぜがいそう(善界草)。 (6)植物、ゆきのした(雪下)。 (7)植物、こうやぼうき(高野菊)。 (8)植物、すべりひゆ(滑)。 (9)猫柳の花穂。 (10)茸、きくらげ(木耳)。 (11)海藻、つのまた(角叉)。 (12)小麦または米などの団子を汁に入れて煮たもの。 (13)猫の耳のように耳の中が不潔な者。 (14)糸車の轆を支える所。	(1) * 重訂本草綱目啓蒙〔1847〕一・隲草 「耳(略)卷耳は みみなぐさ ねずみのみみ ねこのみみ 備前、ほとけのみみ 能州」			
87	猫目(ねこのめ)	植物「ねこのめそう(猫目草)」の異名。 【方言】 植物。 (1)あかあずき(赤小豆)の一種。 (2)ねこやなぎ(猫柳)。 (3)じやのひげ(蛇鬚)。 (4)たちすずしろそう(立蘿蔔草)。 (5)のぶどう(野葡萄)。	* 物品識名〔1809〕「ネコノメ 猫児眼睛草」			
88	猫目草(ねこのめそう)	ユキノシタ科の多年草。各地の山野の湿ったところに群生して生える。高さ五～二〇センチメートル。茎は地表をはい、節から根をおろす。葉は卵形で小さく柄をもち対生する。三～四月、茎頂に淡黄色の小花が集まって咲く。花は花弁がなく、四個の萼片と花柱が二分する一個の雄しべと四個の雄しべからなる。果実は深く二裂し左右の大きさが違う。果実の形が猫の屋間の目に似ているところからこの名がある。漢名に猫児眼睛草をあてるが、これはトウダイグサの名。学名はChrysosplenium grayanum	* 日本植物名彙〔1884〕(松村任三)「ネコノメサウ」			
89	猫萩	マメ科のつる性多年草。各地の日当たりのよい草地や畑地に生える。茎は地表をはい、長さ一メートル余に達する。全体に淡褐色の軟毛を密布。葉は三個の小葉からなり、小葉は長さ約一・三センチメートルの倒卵形。夏から秋にかけて、葉腋に黄白色地に紫色の斑点のある小さな蝶形花を二～三個ずつつける。豆果は広卵形で長さ三～四ミリメートル、種子はただ一個。漢名、鉄馬鞭。学名はLespedeza pilosa	①物品識名〔1809〕「ネコハギ くさはぎ」 ②日本植物名彙〔1884〕(松村任三)「ネコハギ」			
90	猫葉蜘蛛	クモ綱クモ目ハグモ科のクモ。体長約四～五ミリメートル。頭胸部は黒灰色、腹部は黄褐色の長卵形で背面に黒斑がある。植物の葉上に日覆状の網をつくってその下にすみ、小昆虫を捕食する。近縁種にアシハグモ、カギハグモなどがある。本州以南に分布する。学名はDictyna felis				
91	猫八	江戸時代の物乞いの一種。猫、犬、鶏、鳥など鳥獣のなき声をまねて金品をもらって歩いた者。				
92	猫花	植物「おきなぐさ(翁草)」の異名。 【方言】 植物。 (1)ねこやなぎ(猫柳)。 (2)えのころぐさ(狗児草)。 (3)ひがんばな(彼岸花)。 (4)たちつぽすみれ(立壺菫)。	①大和本草批正〔1810頃〕九「猫草即白頭翁なり。九州にて、ねこばな」 ②重訂本草綱目啓蒙〔1847〕八・山草「白頭翁(略)ねこぐさ 筑前、ねこばな 筑後」			

93	猫糞	悪事を隠して素知らぬ顔すること。拾い物などをして、それを届けたり返したりしないで、自分のものとして素知らぬ顔すること。 【語源説】 (1)ネコノバ(猫糞)の義。猫は糞をした後、前足で砂をかけてそれを隠すところから〔すらんぐ＝峰峻康隆・猫も杓子も＝榎垣実・おしやれ語源抄＝坂部甲次郎〕。 (2)猫婆の義。徳川中期、本所に住んでいた猫好きの老婆が欲張りであったところから〔話の大事典＝日置昌一〕。	①洒落本・寸南破良意〔1775〕髪結「大方五つ明の客を取て居やアがつて、猫ばばの面(つら)で来て」 ②滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕三・上「おそれるほどなら湯も浴せず、小くなくて屈で居べいが、猫糞(ネコノバ)で、しゃアしゃアまちまちだ」 ③苦の世界〔1918～21〕(宇野浩二)四・一「千円出しましたよ、それをすっかり先生猫ばばをきめこんでしまつて」 ④断腸亭日乗(永井荷風)昭和一六年〔1941〕三月一日「万才は養育料を猫婆々にして其子を興行師に売りたりと云ふ」	〔第2版〕浮世床初「五日ばかり過ぎたら帰さうといふ客が、今日で一月になるが猫糞さ」		
94	猫額	猫の額のように狭いところ。	*俳諧・広原海〔1703〕五「猫額逆只入れぬ鼠木戸」			
95	猫火鉢	浅草今戸焼の火鉢。中に入れた火桶を上から覆うようにし、側面に穴をあけた火鉢。ふとんの中に入れて用いる。ねこ。ねこあなか。 【方言】 行火(あんか)。火箱。	①雑俳・柳多留・一五七〔1838～40〕「日当りてよく据て張る猫火鉢」 ②二人女房〔1891〕(尾崎紅葉)「隠居所へ引籠むで、猫火鉢(ネコヒバチ)にかじりついて」			
96	猫鰐(ねこぶか)	魚「ねこざめ(猫鮫)」の異名。				
97	猫鰐(ねこぶき)	(「猫」は鰐(いかり)のことで、鰐をさばく場所の垣の意)和船の船首小間の舷側の垣。ふつ「五尺」という。	*和漢船用集〔1766〕一〇・船処名之部「猫鰐(ネコフキ) 眉公雑字に出たり。猫は鰐也。■のかき也。和漢呼処符合せり。本邦小間を高く上者、ねこぶき、ねこぶく、といへり」 *諸国風俗問状答〔190前〕備後国福山領風俗問状答・正月・二「まとい葉は猫福と申、厚き物に候故、はやす時却て目ましく候」	〔第2版〕日葡		
98	猫ぶく	わら縄を編んで作った大形の厚いむしろ。	*夢声戦争日記(徳川夢声)昭和一八年〔1943〕九月七日「私は海苔ペン・猫ペン(鰐節をかけたの)である」			
99	猫弁	飯の上に薄くけずった鰐節(かつおぶし)と醤油をかけた弁当。	*俳諧・伊勢藤〔1668〕三・夏「猫ほねは夏さへ寒きあふき哉(二休)」			
100	猫骨	「ねこぼね(猫骨)の扇」の略。	*俳諧・俳諧之連歌(飛梅千句)〔1540〕墨何第十「ねすみの世なるいくさなりけり ねこぼねの扇をいは八嶋にて」			
101	猫骨の扇	「ねこま(猫間)の扇」に同じ。	①本草和名〔918頃〕「家狸一名猫 和名禰古末」 ②十卷本和名抄〔934頃〕七「猫 野王案猫(音苗 禰古麻)似虎而小能捕鼠為獵」 ③四季物語〔140頃中頃〕二月「仏の御国にもねこまといふけものは、かたちは虎によそひて、心はねぢけまがりたり」 ④志濃夫道舎歌集〔1868〕松籟草「埋火に夜がれせずなる老ねこま葉にぬる妻こひはせで」	四季物語「老いたるねこま野らに住むなど」〔第2版〕和名抄一八		
102	猫ま	「ねこ(猫)」の古名。 【方言】 槍(ひのき)の皮やわらで編んだ、一種の背■(はいのう)。	①中原高忠軍陣聞書〔1464〕「扇のねこまにすかず紋の事」 ②日葡辞書〔1603～04〕「Necoma (ネコマ) (訳) 一部の扇に施してある透かし彫りの細工で、扇の骨のうち、他のものより少し幅の広い外側の骨に見られるもの」 ③随筆・貞丈雑記〔1784頃〕八「按ずるにねこまはねこ目なるべし(略) 扇のほねの透の形丸くして細く又細くして丸し猫の唾の時々にかわる儀によりて名付たるなるべし」 *俳諧・鹿山集〔1651〕六・夏下「蝶ぼたんゑかく猫間のあふき哉(信元)」			
103	猫間	夏の扇の親骨の透かし文様の一種。格狭間(こうざま)の透かし文様を変形したものである。 【語源説】 (1)猫間氏が好んだところから〔南窓筆記・類聚名物考〕。 (2)猫目の義。文様が、猫の目の変化するさまに似るところから〔貞丈雑記・嬉遊笑覧〕。	①明月記・天福元年〔1233〕八月二日「当時南都去猫隣獸出一夜■二七九人一死者多、或又打殺伴獸、目如レ猫、其体如レ犬長」 ②徒然草〔1331頃〕八九「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなると、人のいひけるに」 ③浮世草子・好色一代女〔1686〕六・三「晝に猫またの蛇に化たる咄しをせしか」 ④談義本・田舎莊子〔1727〕中・疊之神道「それ猫といふ物、世にありて何の重宝もなし。先其心かだましく、膳のむかふのさかなを盗み(略)はては猫(ネコ) またといふ物になりて人を害す」			
104	猫間の扇	親骨に猫間の透かしをほどこした扇。猫骨の扇。猫骨。猫扇。				
105	猫間障子	障子の一部にガラスをはめこみ、その部分に、左右または上下に開閉できる小さな障子を設けたもの。				
106	猫間透	猫間の形に彫り透かすこと。また、そのもの				
107	猫股・猫又	(1)猫が年老いて尾が二つに分かれ、よく化けて人に害をするというもの。 (2)植物「ねこて(猫手)」の異名。 【方言】 (1)ねこて(猫手)。《ねこまた》 (2)ねこやなぎ(猫柳)。《ねこまた》 【語源説】 ((1)について) (1)ネコマタ(猫岐)の義。尾に岐のある猫の意か〔兎園小説〕。 (2)ネコマ(猫)のタケタルの意か〔俚言集覧〕。	①明月記・天福元年〔1233〕八月二日「当時南都去猫隣獸出一夜■二七九人一死者多、或又打殺伴獸、目如レ猫、其体如レ犬長」 ②徒然草〔1331頃〕八九「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなると、人のいひけるに」 ③浮世草子・好色一代女〔1686〕六・三「晝に猫またの蛇に化たる咄しをせしか」 ④談義本・田舎莊子〔1727〕中・疊之神道「それ猫といふ物、世にありて何の重宝もなし。先其心かだましく、膳のむかふのさかなを盗み(略)はては猫(ネコ) またといふ物になりて人を害す」	〔第2版〕徒然草「奥山にねこまたといふものありて」		
108	猫跨	(1)魚が大好物の猫さえも跨いで通るようなまずい魚。 (2)竹輪や蒲鉾をいう、囚人仲間の隠語。〔特殊語百科辞典〔1931〕〕 【方言】 (1)魚、ひいらぎ(終)。 (2)塩鮓(しおざけ)。 (3)塩鰯(しおます)のまずいもの。 (4)粗悪なくわやかまぼこ。				
109	猫股侍	根性の曲がつた侍をののしっている語。	*浄瑠璃・伊賀越乗掛合羽〔1777〕鎌倉山「鼠退がした猫股侍」			
110	猫股女郎	誠意のない女郎をののしっている語。	①洒落本・婦身噺〔1820〕居続宵治の段「しゃうねのくさったねこ又女郎(ぢょろう)」 ②随筆・十八大通〔1846〕「うぬ猫又女郎め、家に居たか」			

111	猫股婆	根性の曲がった婆をののしっていう語。	①浄瑠璃・蘆屋道満大内鑑〔1734〕―「ばばが首筋奴(やっこ)が片手、きやつといはずとにやんとなけ、猫(ネコ)またばばめが成敗は是よ是よ此注連縄(しめなは)」 ②浄瑠璃・糸桜本町育〔1777〕七「やも呆れ果てたる猫股婆(ネコマタババ)め」 ③警噺尽〔1786〕三「金花猫婆(ネコマタババ)じゃ」			
112	猫股武士	(猫股の尾が二つに分かれているところから)節操なく、二心ある武士をののしっていう語。	* 歌舞伎・景清〔1842〕「それがしが家永代所領の内、上総の長谷にて生れた此奴が親仁に、祿を与へて人間に拵へたを、源氏に喰ひつく猫股武士」			
113	猫間骨	猫間の透かしのある屋の骨。	* 海人藻芥〔1420〕「猫間骨は大臣家物也」			
114	猫豆	植物「たぬきまめ(狸豆)」の異名。	* 物品識名〔1809〕「たぬきまめ ネコマメ」			
115	猫目石	宝石の一つ。金緑石のうち、灯火にかざした時、一本の輝く糸が上下に動くもの。黄緑、翠緑、黄などで透明または半透明。また、石英のうち、似た外観を呈するものにもいう。キャッツ・アイ。	* 邪宗門〔1909〕〈北原白秋〕魔睡〈長田秀雄〕「誘惑の色あざやかな猫眼石の腕環」			
116	猫飯	猫に与える飯のように、削節を散らして醤油をかけたり、具をのせたりした飯。	* 洋食考〔1970〕〈山本嘉次郎〕二・二「これまで、盛切り飯は下品とされ、飯の上に具をのせるなぞは猫めしと卑しめられていた時代であった」			
117	猫餅	【方言】 (1)下等米で作った円筒状の餅を輪切りにしたもの。 (2)正月の餅を短冊のように切って蓄えたもの。				
118	猫柳	ヤナギ科の落葉低木。各地の水辺に生じ、また、観賞用に庭木ともされる。高さ〇・五〜三メートル。枝は叢生し小枝は長く灰白色の軟毛を敷くが後無毛となる。葉は長さ七〜一三センチメートルの革質長楕円形で縁に細鋸歯(きよし)がある。托葉は半月形。雌雄異株。早春、葉に先だって単性の花穂を出す。花穂は長楕円形で長さ四センチメートル内外で絹糸状の白毛を密生し、雄花は二本の雄しべと一個の腺体がある。冬芽は楕円形で大きく目立つ。最も普通にみられるヤナギであるだけでなく、日本産のヤナギの中で最も早く開花するものの一つで、花穂は、芽鱗を脱すると、すぐ銀白色に光り人目を引く。そのため、古来から人々の観賞するところとなり、俗称も多く、江戸時代の本草家が「かわやなぎ(川柳)」と称しているものの主体をなすのは本種と思われる。花穂を猫の尾にたとえてこの名がある。かわやなぎ。えのころやなぎ。たにがわやなぎ。学名はSalix gracilistyla 【方言】 (1)植物、やまやなぎ(山柳)。 (2)植物、こりやなぎ(行李柳)。 (3)柳の芽。柳の花。また、猫柳の花穂。	①重訂本草綱目啓蒙〔1847〕三一・喬木「水楊 かはやなぎ えのころやなぎ ころころやなぎ さるやなぎ 勢州、ねこやなぎ 同上」 ②日本植物名彙〔1884〕〈松村任三〕「ネコヤナギ」 ③桐の花〔1913〕〈北原白秋〕春を待つ間・早春「猫柳春の暗示のそことなをどる河辺を泣けてもとほる」 【語誌】 (1)古くは「かわやなぎ」と呼ばれ、「万葉・七・一二九三」の「あられ降り遠江(とほつあふみ)の吾跡(あと)川楊(かはやなぎ)刈れどもまたも生ふといふ余跡(あと)川楊(人麻呂歌集)」は、再生力が強く生長も盛んな猫柳の特徴を、断ち難い恋の思いに重ねて歌っている。 (2)平安以降も「かわやなぎ」「かわやぎ」は数多く詠まれているが、川辺の柳という意味で、必ずしも猫柳には限らなかつたようである。 (3)江戸時代に入ると、挙例の「重訂本草綱目啓蒙」のように、「かわやなぎ」の別名として「ねこやなぎ」の形が現われる。「えのころやなぎ」の称は猫でなく犬の子に見立てたものであろう。ただし「猫柳」は近世期編纂の歳時記類には見えず、一般的になったのは近代以降か。			
119	猫呼	猫を呼ぶときのチョツチョツという舌打ち。子どもを叱るときや気に入らないことのあったときにもする。				
120	猫分(ねこわけ)	【方言】 盛った食べ物を食べ残すこと。また、食べ残したもの。「ねこわけせんようにうつくしうたべてしまうちや」				
121	猫毛雨(ねこんけあめ)	【方言】 (1)小雨。 (2)霧雨。 (3)麦作に嫌う雨。				
122	猫子(ねこんご)	【方言】猫。(≡ねこんご)				
123	猫球(ねこんたま)	【方言】猫。(≡ねこんご)				

(付属資料 「猫」に関することわざ一覧)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	備考
1	ねこが嫌(おき)をいら う	(猫が、炭火に、ちよつと手を出してはすぐ引つめるように)ちよつかいを出すことのたとえ。	* 浄瑠璃・北条時義記(1726)三「あたりを見ては猫(ネコ)がおき、ちよといらふてはちよつと引き、顔に似合ぬ顔は」 * 談義本・成仙玉一口玄談(1785)四・土農工商渡世意得談「色声香味触を五微といふ。(略)猫(ネコ)の湯火(オキ)いらふ様にすれば、其芸淡味(みづくさ)く味(うま)みなし」 * 雪隠尽(1786)三「猫が嫌(オキ)障(イラ)ふやうに」		
2	ねこが乾鯉(からざけ)銚(くわ)しよう	大好物であることのたとえ。	* 雪隠尽(1786)三「猫(ネコ)が空鯉(カラザケ)銚(くは)へしやうに」		
3	ねこが肥えれば鯉節が瘦せる	一方に利があれば、他方に損がある。一方がよければ他方は悪くなることのたとえ。	* 浮世草子・世間学者気質(1768)二・二「猫(ネコ)が肥(コヘ)れば鯉節(カツオブシ)がやせ浪人の言表紙」		
4	ねこが糞(ば)を踏み	悪事を隠したり、他人のものを手に入れたりしてそしらぬ顔をする。ねこばばをする。	* 談本・南総里見八犬伝(1814~42)四・三五回「手ごみにされて、なほ阿容阿容と猫の糞(バ)踏れて花の開くものは、路傍の鴈(ひるがは)のみ」		
5	ねこ盛(さ)かる	「ねこ(猫)の恠」に同じ。	* 俳諧・増山の井(1663)二月「猫(ネコ)さかる 猫の妻恠」		
6	ねこする	こっそりと盗む。ねこばばする。	* 雜俳・へらず口(不及子編)(1734)「黒鼠猫(ネコ)した銀のをき所」 * 談義本・豊年珍話(1760)一・猫児の忠死「初も油断のならぬ世界、物を盗を猫(ネコ)するとは、かかる故にてあるらん」		
7	ねこに=会った「追われた」鼠	すっかり畏縮(いしゆく)して、策略などが浮かばないこと。また、危難をのがれることができないさま。猫の前の鼠。	* 新猿楽記(1061~65頃)「雪如し鼠会し猫、雄相し廉」 * 将門記承徳三年点(1099)「之を遁るる者は、宛も猫(ネコ)に遇へる鼠の穴を失へるがごとし」 * 浮世草子・忠義太平記大全(1717)四・四条宮河の納涼の事「ただ猫にあひしねずみの如く、顔は土色になって」 * 雪隠尽(1786)三「猫に追(ヲハ)れた鼠(ネズミ)の加(ゴト)く」		
8	ねこに石仏	「ねこ(猫)に小判」に同じ。	* 浮世草子・好色一代女(1686)一・三「是を京女の目利(めきき)にのぼさるは猫(ネコ)に石仏(イシボトケ)、そばに置てから何の氣遣もなし」		
9	ねこに鯉の番	もつとも不適当な行ないをすることのたとえ。猫にさかなの番。	* 都鄙問答(1739)二・或学者商人の学問を議「商人は食欲多く、毎々に食(むさぼる)ことを所作となす。夫に無微の教をなすは、猫(ネコ)に鯉(カツホ)の番をさするに同じ」 * 談義本・根無草(1763~69)前・三「彼は若衆好の沙汰あれば、猫にかつをの番とやらで、心にく思ひしかども、只今の忠義にめで、大事の役目申し付くる」		
10	ねこに=鯉	好物をそばに置いて、油断ができないこと。あやまちが起こりやすい状況であることのたとえ。また、危険であることのたとえ。猫に乾鯉(からざけ)。	* 甲陽軍鑑(170初)品五一「取たる国郡を人の方へ渡すといふ儀は、下劣の喩に猫(ネコ)に鯉(カツホ)の節(フシ)を預たると申も」 * 浄瑠璃・百日曾我(1700頃)傾城請状「時宗にたらされてお預りの大事のめしうと、ふかふかと渡さるは、猫にかつを武士に似合はぬ甘い事」 * 筒録(1706)「己が妻に惑い、北条一家の者共に猫に鯉節を預け、敵に刀の柄を渡したる様にして」 * 浮世草子・傾城禁短気(1711)六・二「女中ばかりでござる所へ、あの好い器量で節々の見舞。何共猫(ネコ)に鯉節(カツオブシ)」		
11	ねこに傘	(猫の前で、たたんだ傘を急に開くと、びっくりするところから)驚くこと。また、いやがることなどのたとえ。	* 浮世草子・好色五人女(1686)三・四「猫(ネコ)に傘(カラカサ)見せたるところ、いやな■つきをして」		
12	ねこに乾鯉(からざけ)	「ねこ(猫)に鯉節(かつおふし)」に同じ。	* 俳諧・毛吹草(1638)二「ねこにからざけ」		
13	ねこに紙袋(かんぶくろ)	(猫に紙袋をかぶせると、前へは歩かないで、後ろへさがるところから)あとずさりすること。	* 雪隠尽(1786)三「猫(ネコ)に紙袋(カンブクロ)で跡ぢよりじゃ」		
14	ねこに鯉	何の反応もないことのたとえ。また、物の価値がわからないことのたとえ。牛に鯉文。馬の耳に念仏。			

15	ねこに＝小判[＝小判を見せる]	高価なものを与えても、何の反応も効果もないことのたとえ。また、どんな貴重なものでも、その価値がわからない者に与えては、何の役にも立たないことのたとえ。豚に真珠。猫に石仏。	* 評判記・野良立役舞台大鏡[1687]水嶋四郎兵衛「ちんふんかんの絶句律詩につづってしさいをこねましたによって猫(ネコ)に小判(コバン)を見せたやうでよひやらわらいやらひとつもがてんまいりませぬ」 * 俳諧・鶉衣[1727～79]後・中・七六・六林文集序「音を知る人は稀に、巍々洋々もいたづらに猫に小判の耳なればとて」 * 和訓栞[1777～1862]「猫に小判見せるといふ諺は野客叢書に對レ牛彈レ琴といふ類也」 * 青井戸[1972]〈秦恒平〉「依田宗未ほどの人が私のために茶を点てて呉れるのは望外のことだった。〈略〉猫に小判だなあと苦笑いし」	{第5・6版}「豚に真珠」も同趣意。	
16	ねこに肴の番	「ねこ(猫)に鯉(かつお)の番」に同じ。	* 俳諧・二息[1693]上「御局の宿直は猫の肴番」		
17	ねこには遊女が成る	遊女が死ぬと猫に生まれかわるという俗説。逆に「傾城には猫が成る」ともいう。	* 浄瑠璃・鎌倉三代記[1716]二「実にや世上の諺に、猫(ネコ)には遊女(イウジョ)が成(ナ)るとやら」		
18	ねこに木天蓼(またたび)お女郎に小判	大好物のたとえ。また、効果が著しいことのたとえ。		{第6版}大好物のたとえ。また、効果のいちじるしいたとえ。下を略して「猫に木天蓼」とも。	
19	ねこにもなれば虎にもなる	場合によって、やさしくもなれば猛々しくもなるたとえ。			
20	ねこの足	植物「げんのしょうこ(現証拠)」の異名。	* 大和本草批正[1810頃]九「牛扁(略)げんのせうこは、救荒本草闘牛児の一種なり(略)猫の足跡の如し。故に仙台にてねこのあしと云」		
21	ねこの一物(いちもつ)	湯女(ゆな)のこと。	* 浮世草子・傾城新色三味線[1718]四・大坂・二「むかしより風呂屋女を猿と云を、近年わるじやれ中間(なかま)の伝受にて、ねこの一物(イチモツ)といへり、是爪をかくすと云事成べし」		
22	ねこの尾	植物。(以下方言) (1)ちからしば(力芝)。秋田県鹿角郡 (2)おかとらのお(岡虎尾)。木曾 (3)えのころぐさ(狗見草)。香川県 (4)さるおがせ(猿麻特)。岐阜県飛騨			
23	ねこの皮	三味線。	* 俳諧・俳諧猿轢[1680]「猫の皮のしなだれこゑ、ぼち当りの句也」 * 雑俳・柳多留・四五[1808]「土佐ぶしを猫の皮にてうまくひき」		
24	ねこの寒恋(かんごい)	冬を嫌う猫でも、さすがに真夏には冬の寒さを恋しがること。			
25	ねこの金玉	南瓜(かぼちゃ)をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧[1915]〕			
26	ねこの食い残し	(猫は全部を食わず食い残すせがあるところから) 食いちらした様子のたとえ。			
27	ねこの糞	〔一〕植物。(以下方言) (1)うつぼぐさ(藪草)。 (2)かたばみ(酢漿草)。 (3)あけび(通草)。または、通草(あけび)の実。 (4)むしかり(虫狩)。 (5)ごんずい(権萃)。 (6)むらさきけまん(紫華壺)。 (7)ごまぎ(胡麻木)。 〔二〕見かけが猫の糞(ふん)に似た駄菓子。			
28	ねこの首に鈴を付ける	猫の来るのがすぐわかるように、鼠が猫の首に鈴をつける。あれこれと議論をしても、実行する段になると、だれがやるにしても至難のわざであるというたとえ。また、考えはよくてもだれも実行できず議論倒れになるというたとえ。	* 仮名草子・伊曾保物語[1639頃]下・一七「『然らば、このうちより誰出てか、ねこのくびにすずをつけ給はんや』といふに、上らうねずみより下鼠にいたるまで、『我つけん』と云ものなし。是によて、そのたびのきぢやうことおはでたいさんしぬ」 * 記念碑[1955]〈堀田善衛〉「誰が猫の首に鈴をつけにゆくか、というあれだよ」		
29	ねこの恋	春に牡猫が牝猫を恋うこと。猫が交尾期になること。猫の妻恋い。猫盛(さか)る。	* 俳諧・六百番俳諧発句合[1677]五九番「頭玉にぬけるなみたや猫の恋く曲言」 * 雑俳・柳多留・二三[1789]「猫の恋ぶたれる時が別れなり」 * 俳諧・七番日記・文化一〇年[1813]二月「なの花にまぶれて来たり猫の恋」		
30	ねこの子の子猫獅子の子の子獅子	カタカナのネはかつて「子」と書き、これは、漢字の音では「し」、訓では「こ」であるところから、「子」の字を一二書いて、たわむれにそれをよんだもの。「宇治拾遺物語-三・一七」に見られる。			

31	ねこの子の貰いがけ 嫁の取りがけ	その当座だけ大切に扱われることのたとえ。			
32	ねこの舌	(1)キク科の多年草。本州の関東以西から九州の海岸の日当たりのよい砂地や崖に生える。茎は地表を長くはう。全体にごく細かい粗剛毛を密生する。葉は対生し長さ三センチメートル内外の卵形、または楕円形で両端はとがり、縁にまばらな鋸歯(きよし)がある。夏、径二センチメートル内外の黄色い頭花を枝の先につける。葉面がざらつくのが猫の舌に似ているのでこの名がある。はまぐるま。学名はWedelia robusta (2)植物「ふじまめ(藤豆)」の異名。 *植物(以下方言) (1)ふじまめ(藤豆)。《ねこのした》三重県一部030 (2)ゆきのした(雪下)。《ねこのした》山形県飽海郡139 (3)はまぐるま(浜車)。《ねこのした》長崎県福江市964鹿児島県日置郡965			
33	ねこの尻尾	(1)なくてもよいもののたとえ。 (2)植物。(以下方言) ①ほそばのひめとらのお(細葉姫虎尾)。 ②おかとらのお(岡虎尾)。 ③さるおがせ(猿麻■)。 ④くがいそう(九蓋草)。 ⑤えのころぐさ(狗児草)。 ⑥川柳(かわやなぎ)のつぼみ。 *以下方言 一番下の子。末の子。 (2)居ても居なくてもよい人。あってもなくてもよいもの。	*合巻・教草女房形氣[1846~68]一・二・九「口のきかれぬ親類は、ありても無くても猫(ネコ)の尻尾(シッポ)なり」		
34	ねこの三味線	植物「なずな(薺)」の異名。 *植物。(以下方言) (1)なずな(薺)。 (2)かやつりぐさ(蚊屋吊草)。			
35	ねこの尻に才槌	ふさわしくないこと、また、つり合わないことのたとえ。	*諺苑[1797]「猫のしりへさい槌」		
36	ねこのたばけ	あけびの別名。			
37	ねこの乳	クロウメドキ科の落葉高木。本州の神奈川県以西、四国、九州の暖地の雑木林に生える。高さ約一〇メートル。若枝は紫色を帯び白い斑点がある。葉は互生して柄をもち長さ約一〇センチメートル、倒卵状長楕円形で先は尾状にとがり、縁に細鋸歯(きよし)がある。夏、葉腋に短柄を出し、黄白色の小さな五弁花が数個集まってつく。果実は長楕円形で長さ約一センチメートル、黒く熟す。果実の形が猫の乳首に似ているところからこの名がある。学名はRhamnella franguloides			
38	ねこの=夫(つま)[=妻(つま)]	春の交尾期にある猫。	*俳諧・捨子集[1659]春「やねの棟は猫の妻をや恋の山(正俊)」 *妻木[1904~06]〈松瀬青々〉春「糸巻を擲たれけり猫の妻」		
39	ねこの妻(つま)恋い	「ねこ(猫)の恋」に同じ。	*俳諧・毛吹草[1638]二「二月(略)猫の妻恋、鳥のさかる」 *俳諧・はなひ草(寛永二〇年本)[1643]四季之詞・正月「猫(ネコ)の妻恋(ツマコヒ)」		
40	ねこの爪	植物。(以下方言) (1)ぬすびとはぎ(盗人萩)。 (2)いばら(茨)。 (3)ひかげのかずら(日陰蔓)。 (4)まんねんぐさ(万年草)。 (5)たかのつめ(鷹爪)。 (6)つめれんげ(爪蓮華)。 (7)ねこやなぎ(猫柳)。 (8)かかつがゆ(和活油)。 (9)すいば(酸漿)。			
41	ねこの手	アワの一品種。花穂の末端が数条に分かれる。ねこまた。			
42	ねこの手も借りたい	非常に忙しく手不足な様子をたとえている。	*浄瑠璃・関八州繁馬[1724]二「上から下までおめでた事、猫の手もかりたい忙しさ」 *遠方の人[1941]〈森山啓〉「『谷津伝八の墓』は盂蘭盆には勿論、猫の手も借りたい季節にさへ野花が供へられてゐることがあつて」		

43	ねこのネズミを伺うよう	いったんからだを伏せてねらいをつけ、一気に飛びつく様子をたとえている。	* 宇治拾遺[1221頃]一・二・一九「虎はまづ人を食はんとは、猫の鼠をうかがうやうにひれふして、しばしばかりありて大口をあきて飛びかかり」	
44	ねこの蚤取り	猫の蚤を取る。また、それを業としたもの。	* 浮世草子・西鶴織留[1694]三・四「五十ばかりの男風呂敷をかたにかけて、猫(ネコ)の蚤(ノミ)を取りましょと声立まほりける」 * 随筆・燕石雑誌[1811]三・九「又猫の蚤をとらんと呼びあるきて、妻子(うから)を養ひしものもありけるとぞ」	
45	ねこの鼻	常に冷たいもののたとえ。	* 譬喩尽[1786]三「猫の鼻(ハナ)と愛宕山とは正夏も冷(ひ)ゆる」 * 諺苑[1797]「猫の鼻と傾城の心は寒(つめたい)」	
46	ねこのはながら	植物(以下方言) つゆくさ(露草)		
47	ねこの歯に蚤	(猫が蚤を噛(か)みあてることはまれであるところから) めったにないこと。不確かなことのたとえ。 犬の蚤の噛みあて。	* 諺苑[1797]「狗の歯に蚤(略)猫の歯に蚤とも云」	
48	ねこの額	(猫の額が狭いところから) 面積の狭いことのたとえ。	* 浮世草子・御前義経記[1700]八・一「下の間は猫の額(ヒタヒ)ほどある所なれども、諸方の入込む湊にて」 * 草枕[1906]〈夏目漱石〉五「なかに猫の額見た様な小さな汚ねえ町でさあ」 * 夢の中での日常[1948]〈島尾敏雄〉「猫の額のように狭い不潔な庭には」	
49	ねこの額の物を鼠の伺う	大胆不敵なこと。また、到底できそうもないことのたとえ。	* 源平盛衰記[14C前]二〇・佐渡大場勢汰事「当時の寸法を以て平家の世をとらんとし給はん事は、いさいさ富士の峰と長け並べ、猫(ネコ)の額(ヒタヒ)の物を鼠(ネズミ)の伺(ウカガ)ふ喩へにや」	
50	ねこの糞	駄菓子の一つ。はったい粉を飴で練り固めた長さ三センチメートル余の棒状のもの。また、大豆を飴で固めたものもある。 本名不詳。 * 以下方言 (1)見かけが猫の糞に似た駄菓子。 (2)猫の糞の形をした化石。	* 浮世草子・小児養育氣質[1773]一・一「千鳥松風や切砂糖、猫(ネコ)の糞(フン)と異名の付た一文菓子を袖に入置て」	
51	ねこの前の鼠	「ねこ(猫)に会った鼠」に同じ。	* 康頼宝物集[1179頃]上「猫の前の鼠、鵜の前の鮎、何れか残害を免れたる物ある」	
52	ねこの前の鼠の昼寝	危害が迫っているのに気付かないで油断していることのたとえ。	* 浄瑠璃・曾我虎が磨[1711頃]中「永々御逗留あらんこと、猫の前の鼠のひるね、危し危し」	
53	ねこの耳	(1)植物「みみなぐさ(耳菜草)」の異名。 (2)海藻「えぞつのまた(蝦夷角叉)」の異名。 (3)海藻「つのまた(角叉)」の異名。 【方言】(1)植物、みみなぐさ(耳菜草)。 (2)植物、むらさはこべ(紫繁縷)。 (3)植物、おかおぐるま(岡小車)。 (4)植物、ははこぐさ(母子草)。 (5)植物、ぜがいそう(善界草)。 (6)植物、ゆきのした(雪下)。 (7)植物、こうやぼうき(高野箒)。 (8)植物、すべりひゆ(滑■)。 (9)猫柳の花穂。 (10)茸、きくらげ(木耳)。 (11)海藻、つのまた(角叉)。 (12)小麦または米などの団子を汁に入れて煮たもの。 (13)猫の耳のように耳の中が不潔な者。 (14)糸車の錘を支える所。	(1)植物「みみなぐさ(耳菜草)」の異名。より * 重訂本草綱目啓蒙[1847]一・一・隔草「■耳(略)卷耳は みみなぐさ ねずみのみ み ねこのみみ 備前、ほとけのみみ 能州」	
54	ねこの＝目[＝目玉]	(1)(猫のひとみは明るさによって形を変えるところから)移り変わりの激しいことのたとえ。 (2)山窩(さんか)仲間の隠語。 (イ)懐中時計。[隠語輯覧{1915}] (ロ)銀貨。[特殊語百科辞典{1931}] 【方言】 (1)飴(あめ)。あめ玉。 (2)蠍座(さそりざ)の尾端の二星。 (3)言うことがすぐ変わる。また、大うそつき。		
55	ねこの横座	(猫のいる横の座席の意から) 一家のうちで最も下位の座で、嫁のいる座席。嫁座敷。		

56	ねこは土用に三日鼻 曇し	猫は土用の三日だけ暑がるが、あとは一 年中寒がっている。	* 譬喩尽〔1786〕三「猫は土用(ドヨウ)に 三日(ミツカ)鼻熱(ハナアツ)し」		
57	ねこ耳を洗うと雨が 降る	猫が耳を洗うように手でこすときは雨が 降るという言い伝え。			
58	ねこも杓子も	猫が耳を洗うように手でこすときは雨が 降るという言い伝え。	* 咄本・一休咄〔1668〕一・四「生れては死 ぬるなりけりをしなべてしゃかもだるまもねこ もしやくしも」 * 談義本・根無草〔1763～69〕後・一「貴き も賤しきも賢きも愚かなるものも、猫(ネコ)も 飲=(シヤクシ)もおしなべて」 * 思出の記〔1900～01〕〈徳富蘆花〉三・ 八「時に明治十五年、猫も杓子も政社政党 組織に熱中する時節」		
59	ねこも茶を飲む	生意気に分不相応なことをするたとえ。また、人真似をするたとえ。	* 俚言集覧〔1797頃〕「猫も茶を飲 こしゃく なることを云」		
60	ねこより増し	猫よりは役に立って、少しはましであるとい うこと。子どもなどが時に役に立つことが ある場合にいう。	* 歌舞伎・小春穂沖津白浪(小狐礼三)〔18 64〕大詰「葉を持ち磯松奥へはひる。三太兵 衛障子をしめ『娘、猫(ネコ)にはままだな あ』」		
61	ねこを負う	【方言】 (1)背中を丸くしている。猫背である。 (2)着物が背中中でたるんでいる。着物を背 にためている。			
62	ねこを追うより＝魚を のけよ[魚を引け]	末梢的なことにこだわらず根本を正せとい うたとえ。			
63	ねこを被る	本性をかくしておとなしそうに見せる。また、知 っていないながら知らないふりをする。 【語源説】 うわべを猫のように柔和にする意。または ネゴザ(寝莫座)をかぶる意	* 歌舞伎・盲長屋梅加賀薫〔1886〕七幕 「わたしも初めはお前のやうに猫(ネコ)をか ぶって遣って見たが」 * 思出の記〔1900～01〕〈徳富蘆花〉六・ 七「猫をかぶるのが上手で若い男は直ぐ欺さ れてしまふが」 * 羽なれば〔1975〕〈小田実〉二九「家で それぐらい猫かぶって見せるんは屁とも思 いませんのや」		
64	ねこを背負(しょう)	【方言】 ⇒ねこを負う			
65	ねこを抱く	清酒醸造の原料の玄米を横領・窃盗する ことをいう、酒造職人の隠語。			
66	ねこを繋ぐ	【方言】 山野でくそをする。野ぐそをする。			
67	ねこを泣かす	地方から都会へ出て来た男女の金品をだ まし取ることをいう、詐欺仲間の隠語。			

(付属資料 「ねこ」に関する言葉一覧)

No.	項目	内容	日本国語大辞典	広辞苑	古事類苑	備考
1	ねこ(根子)	物干竿をかけるために、物干の柱などに横にうちつける小さな木片。	* 洒落本・一目土堤〔1788〕自叙「蕎麦に寐粉有、物乾に根子(ネコ)あり」			
2	ねこ(寝子)	【方言】(1)よく寝る者。よく寝る子。 (2)朝、いつまでも起きない人。朝寝坊。 (3)若者宿の仲間。				
3	ねこ(寝子)をかく	寝る。 【方言】眠る。寝入る。	* 俚言集覧〔1797頃〕「ねこをかく 寝ることをねこをかくとも云」			
4	ねこ(寝粉)	(1)古くなって食用にならなくなった粉。古くなって使えなくなった粉。 (2)うどん粉などを水や湯などに溶かすとき、溶けないでできる粒。ままこ。 【方言】 (1)粉が古くなって固まったり、虫が付いたりしたもの。 (2)粉を水や湯で溶く際に粒になって溶けないもの。まま粉。 (3)米や麦などが古くなり食べられなくなったもの。 (4)売れ残りの品物。 【語源説】 ((2)について)ヒネコ(陳粉)の上略〔上方語源辞典＝前田勇〕。	(1)より * 洒落本・一目土堤〔1788〕自叙「蕎麦に寐粉(ネコ)有、物乾に根子あり」 * 社会百面相〔1902〕(内田魯庵)貧書生「菌磨す、あれはネコになつて菌磨を升で買って来て龍腦を些とばかり交せて」			
5	ねこ	「ねこだ」に同じ。				
6	ねこい	しつこい。くだい。淡泊でない。ねつい。	* 洒落本・吉原楊枝〔1788〕「あいかたの新造はずいぶん小うにて、あまりねこ無いのを見立てあげるがよし」			
7	ねこかし(寝転)	(「ねこかし」とも) 寝たまま放っておくこと。特に、遊里で相手が寝ている間に、こっそりいなくなってしまうことをいう。	* 俳諧・焦尾琴〔1701〕風・梅花之篇「こんにやくあたまあぐむこすりまく(里東) 寝こかしを明日かへる迄ゆめいふな(潘川)」 * 洒落本・金枕遊女相談〔1772～81頃〕「あとはきつねつきのはなれぎわを見るやうにせう氣を失ひ、ふんばたかりねてたかいびき、客にねこかしにあひ」 * 滑稽本・浮世床〔1813～23〕初・上「コレ、よくてめへ寝こかしにいたナ」 * はやり唄〔1902〕(小杉天外)六「貴女方は、私を寝騙(ネコカ)しにして行つてうんだもの、本当に酷(ひど)いよ」			
8	ねこかす(寝転)	(「ねこかす」とも) (1)横に寝かす。寝かしつける。 (2)寝たまま放しておく。寝っぱなしにしておく。特に、遊里で相手が寝ている間にいなくなる。 (3)寝たまま時をすごす。 【方言】 寝かせる。	(2) * 洒落本・娼妓綱目〔1791〕二「忠兵衛は下ざしきくらいに(略)身をしのひある折から梅川は座敷の客をねこかして手水の顔でここへ来り」 * 滑稽本・七偏人〔1857～63〕四・下「お前食(みんな)を寝こかして、髪を結に住て知らぬ顔とはづるいづるい」	[第2版]娼妓綱目 「梅川は座敷の客をねこかして手水の顔でここへ来り」		
9	ねこぎ(根扱)	樹木や草などを根ごと引き抜くこと。転じて、あますところなく取ること。根こそぎ。 【方言】 なにもかも。ありったけ。根こそぎ。副詞的にも用いる。「酒をねこぎ飲んだ」	* 温故知新書〔1484〕「堀 ネコギ 木草」 * 日葡辞書〔1603～04〕「キヲnecoguini(ネコギニ) スル」 * 狂言記・富士松〔1660〕「松をばねこぎにするぞ」 * 浮世草子・けいせい伝受紙子〔1710〕五・一「大岸かたへ夜盗におしい、宮内親子を打きり、家財をねこぎに仕れば」 * 浄瑠璃・大塔宮囃子〔1723〕一「次ぎの骨牌(かるた)は八九三、是も目出度し鎌倉牌、根こぎにしゃんと掻き込みし親は二三四」	[第2版]日葡「キヲネコギニスル」 [第3版]狂、富士松「松をばねこぎにするぞ」		
10	根小熊	「バンダ」に同じ。				
11	ねこくり(根ー)	なにもかも。ありったけ。根こそぎ。(＝ねこすり)				
12	ねこげら	【ねこ(猫)】				
13	ねこける(寝転)	正体なくぐっすり寝る。	* いさなり〔1891〕(幸田露伴)二四「飲めば直(ぢき)たわいなく鼾声(いびき)かいて眠転(ネコケ)て仕舞って」 * 新浦島〔1895〕(幸田露伴)三「働くだけを働いて寝るだけ寝こけて、夫婦中好く親子庇護ひ合つて寿命がつきたら死ぬるばかり」			
14	ねこざ	【ねこ(猫)】				
15	ねこさいあみ(根拵網)	大型の定置漁網。建網類のうち台網の一種。定置網漁業の先進地である富山湾の台網はすでに江戸時代初頭から使用され、この系統の網で各地に伝播されたものも少なくなかったが、そのうち、江戸後期に伊豆や相模に伝えられたものをいう。明治中期の資料でみると、垣網(かきあみ)の長さ二〇〇間(約三六〇メートル)、所要の漁船六隻、漁夫数十人にも及ぶ網であった。				

16	ねこじ(根掘)	樹木などを根のついたまま掘り取ること。また、そのもの。→ねごし(根越)。 【方言】木の切り株。木の根っこ。	* 古事記[712]上「天の香山の五百津真賢木を根許士(ねこじ)爾(に)許士(こじ)て〈許より下の五字は音を以ある〉」 * 書紀[720]神武即位前(熱田本訓)「乃ち丹生の川上の五百箇の真賢木を抜取(ネコシ)にして諸神を祭(いは)ひたまふ」 * 夫木[1310頃]二〇「神代よりくらぬやたのかがみ山ねこしのさか木色もかはらず」 * 藤原俊光」 * 浄瑠璃・平仮名盛衰記[1739]—「生る手比の並木の松ぐつと根こじに引抜て」 * 読本・春雨物語[1808]樊■下「見やるに、大なる木の根こじにて、流くだるが」	記上「根許士(ねこじ)にこじて」		
17	ねこじたのかがみて(根古志形鏡建)	「根古志形」は神事の真櫛(まさかき)を根こじにしてこじまげたような形状という)上端に擬宝珠(ぎぼうし)を入れた柱の下端を、根古志形の足の組み遣えの中央に通して立てるようにした、鏡を掛ける調度。宮殿や神殿内の敷設に用いた。				
18	ねこしやまこし(嶺越山)	峰や山を越すこと。副詞的に用い、ある動作が峰や山を越えて行なわれるさまを表わす。	* 古今[905~914]東歌・一〇九八「甲斐がねをねこし山こし吹く風を人にもがもやことづてやらんくひうた」 * 俳諧・幣ふくろ[1774]「根こし山ごし吹風に板戸をならすおと、みちか夜のよすがら、たたいねがてにのみあかしつ」			
19	ねこじる(根快)	【方言】根ごと引き抜く。				
20	ねこじれる(寝拗)	【方言】(1)睡眠中、首の筋を遣える。寝遣える。 (2)寝そびれる。 (3)幼児が眠りばなを起こされてむずかる。				
21	ねこず(根掘)	(用例は連用形だけで、活用は上二段か四段か不明) 樹木などを根のついたまま掘り取る。	* 書紀[720]景行二年九月(北野本訓)「則ち磯津(しつ)の山(やま)の賢木(さかき)を抜(ネコシ)り」 * 拾遺[1005~07頃か]雑春・一〇〇八「いにし年ねこしてうゑしわかやとのわか木の梅は花さきにけり(安倍広庭)」 * 四季物語[140中頃か]正月「わがみ山のあふひの根を根こして」 * 浮世草子・好色万金丹[1694]五・一「吉野の桜をねこじて植へ」	拾遺雑「いにし年ねこじて植ゑし我が宿の若木の梅は花咲きにけり」		
22	ねこすり(根一)	【方言】(1)なにもかも。ありっただけ。根こそぎ。全部。副詞的にも用いる。 (2)網を張って魚を追ひ込む漁法。				
23	ねこずる(寝一)	→ねこじれる(寝拗)				
24	ねこずれ(寝擦)	【方言】床擦れ。夢瘡(じよくそう)。				
25	ねこそぎ(根刮)	根まですっかり抜き取ること。転じて、残すところなく、すべてすること。また、副詞的に、余すところなく、ことごとくの意にも用いる。ねこそげ。 【方言】なにもかも。ありっただけ。副詞的にも用いる。	* 人情本・春色辰巳園[1833~35]三・一 条「此方もねこそぎ身をいれて、苦勞をする気の二人が中」 * 腕くらべ[1916~17]〈永井荷風〉五「根こそぎ男の自由になるやうな色っぽい女がと思ふ事もある」 * 暗夜行路[1921~37]〈志賀直哉〉一・二「彼は自分の普段の気分を根(ネ)こそぎ何処かへ持って行かれたやうな気がした」 * 死霊・二章[1946~48]〈埴谷雄高〉「敵を根こそぎ駆逐することなしには、現世の支配も精神界永遠の王座も期し得ぬ」			
26	ねこそげ(根刮)	「ねこそぎ(根刮)」に同じ。 【方言】なにもかも。ありっただけ。根こそぎ。副詞的にも用いる。	* 浮世草子・世間胸算用[1692]三・二「此大釜に一歩一はいほしや、根(ネ)こそげにすまず事じゃ」 * 譬喩尽[1786]三「根刷(ネコソゲ)にする」 * 俳諧・八番日記・文政四年[1821]九月「初茸や根こそげ取た迹か又」 * 人情本・明烏後正夢[1821~24]四・一九回「こっちでも猫ばばであやすが、あのあまがことは、わたしが根(ネ)こそげ知ていやすわな」	{第2版} 胸算用三「この大釜に一歩一はいほしや、根こそげにすまず事じゃ」		
27	ねこそべる(寝一)	【方言】寝そべる。				
28	ねこだ	わらやなわで編んだ大形のむしろ。また、背負袋。ねこ。 【方言】 (1)わら製の敷物。大形のむしろ。 (2)櫛(ひのき)の皮やわらで編んだ、一種の背■(はいのう)。 (3)荷を負うための、わら製の背中当て。 【語源説】 (1)ネコは猫の義で、猫が爪をいだようであるところから。ダはワラダのダ(名言通)。 (2)ネコはネコ(寝処)の義か。タは助辞(俚言集覧)。 (3)ネゴサ(子臥坐)の義(言元梯)。	* 俳諧・玉海集[1656]四・冬「ねこたといふ物をとり出でしかせ侍し程に」 * 雑俳・柳多留・三[1768]「百姓はねこだのうへで死にたがり」 * 俗語考[1841]ねこだ「今京師などにて福業とて、正月に敷事あるは此なごりなるべし。又かの藁の上の表藉(うわしき)を藁藉(ネコタ)と云」	柳柳「百姓はねこだの上で死にたがり」		
29	ねこだながし(一流)	砂金選鉱法の一つ。「ねこだ」または「ねこ」と呼ばれるわらで編んだむしろの上に砂金を含む砂や砕いた金鉱石を水とともに流すと、比重の重い金粒がむしろの目に残る。砂鍋・砂鉄などの選別にも用いる。ねこながし。	* 日本山海名物図会[1754]—「金山淘法(きんざんかねゆり)絵(略)からうすにてつき、猫田ながしにかけて」			
30	ねこながし(一流)	「ねこだながし(一流)」に同じ。				

31	ねこねこ	【方言】 (1)歩くさまを表わす語。のこのこ。 (2)重い荷を背負って歩くさまを表わす語。 (3)多いさまを表わす語。たつぷり。また、 着膨れているさまを表わす語。				
32	ねこひく	女の笑い声や笑顔をいう、盗人仲間の隠語。【隠語輯覧(1915)】				
33	ねこぶ(根瘤)	松などの根もとの、ふくれて瘤のようになったもの。				
75	寝込み	(ネゴミとも) 寝入っている最中。		浄、大経師「毎晩毎晩寝込にお見まひ申せども」		
34	ねこむ(寝込)	(1)ぐっすりと寝入る。熟睡する。 * 洒落本・芳深交話〔1780〕「明六つでずい立よ、寐(ネ)こんだらおこしてくれろよ」 * 滑稽本・七偏人〔1857～63〕四・中「イヤもう夕(ゆうべ)っから飲つづけで、ぐっすり寐(ネ)こみ」 * 葛飾砂子〔1900〕〈泉鏡花〉六「未だに生死のほども覚束ないほど寝込んで居る連の男を」 * 焚火〔1920〕〈志賀直哉〉「寝込んで了ふと、明方は随分寒いでせうよ」 (2)病気になるって床につく。 * 或る死、或る生〔1939〕〈保高德蔵〉—「毫碌して二十日も一ヶ月も寝込まれるやうでは、どうしていいか、彼女には見当がつかず」	(1) * 洒落本・芳深交話〔1780〕「明六つでずい立よ、寐(ネ)こんだらおこしてくれろよ」 * 滑稽本・七偏人〔1857～63〕四・中「イヤもう夕(ゆうべ)っから飲つづけで、ぐっすり寐(ネ)こみ」 * 葛飾砂子〔1900〕〈泉鏡花〉六「未だに生死のほども覚束ないほど寝込んで居る連の男を」 * 焚火〔1920〕〈志賀直哉〉「寝込んで了ふと、明方は随分寒いでせうよ」 (2) * 或る死、或る生〔1939〕〈保高德蔵〉—「毫碌して二十日も一ヶ月も寝込まれるやうでは、どうしていいか、彼女には見当がつかず」			
35	ねこもの	【方言】悪性のはれ物。根太。(ニにくも)				
36	ねころがる(寝転)	「ねころぶ(寝転)」に同じ。	* 煙管〔1933〕〈新田潤〕「そんな仕事の合間合間には仰向けに寝転(ネコロガ)って何かどうか本を読んでゐた」 * 月は東に〔1970～71〕〈安岡章太郎〕五「土堤の草原に体ごと投げ出すように寝転がったとたん」			
37	ねころばう(寝転)	「ねころぶ(寝転)」に同じ。	* 人情本・明烏後正夢〔1821～24〕三・一六回「ママ爰へしはは寐(ネ)ころはいて、とても寐られぬとはいふても、みなこれ傍辺へ憚有」			
38	ねころばる(寝転)	「ねころぶ(寝転)」に同じ。	* 滑稽本・浮世風呂〔1809～13〕二・下「おれはあぐらをかきましただが、おめへはねころばりましたの」			
39	ねころび(寝転)	寝転ぶこと。	* 狂言記・抜鼓〔1660〕「ねころびうって、あの池へはまるならば」			
40	ねころぶ(寝転)	ごろつとからだを横にする。無造作に横になる。ねころばる。ねころばう。ねころがる。ねころがる。	* 為忠集〔鎌倉中か〕「萩の葉は吹く秋風のつまやらんくるとひとしくねころひにけり」 * 羅蘭日辞書〔1595〕「Reclivis 〈略〉ヨリカカリ necorobitaru (ネコロビタル) モノ」 * 咄本・私可多咄〔1671〕二・四「いつの比ぞや、糺のもりにて、ゑむしろをよこにしきて、人々ねころひぬけるを見」 * 俳諧・古今俳諧明題集〔1763〕夏「偃■(ネコロベ)ば庭のかくるぼたむかなく一屋」			
41	ねこんざい(根金際)	〈「こんざい」は「こんりんざい(金輪際)」の略。「根こそぎ」と「こんりんざい」が合わさってきた語) 一底の底。多く、副詞的に用いる。底の底まで全部。まったく。とことんまで。すっかり。ねごんぞう。ねこんず。	* 雑俳・川柳評万句合・宝暦一〇〔1760〕義二「ねこんざい盗んだとて草の庵」 * 浄瑠璃・神靈矢口渡〔1770〕四「元手の強い尊氏様も根(ネ)こんざいぶち負て、一番切替ふと鎌倉へ盆がへ」 * 滑稽本・続膝栗毛〔1810～22〕三・下「国サアおんなじとこで、ねこんざいからしりやうてゐる中だアもの」	神靈矢口渡「元手の強い尊氏様も根(ネ)こんざい打負て」		
42	ねこんず	「ねこんざい(根金際)」の変化した語。	* 長唄・大原女〔1810〕「おっ立てられても笑はれても、根(ネ)こんず惚れたが性根ぢやえ」			